271-135
1200501356572
271
135

始

1486
5

佐藤龜太郎著

最新 兒童心理と家庭教育

株式會社 南光社出版

271-135

緒言

瓜食めば子供思ほゆ、栗食めば況して忍ばゆ、作處より來りしものぞ、まなかひに、もとなかかりて安寢しなさぬ、

白金も黄金も玉も何せんに、まされる寶子にしかめやも、

三千世界の親の心は皆此の山上憶良の歌によりて現はされて居る、而して此の親心は日常子女養育の任に當る母によりて最も直接に最も眞劍に傾注さるゝのである。

最良の教育所は家庭であり最良の教師は母であると云はれて居る、それは母親から溢れ出づる無限の溫情と、幼兒に對する犧牲的の慈愛こそ教師として最も尊い資格であるからであらう、ペスタロッチは「子供の生活の初期は母がなければ自然の根柢が培かはれない、德育も知育も將た國民改善の術も母の手に委ねよ」といつた、至純なる母の慈愛の滴りに潤うて始めて子供は健全なる發育を遂げ、圓滿なる德性の若芽が萌え出づるのである、母の感化は實に母子の感情が渾然相融和する所に行はるゝのである、然しながら親の愛は本來本能的であり、盲目的に陷り易い、親たるの愛は理性によりて醇化されたる愛でなければならぬ。フレーベルは幼少なる子供をば、すら〳〵と伸び行く草花に譬へた、而して其の天眞爛熳なる自然的發達を保育する教師をば園丁に擬らへたのである、眞に能く草花を培養するには植物發育の本然の理法を知らねばならぬことを示唆したのである。

眞に子供を愛するものは子供其の物を知らねばならぬのである、子供の本性を理解して、これを愆るこ

となく、最も善美なる發達を爲さしむることは、獨り我が子に對する親としての務めであるのみならず又國家社會に對する重要なる義務の一つである、夫故に子供の心理に關する知識を養ふことは親として特に母として取るべき修養の第一線でなければならぬ。

著者心理學を專攻し、長く女子教育の任に在りて、將來の母たるものに對し、常に此の信念を以て兒童心理學の一斑を講じたのである、されどそれは唯だ僅かに其の一斑に過ぎないのである、更に尙ほ一層精深の程度に於てこれを知らしむることの必要を痛切に感ずるのである、ここに廣く最近の心理學を涉獵し自ら考究したる材料を基礎として本書を公にしたるは蓋し兒童生活の特質と其の精神發達の傾向とを明かにして家庭教育並に一般兒童研究上の參考に資せんとするの微衷に外ならぬのである。

昭和六年十一月二十一日

著者識す

最新 兒童心理と家庭教育 目次

緒言

第一篇 行動の發達

第一章 行動の基礎……一

一 行動の意義
二 人類行動の分類――自動運動(有機的反射)――反射運動――本能運動――本能的基礎を有する運動――有意運動
三 反射運動と本能運動との別

第二章 本能の發達……六

一 本能と有機體の構造
二 本能と意識
三 固定本能と未定本能
四 本能の特性――本能の繼續性――本能の定期性――本能の一時性――本能の變化性
五 本能と精神發達との關係
六 本能の分類

第三章 自己保存の本能……一七

一 自己保存の本能の發現と自己意識
二 榮養本能

三　恐怖本能――嬰兒の恐怖反應とその反應の原因――音の恐怖――視覺的恐怖――動物の恐怖――子供の恐怖の一般的傾向――恐怖の取扱
四　鬪爭本能
五　蒐集本能
六　狩獵本能

第四章　種族保存の本能……二八

一　種族保存の本能の發現
二　性的本能
三　養護本能
四　種族保存の本能と他の本能との關係
五　種族保存の本能の正しき發達
六　築巢本能
七　移住本能

第五章　社會的本能……三三

一　社會的本能の形式
二　社交本能
三　子供の同情心の基礎
四　功名心
五　忠實愛他

第六章　發達的本能……三七

一　模倣――反射的模倣――自發的模倣――劇的模倣――有意的模倣――理想的模倣
二　好奇心(求知本能)――好奇心と注意と興味――經驗的好奇心――推論的好奇心――好奇心と質問――好奇心と教育
三　遊戲

第七章　子供の遊戲……四五

一　遊戲とは如何なる活動であるか
二　遊戲に關する學說――過剩勢力說――準備說――反復說――休養說――生物學的說明――
三　子供の遊戲の一般的傾向
四　遊戲に於ける自由と其の年齡による變化
五　遊戲に於ける力と其の年齡による變化
六　遊戲に於ける本能要素と其の年齡による變化
七　各發達時期に於ける遊戲――嬰兒期――幼兒前期――幼兒後期――兒童期――青年期
八　遊戲の性的要素
九　遊戲の種族的差異
一〇　遊戲の價値
一一　遊戲と發達
一二　遊戲の種類――感覺遊戲――模倣遊戲――劇的遊戲――機會遊戲(偶然遊び)――追掛け遊び――構成遊戲――悟性遊戲――用具遊戲――機械遊戲――行進遊戲――球戲其他
一三　玩具――嬰兒期――幼兒前期――幼兒後期――兒童期
一四　玩具使用上の注意

第八章　發達表……七一

I　子供の言語の發達本能……七一

一　言語の起原性質及形式
二　言語の發達と心的要素——言語の準備的發達——言語發達の初期に於ける心的活動——言語と模倣——言語に於ける自發性
三　言語發達の階段——喃語期(反射期又は本能期)——單語練習期——單語習得期——文語期——語彙擴張期
四　言語發達と知力

II　子供の繪畫……八五

一　子供の繪畫の根柢
二　繪畫能力の發達階段——濫畫期——輪廓期——自覺期——再生期
三　子供の繪畫の特質
四　繪畫と他の能力との關係

第九章　調整本能……九五

I　子供の德性……九五

一　無道德的時期
二　道德的及不道德的基礎
三　品性の內的及外的要素
四　道德的發達の階段——嬰兒期——幼兒期——兒童期——青年期
五　道德的發達の過渡期
六　子供の自我
七　子供の我儘——能動的我儘——受動的我儘
八　自我としての名譽心
九　所有欲
一〇　好奇的破壞
一一　子供の嘘言——子供の嘘言の種類

II　子供の不良行爲……一二

一　不良行爲の原因——家庭の缺陷と不良行爲——環境的原因——不良行爲と本能要素——精神薄弱と不良行爲
二　年齡と犯罪
三　子供の惡行の性質
四　惡行の豫防

第十章　家庭に於ける德性涵養……一三

一　道德的訓練
二　習慣の形式
三　家庭に於て養成すべき良習——滿三歲頃から育成すべき良習——兒童期に於て養ふべき良習
四　家庭に於ける指導の方法——感化の方法としての示範——指導方法としての命令——反省手段としての訓諭——矯正手段としての懲罰——奬勵手段としての褒賞
五　指導手段としての暗示

第二篇　精神の發達……一三六

第十一章　發達に關する基礎概念……一三六

一　心の意義
二　精神發達の基礎
三　發達に關する一般法則——成長の原理——約說の原理——繼續性の原理——自個活動の原理

第十二章　嬰兒の意識

一　新生兒の意識……一四一
二　新生兒の感覺
三　嬰兒意識の發達

第十三章　感覺

一　感覺の意義……一四七
二　感覺の分類
三　視覺
　1　視覺の一般的說明——視覺刺戟——視覺器官——色覺、光覺——色覺の三屬性——色の對比——殘像——色盲
　2　視覺的經驗の發達——嬰兒の視覺——視覺發達の四階段——嬰兒の視覺と色
四　聽覺
　1　聽覺の一般的說明——聽覺刺戟——聽覺器官——聽覺の範圍——聲域
　2　聽覺的經驗の發達——嬰兒の聽覺——音の局所限定
五　味覺
　1　味覺の一般的說明——味覺の性質——味覺器官——味覺の分類——食物の味——味覺の中和及對比
　2　味覺的經驗の發達
六　嗅覺
　1　嗅覺の一般的說明——嗅覺刺戟——嗅覺器官
　2　嗅覺的經驗の發達
七　皮膚感覺
　1　皮膚感覺の一般的說明　皮膚感覺の器官——溫覺——冷覺——壓覺——痛覺
　2　皮膚感覺の發達

八　有機感覺
九　運動感覺
一〇　感覺の發達と教育上の注意

第十四章　知覺作用

I　知覺作用の一般的說明……一七〇
一　知覺の意義……一七〇
二　直觀——知覺の統一作用と類化作用
三　知覺の種類——空間知覺——視空間——觸空間——聽空間——嗅空間——時間知覺
四　知覺の錯誤——錯覺——幻覺
II　知覺作用の發達……一七五
一　諸感覺の協合
二　注意作用の發達と知覺
三　空間知覺の發達——嬰兒の觸空間知覺——嬰兒の聽空間知覺——嬰兒の視空間知覺
四　知覺の發達と教育上の注意

第十五章　記憶作用

I　記憶作用の一般的說明……一八五
一　觀念及表象
二　聯想
三　聯合の法則——接近律——類似律——反對律——反復律——生氣律
四　記憶作用の過程——印象の識得——把住——再生——再認識

五　記憶の種類——機械的記憶——論理的記憶
六　記憶に關する諸種の條件
七　記憶型
八　忘却
九　記憶の障礙——健忘
一〇　記憶の錯誤

II　記憶の發達……一九二

一　認識の發達
二　幼兒期に於ける記憶の主なる型式
三　想起作用の發達
四　正しき記憶の發達
五　各時期に於ける記憶作用の發達——年齢による記憶內容の傾向——直接記憶　永續記憶——記憶型と年齢——機械的記憶と論理的記憶——記憶發達の性的差異
六　記憶作用と教育上の注意

第十六章　想像作用……二〇二

I　想像作用の一般的說明……二〇二

一　想像の意義
二　想像の種類——受動的想像——能動的想像
三　理想、空想、妄想

II　想像作用の發達……二〇四

一　子供の想像の特質——子供の想像には拘束がない——年齢と想像作用の變化——想像と事實との混同
二　子供の想像と童話
三　想像の發達と教育上の注意

第十七章　思考作用……二一二

I　思考作用の一般的說明……二一二

一　思考の意義
二　概念の意義
三　概念の構成
四　概念の種類——心理的概念——論理的概念
五　判斷作用
六　判斷作用の種類——肯定判斷　否定判斷——全稱判斷——特稱判斷——實然判斷　蓋然判斷——定言判斷——假言判斷
七　推理
八　推理作用の種類——直接推理——間接推理——演繹推理——歸納推理——類比推理

II　思考作用の發達……二二〇

一　觀念活動の要素としての知覺
二　概念の發達
三　幼兒期に於ける判斷の主なる種類
四　因果關係の思想の發達
五　子供の推理力
六　子供の結論の形式
七　子供の數の觀念及び計算力の發達
八　思考作用の發達と教育上の注意

第十八章　注意作用……二三五

I　注意作用の一般的說明……二三五
一　心的現象——意識——無意識——半意識
二　注意の意義
三　注意の範圍
四　注意の動搖
五　注意の條件——客觀的條件——主觀的條件
六　注意の種類——有意注意——無意注意——不注意——注意散漫——放心——注意の型式
II　注意作用の發達……二四一
一　幼兒注意の一般的傾向
二　子供の注意作用の特質——注意の範圍の狹小——注意集中力の薄弱——注意持續力に乏しい——注意の散漫——自發的より努力的に進む
三　注意の發達と教育
第十九章　感情の一般的說明……二四五
一　感情の意義
二　感情の三方向
三　感情の分類
1　簡單感情
2　情緒
一　情緒の表出
二　情緒の表出に關するゼームス・ランゲ說
三　情緒の種類
3　情操
一　情操の意義
二　情操の種類——知的情操——道德的情操——美的情操——美的感情を生ずる客觀的要素——對稱分割——類形の反復——黃金率
三　宗教的情操
四　感情の障礎——感情減退——感情亢進——感情倒錯
第二十章　感情の發達……二五五
一　新生兒の情緒的表出
二　有機的感情
三　事物に關する感情
四　人に關する感情
五　愛情
六　同情及愛他
七　憎惡、嫉妬、猜疑、殘酷
八　恐怖と心配
九　憤怒
一〇　子供の憤怒と其の條件
一一　美感の發達
一二　宗教的感情の發達
一三　情緒と本能
一四　感情と教育
第二十一章　意志……二七五

一　意志の意義
二　意志發達の基礎的動作
三　無意運動
四　有意運動——動機
五　衝動運動
六　意志の分類——單一意志(衝動意志)——複雜意志——有意的意志——選擇的意志
七　意志の發達——意志の進化的發達——意志の退化的發達
八　意志作用の二方面
九　意志の障礙
一〇　子供の意志的努力の發達
一一　子供の意志作用に於ける自發性の發達
一二　自制心の發現

第三篇　身體の發達……二八七

第二十二章　子供の發育……二八七

一　出生より成熟に至るまでの發育概説
二　大人の身體と子供の身體との比較
三　成長と季節其他との關係
四　腦髓の發育
五　生齒期
六　心身發達の相關
七　發達時期の區分

第二十三章　身體各部運動の發達……三〇〇

一　身體運動發達の順序
二　子供の運動の特質
三　子供の運動制止力
四　基本的運動と從屬的運動
五　呼吸運動と肺活量
六　年齡と脈搏
七　手指運動の發達
八　握力と知能との關係——左手利——右手利

第二十四章　睡眠……三〇九

一　各年齡に於ける睡眠時間
二　睡眠に關する學説——生理學的睡眠説——組織學的睡眠説——化學的睡眠説——心理學的睡眠説——生物學的睡眠説
三　睡眠の性質及深さ
四　睡眠と夢——夢の原因——フロイドの説——子供の典型的夢

第二十五章　個性……三三

一　個性の成立
二　特異性と遺傳——ガルトンの法則——メンデルの法則
三　習得的特徴は遺傳するか
四　突然性變化説
五　人間に於ける遺傳——チャールス・ダーキンの家系——エドワード・ダットルの家系——ヂュークの家系

六　知的素質
——マルチン・カリカークの家系
七　情緒的素質
八　遺傳と敎育

最新 兒童心理と家庭敎育

文學士　佐藤龜太郎著

第一篇　行動の發達

第一章　行動の基礎

行動の意義

一、行動の意義　有機體が其の環境から受くる刺戟に對して爲す所の凡ての反應は廣き意味に於てこれを行動といふのである、有ゆる生物の行動は其の根本に於て物理・化學的並に其の構造上の基礎を有する、此の行動といふ言葉の中には心的、物理的及び生理的の活動凡てを含むのである、從つて凡ての有機體の生活は共れに作用する外界の影響に反應する活動其物であると見ることが出來る、アメーバの如き單細胞動物でさへも、ある種の刺戟に對しては種々複雜なる反應運動をなすことが觀察せらるゝのである、それ等は動物生活の最も下等なる形式ではあるが、其の反應は有機體の物質共自身に固有なる可動性と、彈力性とに基礎を有するのである、かゝる有機體物質の感受性を説明すべき化學的及物理的性質を玆に論述することは出來ぬが、然し凡ての行動の基礎として此の如き事實だけは認めねばならぬ、かゝる性質がなけ

れば凡ての有機體は無活動の生命なき單なる物質に止るのである。

行動を發生的に見るときに其の最も單純なる形式は上述の如く有機體が或種の刺戟に對する物理・化學的の反應であつて、これが凡ての行動の先驅をなすものである、生物學者はこれを傾動（トロピズム）と名つけて居る、希臘語の轉向を意味する詞から來たのである、これは全有機體を組織する物質固有の感受性が唯一の基礎を爲して居るのである、此の如き反應を起すべき外部の力に關しては種々實驗研究がなされてあるが、ダーヴンポルトの說によれば一、化物的物質、二、水、三、導體の密度、四、質量の作因、五、重力、六、電氣力、七、光、八、熱等である、而して傾動（トロピズム）は其の刺戟を起すべき外部の力の性質に關するものであるから、日光々線の刺戟によるものはヘリオトロピズム、重力に關するものはゼオトロピズム、化學的刺戟によるものはケモトロピズム、熱の强度によるものはサーモトロピズム等と稱せられてゐる、これを進化論的に解釋して見るときに刺戟に對する反應によりて現はされたる有機體物質の原始的感受性は凡ての行動の基礎を形成するものであるといふことが出來る。

有機體が種々なる刺戟に對して反應することの必要上からそれに適應する特種の構造組織の發達が、生物進化の過程に於て現はれて來るといふことに可能であると考られ得るのである、新陳代謝、呼吸、循環、分泌、排泄、乃至生殖等の如き有機體の作用は其の特殊化されたる構造、組織と共に最初の進化に屬するものである、單細胞有機體は細胞の增殖成長によりて其の構造組織が分化され、其の機能が特殊化されて多細胞有機體に進化し、種々特殊の刺戟に反應し得るやうに發達したのである構造及機能の分化の中でも高等なる行動形式の最も著しいものは、神經原を單位とする神經系統である、高等動物殊に人間の行動が

人類行動の分類

有機的反射（自動運動）

單なる生活力の活動と異つた作用をするのは此の進化した構造に條件づけらるゝのである。勿論此の生活力活動と雖も神經系統によりて統一協合されて完成さるゝのである、高等なる行動系統の鍵は實に神經組織にあるのである、其の組織は三つの劃然たる機能を有し、而も互に相關聯せる三つの群れより成る、其の一つは外界の刺戟を受け入れる末梢器官、及びそれを內部に傳達すべき纖維で、卽ち感受裝置である、其の二は中樞細胞と感受刺戟とを聯絡せしめ運動神經を興奮せしむる所の聯想纖維、卽ち中樞裝置である、第三は中樞神經系統から筋肉に其の衝動を移轉すべき傳導纖維及末梢運動神經原又は筋肉に於ける軸索突起である。此の筋肉こそ外部から見る所の行動として現はるべき特殊化されたる器官である、此等の行動に關する一般的說明からして更に人類の行動について見るとき、これを數種の異りたる型式に分類することが出來る。

二、人類行動の分類、或る反應は何等の練習を要せずに而かも能く行はれ、或る反應は永き練習期間の後も而も至つて貧弱に行けるものゝあることは何人も普通によく觀察する事實である、嬰兒の生るゝや直ちに呼吸し、食物を消化する、習得なしに始めから食物を取り、手を握り、四肢を動かす、强き光線に遇ふては目を閉づる、而も何等意識する所はないのである、而して數ケ月の後ちに至りて徐々に言語、步行を習得するに至る、一般に人類の行動は二つの主なる型式に分かるゝ、卽ち生得的行動と習得的行動とである、前者は通常これを有機的反射（自動運動）と固有反射及本能運動（ヒキツケ）、後者は習慣及有意的行動といふ。

呼吸、血行、消化、分泌、排泄等の運動は一度起ると一生涯を通して遮斷せらるゝことなしに繼續する、而かも此等の運動は生得的であり始めから實際に役立ちて比較的完全に行はる、これを有機的反射又は自

動運動といふ、此等の運動の多くは律動的で、其の刺戟は有機體其れ自身にあり、全有機體の健全なる活動のために働く、第二の反射運動は瞳孔の收縮、嚏、瞬、咳、眼睫の調節其他單純なる外部の刺戟に對して有機體の一局部の單純なる反應である、此等も亦生得的(無習得的)のもので、普通單に反射運動と稱するものである、第三は啼泣、恐怖、爭鬪、攝食、好奇等で、前二者の如く全く習得なしに遂行せらるゝ複雜なる活動であるが、唯だ前者と異る所は外部の刺戟に對する反應が有機體の全部又は著しく廣き部分に於て行はるゝにある、普通これを本能又は本能運動といふ、第四は步行、言語、遊戲、構造、破壞等其他習得ならざる傾向を有し、一層複雜なる動作である、此等の多くは數種の本能が同時に複合して働くか又は本能と習慣との結合である、これを本能的基礎を有する行動として前三者とは區別して置くのである、有意運動については意志發達の章に於て更に說明する。

反射運動

本能運動

本能的基礎を有する運動

有意運動

反射と本能との別

三、反射運動と本能運動との區別　反射運動も本能運動も皆一定の刺戟に對して起る生得的の反應で、豫め其の目的を知ることなく又何等習得を要せずして而も能く其の目的に適合したる行動を營み得る點に於ては異る所はない、唯だ兩者の區別せらるゝ主なる點は一、既に前に述べたる如く身體の一局部に於て比較的單純なる反應をなすものを反射と云ひ、其の複雜なるものを本能といふのである、二、反射運動は其の結果を意識することあるも、其の運動は多くは無意識的に行はるゝものである、然るに本能に於ては其の全體の目的は意識せらるゝことなく、盲目的に行はるゝのであるが、其の個々の運動については意識的に行はるゝのである、三、反射運動は固定的であるが、本能運動は變化的である、嚴密にいへば人類の動作には絕對的の意味に於て固定的なる何物もないのであるが、唯だ其處に何等の變化發展をもなさゞる頑固なる反應があるのである、此の單純にして固定的なる生得的反應を反射と稱し、複雜にして變化的の生得的反應をば本能といふのである。

上述の如く人類の行動は反射及本能の如き生得的運動を基礎とし、これに經驗及習慣が加はり本能的基礎を有する複雜なる行動が發達し、更らに精神發達に伴ふて漸次本能の力を統制し高等なる知能の働きによりて思慮分別し取捨選擇して實行する所の有意的行動に進むのである。

種々なる本能が個人生活に十分なる發現をなすに至るまでの順序を知ることは教育上頗る有意義なる事柄である、一般に子供の行動には其の成長の時期によりて各特徵がある、而してそれ等の時期に於ては內部の傾向と子供の知識範圍の熟練と興味との間には吾々の見逃がすべからざる關係があるのである。

第二章　本能の發達

有機體の本能と構造

一、有機體の本能と構造　兒童の生活の殊に幼少兒の活動を支配するものは主として本能的運動であるから本能の性質を理解することは兒童の生活と其の發達とを理解するに最も大切なることであるから以下本能に關して稍々詳しく述ぶることゝする。

本能は有機體の構造と密切なる關係を有するものである。如何なる動物の本能でも其の構造に適應して居るものであることは動物の生活を見れば直ちに之を知ることが出來る、猫は犬に追はれたときに鳥の如く飛び、蛙の如く水に潜らうとはしない又鳩は危險から逃るために猫の如く走らうとはしない。兎は木に攀ることはしないのである、牛の齒と胃との特殊なる構造は草を喰ふべき強き本能を有つて居るのである。同一動物の生活に於ても更に新らしい構造が造らるゝか、又はそれが完成したるときには新らしい本能が發達する、鳥類は其の翼が發達せざる間は飛ばんとする本能を示さないのである又、卵を生む時期に至らざれば築巣本能は現はれて來ぬのである。仔獅子は其の爪牙が發達せざる間は他の大なる動物を攻擊することはしない。寧ろそれを避けるのである。夫故に各種類の動物の各本能は或る特殊の構造の身體的條件に其の基礎を有するといふことは之を信ずるに十分なる理由があるのである、鳥類の翼、嘴、爪等の僅かの差違からして、食物を獲、眠り、築巣、危險より遁るゝ等の本能運動の形式が甚しく異ることがある。夫故に各本能的動作は其れを遂行するに適應したる身體的條件及機關裝置を豫想するのである、而して若き動物に於ては其の本能が發現するまでに其の條件が具備され發達しなければならぬのである。

二、本能と意識　自動的の運動は意識なしに又意識によりて妨げらることなしに行はるものである又、目の反射運動の如き咳の如きも意識によりて起さるゝものではなく一定の機械作用の結果である。此の如き運動は前以て其の起ることを知つて居ても意識を以て遮ぎることは殆ど不可能である。本能運動も同樣に無意識的な機械作用であるかといふに必ずしも容易くそうであると認むることは出來ないのである。併し突然大なる響きを聞き、恐ろしい物に出遇ふたときに驚いて跳び上ることがあるがそんな場合には自分の意識ではどうしても止めることは出來ないのである。猫が毬や鼠の後を追ふのはそれが必要と考へて捕へやうとするのではない、動く物體を見ると直ちに追跡裝置を運動せしむるのである。人間でも動物でもこんなことは學んで知り得たことではない、意識なしに突然に行はるのである。首を斬られたる蛇は棒に捲みつくと同樣に、赤く熱したる鐵の棒にも捲みつく、此の事實は反射的の本能的反應の機械的な特質を説明するものである。即ち一定の機械作用は或る一定の刺戟又はそれに類似の刺戟によつて働きを起すものであることが明かである。

本能的運動は意識によるよりも寧ろ構造上に關係することは種々學者の研究によつて示されてある。ゼンニング氏の實驗によれば動物生活の最も單純なる形式の一つである、滴蟲は微細な食物の分子を取り、仲間が相集り、酸を避けてCO^2に近づく等の活動をなし、一見すると自ら選擇し意識によつて差向けらるゝ如き印象を與へるのであるが、併し注意深く實驗し觀察するとそれは主として機械的作用に過ぎないことが解る。此の動物の纖毛は殆ど絶えず動いて居るので其の運動によつて體が前方に追ひやらるのである。若し彼等が酸類の方に近づくときには其の纖毛の運動は逆轉する、かくして有害なる物質から退くのであ

る、然るに前と反對の方向から酸を近づけると纖毛に對しては同樣の影響を與へ、却つて之を避くることなく酸の中に入るのである。CO^2は纖毛に對しては酸と反對の影響を與へる從つて彼等が前方に進むときに其の中に入るのである。又食物を選擇するといふことも誤りである。彼等は食物として價値あるものでもない凡て細い分子に觸るればそれを取るのであると。

人間に於ても固定的の本能は習慣の如く殆ど機械的に働く、或る動作が反復繰り返して行はれ同一種類の運動が同一刺戟に反應して爲さるゝときには意識は不必要である、活動が圓滑に行はるゝときには意識がそれを支配する必要がないのである、唯だ反應の樣式が同一運動でなく種々雜多な行動を爲し得る場合に意識的活動が必要となるのである。新しい動物が他の動物に見附けられたときには馴れ〳〵しく近寄るか、急いで退却するか、或は猛烈に攻擊するか種々の爲し得べき事が示唆せらるゝが、そんな場合には其れと似寄つた動物に對して爲した過去の經驗によりて意識的に決定せらるゝ。若し其處に顯はれた動物が猫と鼠の如く一方に優勢な力を有する遺傳的の强敵であるときには極めて僅かな意識を以て逃遁の動作が機械的に行はるゝのである。

與へられた場合に於て唯だ一つの反應動作のみを可能とする動物は意識的動作を不要としないが、一定の刺戟に對して一つ以上の複雜なる反應動作の樣式を有する動物は意識的智能によりて利益され得るのである。本能運動は、それが純粹の(意識の加はらざる)本能的である限りは常に盲目的である。而して二つの本能的傾向が一つの刺戟によりて喚起されたる場合には過去の經驗に照らして最も適當なる反應を選ぶべく意識的智能の眼が開かるゝのである。僅かに數種の固定的本能のみを有する魚類や昆蟲類の如き動物にありては唯だ一つの反應の樣式を有するの外何等經驗的意識を有するものとは考へられない。彼等は再三再四餌の鈎に引懸り、身を焦かす光りに近づくるのである。鷄の如き高等動物に於ては毛蟲の如き不愉快なる感じのするものが最初に其の嘴に觸ると、三度目には之を避くべき新しき反應動作を現はす、これは過去の經驗からの閃めきとも見らるべきものである。況んや人類に於ては幼少兒童と雖も其の動作は過去の經驗よりして更に新しき最も都合のよい結果を得るが如きものに變化して行くのである、固定したる本能を有する動物の如く一生涯を通して又子孫から子孫へと同一事を同一方法に於て爲すには何等の熟練をも要しないのであるが、之と異つた方法に於て爲し、經驗によりて速かに習得すべき能力は智能の働きによらねばならぬ。人間には他の動物よりも多くの本能があるが、人は智能によつて動作を多種多樣ならしめ經驗によりて之を變形し改めて行くが故に何等の本能をも有たないやうに見えるのである。斯くして人の行動は反射的本能的な動物的動作に始まり經驗を積み知識を增すに從つて其の欲するが如き結果を考へて然る後に行動するといふ有意的行爲に進み行くのである。

個定本能と未定本能

三、固定本能と未定本能　或る動物には如何なる環境にありても常に必ず有要な動作がある、例へば蜂が蜜を集め巢を作るが如き、蜘蛛が網を張り蠅を捕へるが如きことは絕對的に固定したるものとは云へぬが比較的不變のものである。然るに或る特殊の場合に於てのみ有要な動作がある、それは普通に一般的な未定の性質を有する、例へば鷄の雛には運動する物體に後から附いて行く本能がある、これは多くの場合親鳥の後を追ふて行くのであるが、必ずしも親鳥に限らず人にでも又は犬にでも附いて行くべき傾向に變化するのである。夫故に固定的な本能は出生と共に既に完全であり、其の種屬の子孫を通して幾千年の後々に

本能の特性

至るも變化しないもので下等動物に多いのである。又一般的な未定の本能は始から不完全で有意的の動作と區別することも殆ど困難なるほど其の形式も變化するもので高等動物に多い。

四、本能の特性、1**本能の繼續性**　動物の構造組織は年齢と共に變化し其の行動も或る時期に必要であつたものも或る時期には不必要となる、從つて或る種類の動物の本能も始めから終りまで一樣の强さを有するものでないといふことが豫想せらるゝ、此の點に關して正確なる觀察の結果、或る本能、例へば榮養・恐怖等の如きは出生と共に現はれ全生涯を通じて繼續する。或る本能例へば遊戯の如きは出生と共に發現するものではないが、矢張り殆ど終生繼續する、これを本能の繼續性といふ。

本能の繼續性

2**本能の定期性**　或る本能は規則正しき期間を置いて現はるゝ、季節による移住等はそれで稍々週期的のものである、子供を取扱ふ上に於て最も重大なる問題は人間の本能が最も自然に最もよく發現すべき時期を決定することである。此れが行はれて始めて自己の理想に適するやうな正しき時に於て正しき刺戟を與へ以て最も完全にして迅速なる發達を促がすことが出來るのである。これが兒童教育の要諦といふべきである。

植物の世界には發達の順序は葉、莖、花、實といふ風に確然と固定されてある。動物の世界に於ても身體各部の成長、毛髮、角、齒、牙等の發生は殆ど變化なく固定されてある。構造と本能とは密接な關係を有するが故に各種動物の本能が發達すべき一定の順序を見出すことが肝要である、此の順序に關する理論的説明は色々あるが、兎に角各違つた發達の時期に於て其の時期に必要なる違つた本能が現はれて來るといふことは疑ふ餘地のない事實である。養育及性的本能が成熟せる動物に發現するときに於てのみそれが其の種族に有要なのである。

本能の定期性

かく本能は生來の傾向であるが、凡ての高等動物殊に人間にありては其の多くは出生と共に發現するものではない。新生兒は其の出生當時に於て必要なるだけの、而かも其の精神物理的有機體が爲し得るだけの本能を有するのみである、其等の本能は主に自己保有の機能を有し發達の目的に役立つものである、其の例としては啼泣はそれによりて嬰兒の要求を其の母に知らしめるのであり、既に調整されてある筋肉はそれによりて食を取るに適して居り、運動をなさんとする一般的傾向は將來の習慣と有意的動作の準備を供給するものである、而して最初に存在せる數種の本能によりて發達が進むに從ひ、適當なる刺戟に應じて又他の本能が現はれて來るのである。何れの本能も身體的生理的の條件と適當なる刺戟とが結付いて其の必要を促がすときに發生して來るものである、性的本能の如き或る數種のものは其の發生時期は最も遲く、身體的成熟が發達の終期にある頃でなければ現はれて來ない、歩行言語の如きは本能的基礎を有するものであるが、生後二ヶ月位の嬰兒にはそれを試みても無駄である、發生の時期が來なければ幾ら適當の刺戟を與へても本能的反應を喚起することは出來ないのである、十八ヶ月を經れば普通の幼兒は自ら歩行言語を始むるに至るのである。かくの如く本能の發現には一定の時期があるので、これを本能の定期性といふ。

3、**本能の一時性**　本能の發現は構造及生理的條件殊に榮養狀態に關係するが故に、榮養、遊戯、爭鬪、性的本能等夫々其の適當なる時期に於て發現せしむるには個體をして最も正當なる條件に在らしめねばならぬ、個體の健康狀態の變化は其の本能發達に甚しき變更を與へる、本能は又外部の刺戟に關係するが故

本能の一時性

に内部の身體的條件によりても本能が熟してある時に適當なる刺戟を與へることが最も必要である、然らざれば本能的反應が現はれずに終ることがある、例へば家鴨は水がなければ游泳本能が現はれないのである、又鷄の雛が物の後を追ふ本能も一時的のもので經驗によりてこれを發達せしむることがなければ少時にして此の本能は消失するに至るのである。夫故に或る時期に於て或本能の發達に適當なる環境に置くといふことは何より肝要なことである、若し其の發生の時期近くに於て適當なる刺戟を受くべき狀態に置かれなければ其の發現が弱められ、又は全く消失することかある、かく或る本能は一時的の性質を有するので、これを本能の一時性といふ、されば遊戯・好奇、恐怖、求友其他本能的基礎を有する活動が相應の時期、年齢に於て活潑に喚起さるべき境遇を缺くときは其等の傾向は甚しく弱められるゝのである、言語を習得せんとする本能的傾向は一歳から三歳の間に最も旺盛であるが、七歳後には甚しく衰退するのである。

本能の變化性

4、本能の變化性　人類の本能は他の何れの種屬のそれよりも未定的で不完全で、且つ變化し易い、一般に生活形式の下等なるものほど完全な、變化のない固定的な本能を有する、從つて其等の動物は出生から既に獨立生活を爲し得る力を有つて居るが、それに反して人間の嬰兒は他の助けがなければ一日も生活することの出來ないほど弱い不完全なものである。然し、其の本能の不完全な缺點は、其の親の本能によりて補償せらるゝのである。幸にして人間の本能は不完全ではあるが、併しこれがために人間の進歩が可能であるのである。若し人間の本能が絶對に固定し不變化であり、凡て出生と共に存在し、如何なる必要に出遇ふても十分にして適當であるならば、習慣形成の門戸も、智能ある有意的の活動の鍵も、教育も、永久に閉鎖されて了ふであらう。訓練、教育、進歩の能力は內部傾向の彈力性に直接比例して居る、人間の生活條件の間斷なき變化は絶えず新しき調整を要求する、生活の最も著しき最も重要なる問題は最早や本能によるにあらずして熟慮と智能的反應とによりて解決せらるゝものである、高等なる思想過程によつて本能的傾向を統制することが將來の進歩、眞の意義ある人間生活に入るの途である、かく本能には未定的な變化し易い性質があるのでこれを本能の變化性といふのである。

本能と精神發達との關係

五、本能と精神發達との關係　幼少な子供の前に菓子の如き子供の好きな食物が置かれた場合に、子供の內部には忽ち榮養本能が動いて其の食物を取らんと欲する、然るに同時に又好奇心及恐怖本能が湧き出でゝ其の食物に手を觸るゝ前によくそれを吟味しようとする、若し傍らに他の子供が居つて其の食物を奪ふならば忿怒の本能が起りて傍らの子供を打たんとするであらう。然しかゝる場合でも恐怖本能又は母の賞讃を得ようとする願望が起るとその動作を制止する、若し又子供が自分に物を食べたいといふ慾望がなく且つ善良な性質のものであるならば遊戯衝動が起つて其處で食物を爭ふといふやうなことをせずに相手の子供を誘ふて何か他の親しき遊びに導くであらう、かくの如く本能は必ずしも其の最初の衝動だけを滿足せしむるに適當なるが如き、固定的形式の運動のみを特別に準備して居るものではないのである、人類の行動は他の動物よりも其の外部に對する反應は固定的ではない、甚だ自由である、從つて其の本能的衝動は最初に起つた本能的衝動とは甚しく懸け離れた關係の行動を起す所の感情や觀念に導くのである、これ卽ち心意發達の階段を爲す所以である。

衝動的運動は有意的統御の基礎である、蓋し吾々の心は或る動作が爲されて其の結果が經驗せらるゝまでは如何なる動作が、如何なる結果を得るかは知ることが出來ないからである。子供が外部より受くる種

々なる刺戟に對して種々違つた行動で反應するのは、それによりて種々なる感情を區別する重要なる方法であり、又其等の感覺感情を聯合する手段である、夫故に人間の知的生活は結局其の反射及本能的運動の上に基礎を有するのである。

子供の情緒は其の周圍の種々なる事物に對する反應の意識である、前に爲されたことのない特殊の運動を有意的に爲すことは出來ぬと同樣に、情緒に相應する本能的衝動に先ちて情緒を經驗するといふことは不可能であるからである。運動統御のみならず複雜なる觀念感情等を含む高等なる形式の動作に於ては其の意識的決定を爲すものは情緒である。

知的活動は好奇本能によりて刺戟せられ、願望の滿足を得べき方法を見出すことを主なる作用となす、人間の全心的生活―知的、情的及び意的生活は本能的動作と連結して發達する、凡ての意識的生活活動は其の根柢を無意的、盲目的、本能的傾向の上に置くのである。

要するに凡て本能は子供の心的發達の基礎を爲すもので、子供の發達の階梯中必要の時期に必要なる本能が發現して其の精神發達を開展せしめて行くのである。

六、本能の分類　本能の種類は甚だ多く之れを刺戟の性質、運動の種類及身體的又は心的狀態に從つて數種の項目に分類することは困難である、されど凡ての本能は生存のため自然に存する傾向であり、從つて或る程度までは凡ての動物に同一なるものであるから、其の有用の意味と其の本能運動によつて得られたる目的とを基礎として分類するときは大凡そ次ぎの五つになる。

本能の分類

1、自己保存の本能（個體的本能）　此の本能の最も根本的な一般的形式は自己の生存に必要有利なるものを取入れ、之れに反對なるものを排除せんとする先天的の傾向である、前者に屬するものは榮養本能（食餌本能）所有及蒐集本能、狩獵本能等にして後者に屬するものは鬪爭本能及び逃匿本能である。

2、種族保存の本能　此の本能は種族的生命を存續することを主要なる目的として發動する先天的傾向にして、若し動物が分割增殖を爲す無性の下等動物を除いて此の本能がなかつたならば凡ての種類は唯だ一代にして滅亡するに至る、夫故に此の本能は自己保存の本能にも劣らず其の發現の時期に於ては甚だ强く自己の種族保存のためには食物を捨て、危險を冒し其の生命を犧牲に供するも厭はないのである。此の本能は斯樣に强くなければ其の子孫を永續して生存せしむることは出來難いのである、此の本能には主なるものが二つある、其の第一は性的本能で第二は兩親的本能である。異性に對する羞恥、愛執等は第一に屬し、養護本能及動物の築巢本能、移住本能等は第二に屬する。

3、社會的本能　此の本能は社會生活をなして協同的動作を營み社會の維持發達を圖るに適せしむる先天的傾向で、社交本能、群居本能、共同本能、愛他本能等はそれである、其の現はれとして同情、友情、獻身等がある、蜂蟻等の如き下等動物は常に群居生活を爲し、其の屬する團體のために働らき間接にも自體其自身及其の種族の利益を圖らんとする本能を有する、又狼、鹿等の高等動物も群居を爲し食物を獲、又は危險を避くるために協力的動作を爲す。

4、發達的本能　（適應本能）、幼少なる生物をして正常なる成長發達を遂げしめ、將來の生活に適應せんとする先天的の傾向である。凡ての高等動物は甚だ不完全なる狀態に於て生れて來るのであるから、其の存在して居る環境の中に生活し得るためには其の周圍の力に順應して發達し得るだけの彈力性を有するこ

とが必要である。兩親によつて保護せられて居る幼兒期の間に將來獨立生活の形式に適應し得るだけの準備活動が必要である、若い動物は其の受けたる刺戟に反應することによつて、其の環境は自分自身を順應せしむるのみならず、既に受けたる刺戟が有效ならざる場合には、積極的に更らに刺戟を求めて行動を反復せんとするのである。此の內部の活動性は卽ち適應本能に基くものである、此の本能の主なるものは模倣本能、好奇本能、遊戲本能等である。

5、**其他の本能**　以上四種類の本能の外發表的本能、調整的本能と稱するものがある、發表的本能は言語、繪畫等の發達の基礎をなすものであり、調整的本能とは、社會生活と個人生活とを調和制整せしめんとするもので道德的宗敎的生活の基礎をなすものである。此等の本能は其の體質に於て、社會的及發達的本能の合成とも見るべきものであるから特に他の種類から區別して說明することゝしたのである。

第三章　自己保存の本能

自己保存の本能と自己意識

一、自己保存の本能の發現と自己意識　自己保存の本能は生物發達の上から見ると最も古い本能で、而も動物生活の最初の時代より凡ての種族に普く有用であつたものゝ一つである、此の本能は人間は勿論のこと、凡ての動物の幼者には最も强大である、幼少無力の時代に於ては唯だ此の本能のみが最も多く用ひらるゝのであるからそれは當然のことゝ云はねばならぬ、稍〻長ずるに及び他人の利益になるやうな事柄に對し行動せしむべき形式の他の本能が發達して來ると此の個人的本能も幾分其の强さを減じ、最早やそれだけが個人の行動の唯一の源泉ではなくなるからである、併し此の本能は成人に於ては他の本能によりて又訓練によりて影響せらるゝけれども甚しく減退するといふ事は疑はしい、自己保存の本能は個人的のものであり、他の本能と同樣に其の最初に於ては盲目的である、凡て幼少兒童の行動は自分自身の爲めであるから、其等の行動から起因して生ずる所の觀念、感情、意志等は、未だ自己といふ明瞭な觀念はないにも拘はらず皆な自己の欲する所のものを獲んとするに傾いて居るのである。二三才頃になると發達的の本能の極めて低い形式の社會的本能が現はれて來るので、又他人の動作や心的狀態が屢〻兒童自身に反應せらるゝので多少他人と自己といふことが意識の中に區別せらるゝに至り幾分か直接個人的でなくなるが、四五才になると自己意識が一層明瞭になり、他人に都合のよいことは自分には不都合であるといふやうなことを認めて、凡てを自分自身のために獲やうとするに至る、六才から十才頃までは兒童は非常に利己的、私慾的であるが、之れは又發達上重要なる、且つ價値ある部面であるから、之を緩和することは必要であ

るが強いて抑止すべきものではない、生活の第一の法則は個體擴充と發展とでなければならぬ、他人奉仕の法則が幼時生活に於て有力であるならば眞に效果のある奉仕に適する個體といふものは望まれぬのである、愼み深く溫和であるといふことは既に發達して相當人格を有するものには賞讃すべきことではあるが幼兒には甚だ不利益なことである、寧ろ誇りと向上心とを以て積極的の行動を爲さしむることは却つて將來の發達に益する所が多いのである。大人には甚だ賤むべき利己的のことも幼兒にはそれは全く當然の事柄であるのである。

自己保存の本能中最も明瞭なる形式を有するものは榮養本能、恐怖の情緒を伴ふ逃避本能及び憤怒の情緒を伴ふ鬪爭本能である。

二、榮養本能は個體的本能として最も早く發現するものである　身體的に見れば幼兒に於ては此の本能は最も主要なるものであるが心的方面からはそれほど重大なるものではない、此の本能の滿足に對する裝置は出生に於て殆ど完全に出來てゐる、嬰兒の最初の食物、乳によつて與へられたる感覺は何となく和らかは疑ひない、此の本能が滿足されないとき、飢から起る感覺、啼泣動作から起る感覺等は恐らくは幼兒が味のある快愉な感じに相違なからうと考へらるゝが兎に角此の榮養動作は多少の感覺的意識を生ずること始めて意識する經驗であらう。併し此の味覺的の感覺は最初一・二年の間は幼兒の心的生活には餘り大なる影響を與へないのである、幼兒の好奇心、遊戯性、興味等は觸覺、視覺、聽覺等によりて、より多く刺戟さるるのである、嬰兒期の生活に於て榮養本能を優勢ならしむるものは其の味覺的感覺よりは寧ろ飢の苦痛及食を得たるときに起る滿足の愉快なる感じである、食物の種類が多くなると積極物に食欲本能を發達せしめ、兒童が三四才頃になると味覺的感覺は其の意識の中で優勢なる位置を占むるに至る、此の狀態が數年の間繼續する、恐らく五六才頃は一生涯中で味覺的快苦感の最も强盛な時期であらう、此の時期に於ては甘味いものを求めやうとする欲望を滿足さすことが其の生活を支配する主なる動機の一つとなる。

三、恐怖　榮養に次いで最も根本的な本能は恐怖である、此れは危險を避け又は之れより逃れんとする動作に於て示さる、一面より見れば恐怖はかゝる動作が爲さるゝときに經驗さるゝ情緒である。此の本能の最も早く現はれたものは大きな音に驚くことである、又生後一ヶ月位の間に現はる著しき事實としては身體の落下動作を恐るゝことであるが、此の狀態は僅か數週間位續くのみで其後は上下に身を動かさるゝことを喜ぶやうになる、恐怖を現はすべき樣式は種々ある、走ること、隱れること、叫ぶこと、沈默して居ること、色を變へること等は皆本能的である。凡て新しい突然な强い刺戟は恐怖表出の裝置を動作に現はし易い、音は目に映するものよりも恐怖を引起すことが多い、蓋し響きの刺戟は多くは突然强く來るからである。

恐怖

嬰兒の恐怖反應

1、嬰兒の恐怖反應　嬰兒は最初の一ヶ年間中に於て眞正の恐怖を經驗し得るや否やは問題である。恐怖反應の最初の形式は運動的方面に於ては反射的のものと區別することは出來ぬので、吾々は此の時期に於ける恐怖の感情的方面に就ては何等知る所はないのである、若し其等の恐怖があるとしても嬰兒が常に爲すが如き一般不愉快なる形式と全く區別することも困難である、蓋し三、四ヶ月頃の嬰兒には危害等の觀念がある筈なく、從つて經驗的に恐怖を感ずるといふことは考へ得られぬのである、恐怖的反應の原因、嬰兒の恐怖反應を起すべき一般原因には二つある、一は不思議なもの、又は力强い感覺的印象が軟弱なる嬰兒の神經系統に刺戟として作用し、それが或る時期に於て危險といふ漠然たる觀念となり遂に恐怖

といふ情緒を惹起するに至るのである、此の觀念は各個人の經驗より來り、又は他人より見聞したる結果であることもある、第二は遺傳的傾向である、例へば子供は或る奇怪なる動物、黑いもの、闇黑なる場所、高い所から落ちること、不可思議なるもの等を怖るゝ傾向を有つてゐる。然しながら十分注意深く觀察すると必ずしも遺傳によりて或る一定のものを怖るといふことは云ひ難いのである。尙ほ又凡ての子供が皆同一物を恐るといふことはない、多くの子供は雷鳴を恐るゝが、中には雷鳴や電光を面白がるものもあるのである。

音の恐怖

2、音の恐怖　嬰兒を觀察するものは何人も認むる如く戸を閉めたり、物が落ちたり、其他自動車の音等突然の高音や響きに嬰兒の恐怖、反應が起ることがある、ミス・シンは生後五週間の嬰兒が始めて高音のために驚愕したることを認めたといふ、マイエルは其の子が生後十九日目に始めて鈴の音に驚かされて哺乳を止めて泣き叫んだといふことを述べてゐる、嚴密に云へば此等は恐怖の感情ではないので、神經系統に對する激動の種類である、且つ此等の最初の恐怖反應は反射的性質を含んでゐるが故に恐怖といふよりは寧ろ眞正な恐怖の前驅者とも見るべきものであるが、後ちに現はれる所の恐怖反應と近似してゐるから一般これを恐怖反應と認めて置くのである。子供は烈しい音響や不可思議なる音、汽車、電車の軌る音、汽笛の音等に驚くのみならず大きな音にも恐怖を感ずる、暴風雨等の音には大人も不安と恐れとを抱くが、嬰兒は大砲の音や、瀧の音、波濤の音、其の他不意の音響や原因の解らぬ不思議な音に愕き恐怖を生ずるものである、要するに嬰兒の最初の恐怖的反應は音響によりて生ぜられ、從つて恐怖を表出すべき裝置は聽覺的刺戟により運動に表はさるゝのである。

視覺的恐怖

動物の恐怖

子供の恐怖の一般傾向

3、視覺的恐怖　マイエルの嬰兒は生後三十三日目に彼れが薄暗い室で嬰兒に近寄たときに嬰兒は始めて恐怖の表情を示し、ミス・シンの嬰兒は四ケ月目に始めて黑い着物を着た訪問客を見て恐怖の狀態を現はし、プライエルの嬰兒は二十一ケ月目に海邊に於て波を見て驚いたことを述べてある、幼兒の恐怖は不愉快なる感情の消極的原因から來るもので、第一、場所の變化、聯想、習慣等は原因となるのである。

4、動物の恐怖　多くの幼兒は、犬、豚、猫等の動物が、危險性を有つてゐるかゐないかといふことを未だ知つて居らぬ內にそれらの動物に對する恐怖心を有つて居るかどうか、此の問題につき動物に對する恐怖の起りに就いて種々なる說明がある、ダーウヰン、ホール、ゼームス等はこれを本能的であると信じ、之れに反して他の學者は、動物の奇態な形や狀貌や、其の他子供の周圍の人々から其の動物に就いて色々のことを聞いたりして、それによりて恐怖といふことが示唆せらるゝのであると說いてゐる、吾々の觀察する所では本能又は生來の性質といふものは、特殊のものを恐るゝ原因としては極めて小部分で、主もに其の變つた狀貌や、恐ろしいといふ暗示が原因となるものであると思はれるのである。

5、子供の恐怖の一般傾向　カルキンス及フアケンタール等の情緒に關する研究に於て子供の恐怖をば次の如く述べて居る、「兒童の恐怖について注目すべき點は年齡と共に恐怖を增加することである。三歲以下の幼兒の五分の一、及六歲以下の幼兒の十分の一、六歲以上の子供の百分の一、六歲以上の子供の百分の一弱は恐怖を知らない」と又ホールは男兒童の恐怖は七歲より九歲まで增加し、それより年を取るに從つて段々減じて行くが、女兒童の恐怖　四歲より十八歲までは順に增加して行くことを報告して居る、且つ特殊なる恐怖の對象物を多數列擧してそれに種々なる說明を施して居る、それに依ると最も多い恐怖は雷鳴、電光、爬蟲、怪しげな

人物、暗黑、及火等である、其の他稀れにある所の恐怖は死人、孤獨、毛皮、及齒牙等である（或る子供は黑い齒を顯はしてゐる人を恐れてそれを見ることが出來ぬと云ふ例が擧げられてゐる）又年齡と共に特殊なる恐怖は減少して更に他の恐怖が增加するのであるが、概して幼兒期に於ける恐怖は生涯を通して殘存するの傾向がある、而してその恐怖には變化がないといふことである。ビネーは小學校兒童の恐怖をば級別的に比較して臆病と知力との間には積極的にも消極的にも相關的關係は存在しないが、唯だ臆病なる子供の中には他の子供に比してより多く活潑なる想像力を有してゐるものが多いことを見出したのである。

以上述べた如く恐怖は幼少なる時期から現はれ、而して其の或るものは年齡と共に他の恐怖が增加するに從つて減少して行く、恐怖反應はこれを根絶することは不可能であるが、之れを利用して適當なる方法に於て教育的に導くことが出來る。卽ち幼兒期の理由のない恐怖は、合理的なる分別によつてこれを取り去ることが出來るのである。

子供は一般に蛇類を恐るゝものであるが之れは其の形態が悚然とするほど何となく厭やな格恰をして居るからであらう、又本能的の恐怖として見るべきものは闇黑である、これは闇黑其物が恐怖の對象となるのではなくして恐怖が惹起さるゝ條件となるのである、凡ての動物及人類は見知らぬ周圍の事物によりて容易に驚かされる闇黑は周圍の事柄を見知らぬ不可解なものにして了ふ、そこで闇黑の恐怖が速かに引起さるゝのである、闇黑の場合に於ては外部の事物は恐怖を惹起すに必要なものではない唯だ想像的の事物で十分である、兒童は明りに慣れて居なかつたならば、彼等の想像力が發達せぬ間は決して闇黑を恐るゝものではない、一度兒童は闇黑に於て恐怖を經驗すると其の傾向は繼續し易い、恐怖本能の最も大なる時期は特殊なる經驗によりて異るが通常三・四歲頃である、生物學的には此の時期は或る程度まで兩親から離れて自ら行動するときであるから、危險に脅かされたときには直ぐ樣家に駈け込むといふことが最も必要なことである、心理學的には此の時期は想像力が最も活潑に働き其の作用は何等の拘束を受けることのない時である、想像力の鈍い兒童や又は幸にして恐怖經驗を遁れた兒童は此の時期に於ても恐怖心はそれほど强くないのである。

恐怖は全く之を無くすることは出來ないが、本能的のものは通常漸次減少する、兒童が自分自身に就て注意をし、周圍の事柄に就いて一層熟知して來ると、突然な强き情緒的の意味に於ける恐怖は減少するが、用心又は分別的の意味に於ける恐怖は增して來る、文化の進歩と共に生活の條件を安全ならしむる知識は漸次恐怖心を少なくするが、併し多くの人々は常に全く不合理なる恐怖から其の生活を苦しめて居るのである、其等の恐怖は物體、自然力、形等より來るもので、例へば雷、火、氷、洞穴、爬蟲、昆蟲等は、原始的生活狀態の昔から今日まで遺つて居る恐怖である、恐らくは社會的遺傳により世代より世代へと傳統的に傳はつて來たものであらう、分別的、用心的意味の恐怖は不愉快な結果を持來たすやうな事を避け、危險より遠ざかるから、或る程度までは必要であるが、突然な强き情緒的な不合理な恐怖は身體的に有害であり心理的には無氣力ならしめ道德的には墮落せしむる、夫故に不合理なる恐怖は其の無意味なること十分諒解せしめ勇氣を鼓舞發達せしめねばならぬ、或る幼稚園の保姆が鼠や毛蟲を非常に怖はがる性癖を有つて居つたが或日一匹の鼠が保育室に出て來たので保姆は大なる努力を以て自分の恐怖的の心を抑へて、パンの屑を探して居る鼠の方に幼兒等の注意を集めてその動作を觀察せしめた、又幼兒に興味ある昆蟲類等を觀察

せしむる場合には努めて自分の嫌忌の情緒を抑制したので遂には此の生來の毛嫌ひを無くすることが出來たといふことである。

恐怖の取扱

6、恐怖の取扱　恐怖は兒童には非常に强大な本能があるから、兒童を脅かして怖はがらせると何事でも大人の云ふ通りになるものである、併し恐怖心を手段として兒童を導かうとすることは宜しくない、危險に對する注意、用心等の如き理性的形式に導く場合の外は怖はがらせるといふことは避けねばならぬ、次に恐怖心を起すやうな機會を出來得る限り避くることである、若し恐怖心を起した場合には出來るだけ早く安心せしむる手段を取ることが必要である、恐怖は實際の經驗によりて起さるゝのであるが兒童の想像によりても起され又友達の話などからも起される、夫故に臆病な兒童を仲間とすることは避くべきである、又恐怖を耐へるやうに强制することは殘酷なやり方で矯正法としては全く效果はないのである、理由のない、經驗とは關係のない恐怖は兒童には一般に多いのであるが、此の如き恐怖に對しては決して怖いものではないといふことを能く說明することも必要であるが、之を實際に徵して安心せしむるといふことは一層必要である、概して幼兒は巨大なるものの見馴れぬものに驚き恐れる本能があるが其の無害なるものは之を恐れざるやう慣れしむること、又過去の失敗不幸等の經驗によりて恐るゝものは其の失敗を再びさせるやう用心せしむること、無知又は想像のために恐るゝものは其の事物を詳細に說明し理解經驗せしめて的確な知識によりて漸次自制に至らしむることである。

恐怖と生理的關係

恐怖的情緒の反應は有機體の生理的活動に有害なる影響を及ぼすことは一般に認められてある。それは恐怖感動の程度にもよることであるが、其の著しいものは內臟の變化で消化器管の作用を停止し、身體各部に精力の供給を妨げる、腹部器官より肺臟、心臟、中樞神經系統等筋肉活動に直接須要なる器官に至る血液の移動を遲滯し、心臟の働き、血行運動等に影響する。

鬪爭本能

四、鬪爭本能　鬪爭本能は、之れが極端に實行せられない限りは兒童には自然的な又適當なものであると認めねばならぬ、如何なる事情の下にありても鬪ふべき傾向を有たぬ兒童は兒童としては不自然なものである。恐らくは成人の後も人として無氣力のものとなるに相違ない、兒童に對して決して爭ふことはならぬと云ふのは甚だ間違つたことである、絕對に爭ひを禁ずるといふことは兒童の本性に反するのである、兒童の强大なる鬪爭性は之を他の有益なる活動に導くことを工夫せねばならぬ、鬪爭は人類發達の早き時期に於て適應されたる社會的行動の粗野なる形式である、競爭は殆ど生涯を通して甚だ力强く行はるゝ處の鬪爭の形式である、個人的競爭の傾向は兒童の學校生活に於て最初の五六年間は最も强大であるから學校に於ては此の性情を利用せねばならぬ、此の競爭をして奇麗な競爭たらしめ、漸次之を個人的より團體的競爭に進ましめるやう注意することが必要である。

憤怒の取扱

鬪爭本能及其れに伴ふ情緒、憤怒は、兒童の活動又は其の願望が妨げらるゝときに起る、これは最初に於ては啼泣又は頭首を轉向し、妨害物を押し除けやうとする動作によりて現はさる、一般に此の情緒は幼兒に於ては大人よりも强烈で且つ容易に起され得るがそれは長續きはしない、殊に幼少なものになると今急に怒り出して烈しき亂暴をしたかと思ふと忽に笑つて居るといふ樣なことが屢々ある。

此の情緒の取扱については、憤怒を起すべき如き機會を避くることが必要である、殊に幼兒が飢えて居るとき、癇癪持の不機嫌のときに注意を要する、同時に又憤怒を破裂した結果兒童に取つて損失はするが何

蒐集本能

物をも得る所なからしむることが必要である、幼者の憤怒に對して年長者は如何なる事情に於ても憤つてはならぬ、憤怒を制するに憤怒を以てするは火に油を注ぐが如きものである、憤怒の起りたるときは出來るだけ他の仕事を與へるか又は好奇其の他の感情に轉向せしむること、及び孤獨靜肅の間に置き冷靜に前後の事情や結果を熟考せしめ努めて自制に達するやう導くことが必要である。

五、蒐集本能　此の本能は動物にも人類にも明かに現はされてある食物及生活必需の材料が蒐集せられ、それが將來の使用のために貯藏せらるゝときは、此の如き行動は一個體の利益であるのみならず、幼者保存の手段として種族に取つて必要なことである、併し或る種の動物などのなすやうに種々なる物體が蒐められ、隱され、貯藏され或は弄ばさるゝときにはかゝる行動によつて得られる直接價値は何物も見出されないのである、有用なる物を蒐集する行動の必要なることからして何んな物でも蒐めるといふ傾向が作られたのであらう、人類に於ては此の本能は甚だ強く、文明の社會に於ては各種の博物館を有するのみならず、各個人は皆な少くとも或る種の蒐集物を有つてゐる、此の本能は所有本能と密接に結合して富の蓄積となる、又遊戯本能と聯合して蒐集したる物を娯樂の材料となす、美術的本能も亦其の蒐集したる物を排列して滿足せらるゝことがある。子供には此の本能は二歳頃になると或る程度まで現はれて來る、板片や石などが集められ、それを遊び道具として保有する、子供の蒐集傾向は大體三つの時期に分けて見ることが出來る、第一の時期に於ては最も容易く得らるゝ物を選んで自分の所有物を無暗に蒐集する、これは八歳頃まで繼續する、第二の時期は十二三歳頃までで、最も數多く蒐集せらるゝ、そして出來るだけ同一種類のものを多く集めようとする、此の時期に於ては自然界に對する興味は最も強く鑛物類、貝類、苔類、草花類、昆蟲類等を好んで蒐集する、第三の時期は十二三歳以後の青年期で、自然科學的の興味は減するが人文學的の興味が增して來る、此等の時期に於て此の傾向を利用して適當なる指導と奬勵を與ふならば子供の自然科學的衝動を促し其の興味を發達せしむることが出來る、又青年期に於ては其の蒐めたるものを分類し排列し、分解する等の注意を拂ふに至るであらう、斯く物を蒐むるといふことも一種の心的習慣を作る基礎となり自然研究の出發點となるものである。

狩獵本能

六、狩獵本能　食物を獲んとする營養本能と結付いて、原始人類には狩獵本能があつたものと考へらるゝが現在に於ては此の本能の存在には殊別なる必要はないのである、唯だ根本的の傾向が殘つて居るだけである、例へば子供は小鳥の巣を取り魚を捕り、其他動物を捕へることを好むのは此の本能の殘存と見ねばならぬ。大人にありては狩獵は一種の趣味、スポーツとして行はるゝのである。

第四章　種族保存の本能

種族保存の本能の發現

一、種族保存の本能の發現　種族的本能とは性的本能及び養育本能等の先天的傾向をいふのである、性的生殖は少數の最下等の動物を除いては凡ての動物に通ずる法則であるから、現存せる凡ての種族に必要なるものであることは說明を要しない、此の本能は人類に於ても可なり早き時期に發現すべきことは想像せらるゝのであるが、一般に十二三歲後にならなければ有力に現はれて來ないのである。

性的本能

二、性的本能　男女兒童の身體的及心的差異は十歲頃までは極めて僅少である、一般に青年期の直前までは相互に性的影響を受けることは甚だ少いのである、少年少女の戀愛關係は多くは同性間の親愛と大差はないのである、併しこれは青年期になると變化して其の始めに於ては男女兩者間に羞恥の形に於て、或は異性の仲間を嫌忌する形に於て現はれるが、間もなく其れが經過して異性に對する愛着心が甚だ強くなり夢其の他の事と連關して明かに性的感情が經驗せらるゝに至る。

養護本能

三、養護本能　種族保有の本能の一つの形式として現はさるものは家畜や幼少子女の世話をすることである、殊に女兒によりて行はるゝ人形遊びである、此の如き活動は寧ろ社會的影響及模倣の結果であるが、種族的本能の一つである養護本能の前徵とも見るべきものである、此の養護本能は高等動物に於ては其の子供の成長するまで短時期の間甚だ強いが、人類にありてはそれが永く繼續する、而も知的道德的及び身體的の幸福に於て周到なる注意を拂はしむる所の高等なる形式に於て現はるゝのである、凡て正常なる個人は弱き助けなきものを保護し救助せんとする衝動を有し、而して此の高等なる精神的本能のみが之れを滿足せしむることが出來る、此の本能の最も強く現はるゝのは母の子に對する愛情である、吾人々類に於ては之を愛情と云ふのが他の動物に於ては單なる本能である、鷄は空飛ぶ鷹を意識すると恐怖本能により て直ちに畏縮する、猫に追はれては走り、犬脅かされては飛ぶ、されど雛を有つ牝鷄は如何なる强敵をも畏れない。

種族保存の本能と他の本能との關係

四、種族保存の本能と他の本能との關係　種族的本能は如何なる時代に於ても種族の存續には絕對必要なるものであるが故に個人的社會的の兩方面に於ける各種の行動に少なからざる關係を有するのである、一方に於ては配偶者の競爭は鬪爭的傾向を發達せしめ、勇氣と向上心とを振起し、他方に於ては配偶者の寵愛を求めんとする傾向が發達した、或る種の遊戲及美裝の傾向も亦性的衝動より發達したのである、ダーウヰン及其他の學者は美的感情と及性的撰擇との間には密接なる關係があることを唱へて居る、愛は詩、繪畫、音樂等の美術的創作に屢〻靈感を與へるといふことは著しい事實である、又美的鑑賞力は青年期に入りて著しく增加する、夫故に審美的感情及衝動は此の本能に密接なる關係を有するといふことを主張すべき相當の理由があるのである、論ずるまでもなく社會的本能及社會的感情は家族より外部の大なる團體にまでの種族的本能の擴充に過ぎないのであるといふことは明かである、種族的本能中の養護本能の如きは對他的の本能であり、而も愛他的である、此の本能的傾向が擴充されて始めて團結ある社會生活が營まるゝのである、道德的感情及衝動も明かに種族的本能と關係を有する、所有といふことの最初の最も重要なる形式は配偶者の所有といふことである、從つて此の如き所有觀念からして或る權利とか義務といふことが生じて來たのである、又自分を措いて他人のために喜び他人を助け保護するといふ衝動は此の本能にそ

の根柢を有するのである、食物を求むるに勤勉なる德性、子女のために防禦し、敵と鬪ふの勇氣は男性に於て發達し、忍耐溫順等の諸德が女性に於て發達したのも皆この種族的本能に起原を有するのである、斯く種族的本能は種族の生命存續に必要であるばかりでなく個人の身體的精神的の健全なる發達に須用なものである、夫故に此の本能ほど人生生活の上に深遠なる影響を及ぼすものはないのである、人生生活は固より生を完うするにあるのであるが、生きんとする衝動は個人的であり排他的である、然るに性は對他的であり他を愛し他と親しむ、人生社會生活の永遠の泉は此の性より湧き出づるのである。

種族的本能の正しき發達

五、種族的本能の正しき發達　種族的本能は本能中でも自己保有の本能と共に最も力强きもので而かも人生の各方面に關係を有するものであるから之を正しき方向に發達せしむることは最も重要なることである、之れがためには第一、極端な又は誤れる發達を避くること、第二は意識に於ける不幸なる聯想を避くることである。

1、此の本能の性的感情及其の機能の誤られたる濫用は時として幼少兒童にも起るが、普通は青年期に入りてからである、生理的方面から考察すると身體的の缺陷が屢〻兒童に於ける性的刺戟及其の濫用を起すことを認める、青年期に近づくに從ひ出來るだけ多く戶外運動をなさしめ精神及身體を或る仕事に專らならしむることは大切である、社會的方面より考ふるときは少年男女を性の區別なしに自由に一緒に遊ばしめることが宜しいのである、古來男女七歲にして席を同じうせずと敎へて居るが、これは男女間の禮儀の一面である、社會の慣習は常に女子に對しては特に違つた行動を要求する、これは性的本能の如何に强大であるかを示し、同時に幼少時から嚴密に制限するにあらざれば濫用的の發達を來たすべきことを物語るものである、併し少くとも十歲前の男女兒童には甚だしき差異はないのであるから、彼等をして何等戀愛的の考なしに善良なる仲間、親友として出來るだけ永く共の交りを續けることは許さねばならぬ、小學校に於ては男女を區別する必要はないのである、中等程度の學校になると各方面から夫々種々の理由もあるが、併し性的發達は兩者が別々に居るときよりも一緒に居る方が一層正常に健全であることが疑を容れぬのである、

築巢本能
構造本能

2、種族的本能に關して實際的に最も重要なる問題は、性的衝動と如何なる意識的聯想が造らるゝかといふことである、勿論聯想は下卑賤劣であるか又は高尙純潔であるか何れかであるが、前者の場合には其結果は私慾的であり肉慾主義である、後者の場合には利他的であり社會奉仕である、此の事は男女兒童は如何に性的機能の知識を得べきかの問題と密接なる關係を有す、道德及社會的慣習は性的機能に關する知識をば極めて狹い範圍に制限して居るが、併し之によりて永く男女兒童をして無知ならしむることは不可能である、これを制限し秘密にすることによりて却つて誤れる知識を與ふることゝなる、こゝに於て最も適當なる性敎育の必要が起つて來るのである。

六、築巢本能　動物が其の巢を構造すべき一般的の傾向は種族保存の本能に屬するものと考へらる、卽ち鳥類や蜂類などが巢を作るのは卵を生み幼者を保護せんとする目的に適つて居るのである、然るに蜘蛛が巢を作るのは食物を獲、自己の避難所となさんがためで全く個體の目的に合すべき手段となつてゐる、動物に於ては此の本能は其の種族に必要な特殊の構造形式を有し殆ど一般化さるゝといふことはない、人類には築巢本能と見るべきものはないが、物を構造し破壞せんとする本能がある、それは子供の砂遊び積木遊び

などの如き構造本能となつて現はれて居るが、現在に於ては此の本能は寧ろ發達的の目的に役立つものと考へらるゝのである、子供には物を破壞する傾向があるが、これは構造本能から變化したるものである、蓋し子供が物を構造するのを喜ぶのは物の形を變へる自分の能力を具體的に見ることが出來るからで、物を構造するのも破壞するのも其の形を變へる力を現はす點に於ては同一であるからである、又破壞する方は構造するよりも速かに容易く行はるゝから却つて子供に喜ばるゝのである、子供は又複雜なる玩具などの一部を破壞して更に形の變つたものを作り出して喜ぶものである、斯く構造本能は其自身に自然と模倣、遊戯、好奇等が聯合し時としては又他の本能とも結び付いて現はることがある。此の本能は自發的で又自由であり其の刺戟となるものは模倣である、何を作れとか、如何樣にして作るべきか等一定の指圖を與へることは却つて此の本能の自由なる活動を禁止せしむることがある、此の本能の發達の順序は具體的觸覺的のものから無形的象徴的の形式に、手工的要素から美術的文學的に進むのである。

移住本能

七、移住本能　此の本能は其の原始的形式に於ては既に今迄受けた刺戟よりも尙ほ一層大なる且つ都合のよい刺戟を得んがために働く一般的の傾向である、一年の或季節に於て鮭は產卵準備のための身體的變化を經驗し、それによりて溫度、化學的條件等に關して現在の身體狀態に一層好都合の環境に移住すべき動作を現すのである、斯くして幾日かの後、一年前自分の孵化された清水の中に至るのである。此れが此の本能の根本的の形式で、他の動物でも人間でも自己又は自己の周圍の變化によつて其の環境と調和を缺くに至つたときに移住の衝動を經驗するのである、此の衝動は青年期變化の時期に特に强い、家出等の多いのは此の時期である、又實際の家出ではなくとも旅行せんとする强い願望を有つて居るのである。

社會的本能の形式

第五章　社會的本能

一、社會的本能の形式　人は社會的動物であることは遠く希臘の古代に於てアリストテレースの謂つた言葉である、凡ての人類種族は家族を成すのみならず相互に相寄り相集つて大なる、聚合的部落團體を成して生活をして居る、之れは孤獨的の個人生活よりは生存競爭上甚だ有利であることの自然的必要から來たものである、伴侶を希ふの心は人類の祖先からの生存上のために護られたる自然の遺傳である。

此の本能に屬するものは、伴侶を求むる傾向として現はるゝ社交本能、(他の動物には群居本能)とも現はれ居る、他人と同一感情を有たんとする同情、他人の喜びを得其の稱讃を好む所の功名心又は名譽心競爭及協同心、忠實及愛他犧牲心等である、

社交本能

二、社交本能　社交本能は幼兒が漸く步行を始むる頃より現はれて來る、幼兒の生活は他人の力に依存するのであるから、相手を求むるといふことは必ずしも其の遊び仲間のみを欲するのではない、子供は常に大人の同居を喜ぶものである。大人が居ることによつて少くとも依賴するに足る力となるものゝ居ることによりて絕對安心と滿足とを得て居るのである、之れが二三歲頃から遊び仲間を求むる形式となり自分と近き年齡の子供との伴侶を非常に喜ぶに至る、此の時期に於ては幼者相互の間には大人が理解するよりも多くの事柄が理解され、互に教育的影響を及ぼすものである。

子供の同情心の基礎

三、子供の同情心の基礎　同情は機能的模倣と密接なる關係を有し或程度までは之によりて發達するのである、幼兒は他人の情緒的表出を模倣する、其の結果として稍々それと同樣な感じを現はす、卽ち周圍の人

が叫べば同樣に叫び、笑へば又愉快に笑ふのである、併し眞の意識的同情は三歲頃から起る、而して此の同情心が一度發達するとそれは人に對してのみならず動物や草花或は棒や石などの無生物に對しても起る、幼少な兒童は他の事物と自分、生物と無生物との間の區別は未だ判然しないのであるから、彼等の心的狀態は人間以外の事物にまでも推及さるのである、子供は他の事物に就ては自分と同樣に感ずるものと考へる、從つて凡ての自然物が、自分と共に喜び自分と共に泣く如くに見へるのである、自分が興味を以て大事にして居る人形や何かゞ損せらるときには自分自身が害せられたと同樣に感ずる、斯く子供は其の知つて居る、凡ての事物を觀念化して居るので最も厚き同情心に富んで居るのである、然るにも少し年齡が加つて子供の自己意識が發達し、自分の經驗と他人の經驗との區別を一層明瞭に知るに至ると個人的本能が力を得て、他人の位置に自分を置換へて其の苦しみを感ずるといふことは稀になる、同情は機械的模倣が其の基礎をなすものであるが、それが眞の意識的同情に發達するには、第一子供自身の經驗が必要である、夫故に子供は自分の經驗のない大人の苦しみや喜びに對しては、それが如何に深刻なものであつても至つて無關心であることが多い、第二に同じ樣な經驗を有するのみならず又それに想像心が加はつて苦痛の狀態に自分を置いて感ずることである、男の子供は時々殘酷なことをするが、それは苦痛を起させやうとするのではなく、被害者が妙な動作をするのを見るのが面白いのである、被害者が如何に苦痛を感ずるかなどについては考へぬのである、同情は夫故に經驗と想像心とによりて發達する。

四、功名心　功名心又は他の稱讃を得やうとする願ひは幼少兒童には甚だ强い、此の傾向は幼兒が未だ言語を話すことの出來ない頃から、其の徵候を現はす、最初には兩親の稱讃、次ぎには長上又は敎師、朋達等の

稱揚を喜び、青年期に達するとそれが甚だ旺盛となり、單に個人的ばかりでなく世界の稱讃を得んと欲する大なる野心を惹起するに至る、即ち名を成し榮譽を博せんとするの此の野心は、青年を驅りて英雄ならしめ又は凡人たらしむる最大の動機である、此の本能は如何なる境遇にありても消失するものでなく終生繼續する而も個人の食へるもの着るもの讀むるもの及爲すことまでも此の本能によりて左右せられ、所謂虛榮心となりて其の生活を支配するに至る。

子供は稱讃叱責に影響せらるゝこと甚だしく、或る程度までは兩親敎師等によりて其のいふが儘に行動するのもこれがためである。夫故に敎育的に此の本能を利用することは最も重要なことである。年齡が進むに從ひ朋達からの稱讃は兩親及敎師からのそれと匹敵すべき影響を有する、而して漸次子供自身の屬する團體に就ては社會的の感情が發達し、個人よりも寧ろ一般世間から稱讃せらるゝことを希ふに至る。

競爭及協同　これは一面に於ては相互相反するものであるが、亦他面に於ては互に相補ふものである、競爭的本能は幼少な子供には餘り强くないが、七歲から成熟期近くなるまで漸次其の力を增す九歲頃になると競爭的の要素を含んでゐない競技（ゲーム）は餘り喜ばれなくなる、作業の如きものでも競爭的の分子を有するものは競技の如く喜んで從事せらるゝのである、競爭は始め個人的であるが進んで團體的となり、一團體が共通の目的を以て他の團體に打勝たんとするに至り、斯くして必然的に協同といふことが現はれて來るのである。

五、忠實愛他　社會的本能の最も高等なる形式で、其の屬する社會的團體のために行動を爲さんとする傾向である、此の傾向は十歲から數年の間に多少有力に現はれる、青年が漸く其の種族の生活のために又は

其の屬する團體のために、實際何事か貢獻し得る時期に達したときには野心が旺盛になつて來て大事業を夢み大なる名譽を得んとするの空想に耽るのである、斯く名譽心が甚だ強いのであるが、そこに又自己犧牲の純眞なる衝動があるのである、社會奉仕的衝動の發達は共同の目的のために、他人と共に働く種々なる經驗によつて促進せらるゝ、斯る生活によつて個人の生活は擴充され、團體と團體との競爭のために個人的利益を犧牲にして自己の屬する團體の成功に努めて社會生活の眞の喜びを知るのである、自己犧牲によつて進めらるゝ社會的團體は初めは甚だ小であるが、漸次社會的の衝動が廣められ高められて博愛となり世界同胞の尊き人類愛の感情となるのである。」

第六章　發達的本能（適應本能）

模倣

一、模倣　子供は新らしき動作を觀察し之を遂行せんとする强き傾向を有つて居る、夫故に模倣は子供の經驗を廣め種々なる活動と條件に適應せしむるに最も重要なる手段である、他の動物に於ては他の特殊な完全なる本能を有するを以て模倣は殆ど用を爲さぬのであるが、人類に於ては模倣によつて動作の無限なる變化と條件とに適應するのである、模倣は子供が生活すべき世界を知得するに最も有用な學習法である。

模倣動作の種類

1、反射的（機械的）模倣　他人の爲した動作を知覺すると直ちに意識なしに殆ど反射的に行はるゝ模倣である、生後半歲位の嬰兒が他人の笑顏を見て笑ひ、泣くのを見て泣くが如きはそれである、又欠伸の如き其他情緒表出等之れに屬するものがある、此の模倣の刺戟は感覺的である、子供の性質は一般に鏡の如きもので其の觀察する所の何物でも反射するのである、何人でも其の人格、其の氣分は或點までは顏色、言語、動作に現はるゝものである、これが知らず識らずの間に子供の心中に反映して其の個性に影響するのである、同樣に數人の子供が常に一緒に居れば子供同志の動作が互に反射的に影響する、夫故に家庭に於ても學校に於ても亦交朋間に於ても、常に快活な溫和な親切なる空氣の中に子供を置くことは大切なことである。

反射的模倣

2、自發的模倣　此の模倣は他人の動作によつて直接起る機械的の反射ではないが、何等の目的なしに容觀的に見聽きしたる言語なり動作なりを唯だ主觀的に經驗し發表しようとするときに爲さるゝのである、

自發的模倣

即ち模倣しようとする意志もなく目的もなく唯だ自然に眞似るのである、此の模倣の形式は嬰兒期の後半より始まり三歳から四歳頃までは最も盛である、其の最初の模倣は單純なる發音及身振り等であるが、時としては複雜なる動作をも眞似る、自發的模倣の價値は運動の力及び知識の材料を集めて將來目的ある動作に役立たしめることである。斯くして集められたる知識は非常に大なるもので且つ最も根本的性質を有するものである、子供は動作や發音を習得せんとするは唯彼等がそれを見聞きするからではない、動作もし發音もして見て自らそれを感するからである、斯く自發的模倣によつて子供自身の世界を作り其の支配を得るに至るのである、自發的模倣は單に偶然の結果から起るものではなく、子供自身の注意を惹くものから始まるものである。

劇的模倣

3、**劇的模倣**　これは自發的模倣に甚しく類似して居り動作其物以外に何等の目的もないが、其の知覺して得た觀念を動作に現はすに自分自身の仕方が加はる所に違ひがある、聞いたこと、讀んだこと、又は觀察した事を眞似るに其儘の寫生ではない、人物でも動物でも石でも瓦でも、それが想像の力によつて種々なる方法に於て變化するのである、此の模倣は通常三歳頃から始まり終生繼續するが其の頂點に達するのは大凡四歳から七歳頃である、此の時期に於ては事物でも人物でも亦子供自身までも自分の想像してゐる何物かに變化するのである。

有意的倣倣

4、**有意的模倣**　之れは或る目的を有し何か自分の欲する所のものを習得せんがために模倣するもので、幼兒が箸の持ち方、匙や鉛筆の使ひ方等を眞似るのは之れである、此の模倣の形式は或る動作が或る目的の手段として用ひらるゝとき如何に眞似すべきかに關係し、其の衝動は得らるべき目的に關係する、有意的模倣は常に動作の行程の部分及び順序に注意が向けらるゝので多少分解的綜合的である、其の助けをなすものは記憶表象である。

子供は自發的に書方の動作を模倣するときには單に筆を取りて書き散らすだけであるが、有意的に他人の書畫等を模倣するときには其の筆使ひ、其の動き方等を能く注意して然る後に書くのである、此の模倣二・三歳頃から現はれるが、數年の間に有力となる、言語動作等を習得せしむるには如何にして爲さるべきかを說明して觀念を形成するよりも子供には模倣による方最も簡單にして容易である、動作は聞いて覺えるよりも見て習ふ方は四分の一の時間にて出來得る云はれて居る、夫故に模倣は習得の手段としては最も重要なるものである、殊に言語の習得の如きは規則によるよりも模倣によるのである、幼少なる子供には模倣は多くは自發的であるが、年齡を增すに從つて有意的となり尙ほ長ずるに及びては其の模倣は特殊の方向又は規則に從つて分解が用ひらる、動作の過程が可なり複雜なるときは分解して學ぶ方都合が宜しいが、餘り細かな要素に分解するときは子供には却つて把捉し難きものとなり、學習の自然の動機を破壞すること〻なる、分解は單に各部分に分つか又は全體を單純にするかの程度に止むべきである。

理想的模倣

5、**理想的模倣**　これは言語動作等を習得する意味の模倣ではなく、自己の私淑し崇拜し理想とする人物を模倣するもので、所謂英雄崇拜である、此の模倣は幼少時にも現はれることがあるが、概して十歳以後修養によつて現はれるのである、かく子供は模倣によつて發達し模倣によつて人となるのであるから、模倣の教育的意味の甚だ深きものあるを思はざるを得ぬのである。

模倣は知覺したる事物、殊に同じ種族の他の者によつて爲されたる運動や發音を反復せんとする傾向で

好奇心

ある、此の本能は動物が其の周圍に順應するためには直接有要のもので、幼弱の動物に取つては、自己の機會的の經驗によつて適當なる隱れ所を求め、食物を選擇し、或は敵を避くことを學ばんよりは、既に其の環境に順應したる成熟者を模倣することが、生存上最も適當な方法である、多くの事物を殆ど習得によつて學ばねばならぬ人類の幼者には此の模倣の力に賴ることが一層大なるべきは云ふまでもないのである。

二、好奇心（求知本能）　好奇心は模倣や遊戯と異り動作の態樣よりは感覺を確實ならしむることに關係する、即ち新らしき感覺を獲得せんとする傾向で知的欲求の基礎である、此の本能を有する動物が其の周圍の各種の事物に接觸する場合、例へば食物を取らんとするとき或は敵を攻擊し又は逃遁せんとするときには先づ以て其の新しき事物の何物なるかを試みんとするのである、此の如き好奇心を有する動物の幼者は自然の狀態に於ては之を有せざる動物よりも容易く其の環境に順應し得ることは明かである、既知の環境に入り來る新らしき事物は凡て好奇心の刺戟となり既に熟知せる事物又は觀念との新しき關係が見出さるゝに至る、斯くして知的成長發達の原因となるのである。

好奇心は、新奇なる刺戟に對して驚異を感じ、外界の變化其の他一般未知なる現象に注意を向け之を認識せんとする傾向である、即ち新らしき經驗に對する知的欲求である、嬰兒に取つては凡てのものが新奇である、從つて凡ての物に興味を有する、光線に眼を向け、新らしき物體を凝視し、音に耳を傾ける如き動作は皆此の好奇本能の現はれである、此の好奇心は子供の知識發達の基礎をなすもので、謳ふ鳥、咲き匂ふ花、流るゝ水、燃ゆる火凡て子供の周圍に起る自然界の現象、人事界の出來事等は皆此の好奇心によつて感興を生み其の理解に進むのである、言語は此の好奇心によつて其の進歩を促進せられ自己の要求する物を得んとする手段に供せらるゝのである、必要は大なる教師であると云はれて居るが、幼時生活に於ては好奇心は尙ほ偉大なる教師である。

好奇心と注意と興味

1、好奇心と注意と興味　好奇本能は所謂注意と稱する意識の集中作用と、之に伴ふ興味と稱する感情とを生ずる、物を食べようとする動作又は危險なる物から遁れようとする動作に心を向ける單純なる作用は榮養本能又は恐怖本能の結果である、然るに食物の味ひ、又は恐怖の對象となるものゝ特質に心を向けるのは主として好奇心である、好奇本能を惹起する主要なる刺戟は目新らしい事物、奇異な事柄であるが、其の刺戟が有效なるためには或程度の强度がなければならぬ、凡ての物は最初には皆新奇であるが、音にしても光りにしても又色にしても同じ强度のものが反覆されては好奇心を起さぬ、客觀的の刺戟の强度のみが好奇心を起す唯一の條件となるものではなくて、有機體の感受性の强弱にも關係する、又個人々々によりても同じ音、同じ色、又は同じ物體に對する感受性が甚しく異るのである、子供の本能が發達するに從つて或る刺戟に對する感受性が强くなり、好奇心を起す條件も亦增して來るのである、例へば子供の鬪爭本能の絶大なる時期には戰爭や劍劇等の話しを好み、其の好奇的興味は新しき本能の發達、新しき經驗と共に變化する、而して此の好奇的興味が一つの物より他の新しき物に移り行く毎に子供の知識は擴げらるゝのである。

2、經驗的好奇心、推論的好奇心　好奇的興味の增加には二つの方法がある、一つは子供の環境の變化及擴充より來る新しき刺戟により、他は既知の事物から更に新しき關係を見出し新知識を增すことに依つてである、兒童研究に於ては子供の有機的及本能的發達の如何なる時期に於て如何なる興味が自然的に最も

強盛であるかといふことを決定することは最も重要なることであるが、子供の好奇心發生の各時期を觀察するに、何か新らしい物でなければ子供が滿足しないといふ時期と、古い既に能く熟知して居る物の外は要求しないといふ時期がある、斯る變化は不規則ではあるが、兎に角子供には自分の環境の或る方面に於ける知識を完成せしめやうとする好奇心のあることを示唆するものである、即ち古いものゝ中に新い經驗を見出さんとするのである。早き幼時に於ては新らしい事物が提供されさへすれば好奇心が起る、かく新らしいといふ單なる事實によりて惹起さるゝ好奇本能は經驗的のものと呼ばる、其後になると同一事物が好奇心を起す、これは新しい感覺又は觀念からではなく其の物の有する特質と他の事物の特質との關係を知らんとする欲求からである、かゝる好奇心を推論的又は關係的の好奇心と呼ばる。子供には其の經驗すべき新らしき事物は甚だ多いので其の好奇心は主に經驗的である、然るに事物の關係についての多くの知識を有する大人には其の好奇心は多くは推論的である。

好奇心と質問

3、好奇心と質問　子供は言語を話し得るに至るまでは其の興味は主として新しき感覺を得るにありて事物の關係についてゞはない、然るに言語による發表本能が發達したるときには頻りに質問を發して經驗したる事物の名稱を尋ねる、そして其の名が答へられたるときに滿足するのである「此の名稱を知ることは子供には最も新しいことである、種々なる事物や動作や名稱等が子供に熟知されたるときには子供の興味は事物の關係に轉ずる、そして「其れは何のためであるか」、「どうしてそんなことをするか」「なぜ、どうして」といふ樣な質問が起る、暫くすると又子供の興味は事物や動作から其の起原、原因等に移る「これは何處から生れた」とか、「何故かやうになる」とかいふ質問が多くなる、此の如き質問に對しては唯だ一般的の法則なり事實なりを簡單に答へれば子供は滿足するのである、子供の興味は又既に學び得たる眞理の應用に及ぶことがある。例へば「太陽が沒するのか」といふやうな質問をするが、此れに對して「太陽が沈むのではない」と答へると、更に「それではなぜ暗くなるのか」と問ひ返すのである、かゝる質問の時期は思考作用の働きかけた三・四歳頃に最も多い。時としては一般的眞理に關する質問が根ほり葉ほり次ぎから次ぎへと連續して鷄と卵との關係のやうに大人を殆ど當惑せしむることがある。幼兒が事物に注意を惹くやうになつてからは動くものや動作等は好奇心を起す最も強い刺戟である、此の傾向は終生繼續するが其の最も强盛なのは學校に入學する前後である、子供の觀念內容を爲すものゝ內で動作に關するものが比較的に多いといふことが種々なる實驗によつて示されて居るが、此の事實は子供の興味は動的のものにあることを物語るものである、又色は形よりも興味を有たれ、大人よりも動物や子供に興味を有するが、十二三歳頃になると歷史に興味を持つやうになるが、これは歷史は再生的の形に於て新らしき環境と經驗とを供給するからである、此の時期の子供の讀物は歷史的のものゝ多いのも之れがためである、青年期に進むに從ひ、社會的の研究や道德宗教等の問題に對する好奇心も起り美術的興味も亦此の時期に起る、斯く好奇心は新らしい本能の發現によりて次より次ぎへと變化するが故に、好奇心の變化は新本能の發現を表徵するのである。

好奇心と教育

4、好奇心と教育　兒童の教育に於て其の教授すべき問題につき、兒童の興味を喚起することは最も大切なることであるが、此の興味が教育上價値ある所以は子供の心を喜ばせ愉快ならしむるためではない、知識に飢ゑたる心を滿足せしむるために注がるべき努力を振起する所にあるのである、興味の眞の價値は子

供は何れだけの愉快を以て勉強したかといふことではなくて、其の勉強中何れだけ多くの努力が注がれたかにあるのである、好奇心によりて努力せんとする强き氣分を起さしむるに最も都合よき條件は、研究せしむべき事柄と既に熟知したる興味ある經驗知識との關係を知覺せしむること及び既に得たる知識に對する受容性を顧慮することである、教授の目的として何を教ふべきかを決定せねばならぬが、心理學的には如何にして又如何なる順序に於て教授さるべきか、又各教材及教材の一部が次ぎの教材に對する興味の基礎となり得るやう工夫を要し、兒童研究の立場からは各年齢に於ける自然的好奇心及興味が利用せられ得るためには何時如何なる教授が爲されねばならぬかを決定せねばならぬ、

三、遊戯　遊戯は深き內部の本能に其の起原を有するもので、自發的な、自由な而かもそれ自身に於て十分なる滿足を與ふ所の活動である。遊戯は實に幼兒に於ける心的生活の中心を爲すものであり、否な寧ろ幼少なる子供の生活全部を爲すものである、凡て人間の活動は全人格の發展を達成すべき主要要素を爲すものであるが、子供は此の遊戯活動によりて全一體としての個人を發達せしむるのである、而して遊戯活動は內部の本能要素と外部の環境要素との輻合によつて種々なる條件の合成的結果によつて發達するのである、遊戯に關しては次章に詳述することゝする。

第七章　子供の遊戯

一、遊戯とは如何なる活動であるか　遊戯は自發的本能に基く活動で、子供の純眞なる生活其物が卽ち遊戯である、遊戯は高等動物に特有なる活動で、人間に於ては遊戯生活の時期は甚だ長いのである、此の間に子供は種々なる本能を完成し心身を錬磨し、將來獨立生活の自然的準備をなすのである。

遊戯は子供の爲すことで作業は主として大人のすることであると一般に考へらるゝが、然し此の二者を全然區別することは困難である、何故ならば本來遊戯と作業とは共通の要素を有して居り、客觀的には何れが遊戯であるか作業であるかを區別することは出來ないやうなことがあるのみならず、主觀的にも亦其の區別が容易でない場合は屢々あるのである、遊戯といひ、娛樂といひ、作業といひ、勞働といひ、何れも皆吾々が、人間の活動の種々なる形式を區別せんがために附したる名稱である、されど遊戯と作業との間には自ら其の特徵のあることは云ふまでもない、これを生理的見地より區別して見ると作業は身體及腦髓の同一部分を同一方法で長時間使用することが多い、然るに遊戯に於ては活動の一種類を繼續することは興味の繼續する間だけである、且つ種々異つた方法で身體の各部を運動せしむるので、變化なしに長く身體の一部を動かすといふことは普通にはないのである、作業にも身體各部を動かさねばならぬ種類のものもないではないが、其の活動が始終努力的に差向けられてあるので、身體の或る部分に無駄な骨折りが費さるゝ、然るに遊戯に於ては最も有效なる精力を有する部分が自由に活動するが故に作業に於けるよりも其の活動量が多くても疲勞が少いのである、勿論或る動作は佐業と遊戯の兩作の主要なる要素を含んで

居ることがあり、これを明確に區別することは困難である、或る種の作業には遊戯の主要なる要素が含まれ、最も愉快なる遊戯にも作業の如くに差向けらるゝ努力を要する、競技運動の如きは其の活動は多少規則に從ふべき努力が差向けられ、又多少同一動作を反復する點に於て自由遊戯と作業との中間にあるものゝやうにも考へらるゝが、併しそれは自由に選擇され、活動其自身のために遊ぶもので期待さるべき結果のためではないのである。

作業は其の發達の順序から云へば遊戯よりも遲い、而して興味といふものも少い、遊戯は其自身に於て愉快なる活動であるが、作業は其の結果に於てのみ愉快である、又其の目的に於ても異つて居る、遊戯は自發的で、其自身のための活動であるが、作業は其の勞力以外の必要なる目的によりて課せられたるものである、チャンバースといふ人は六歳から十八歳までの兒童生徒二四八一人に就いて「何んな遊戯が一番好きであるか又、何故に遊戯するか」といふことを試問したところが、幼少なる兒童の多くは皆、「面白いから遊ぶ、自分が好きだから遊ぶ」といふ答をしたのである、これは如何にも道理な答で、幼少兒童は自分で面白いと感ずるが故に遊ぶのである、自發的に遊ぶのである、遊戯は實に子供の生命である、子供の生活全體である、遊戯に關する學說は種々あるが左にこれを略述する。

遊戯に關する學說

二、遊戯に關する學說　1、過剰勢力說　シルラー・スペンサー說とも云はれてある、シルラーは有名な獨逸の詩人であるが、近世に於て遊戯に關する理論を述べた最初の著者である、スペンサーは英國の哲學者で、シルラーの說を支持してこれに科學的の形式を與へたのである、此の二者によりて唱へられた說によれば、遊戯は子供の過剰なる勢力を消費せんために起る活動である、子供は其の生活上最も必要なるものは、凡て親から供給せられ保護せられて居るので、何事にも心身を勞するといふことはない、從つて子供には精力が過剰となり、此の過剰勢力が自發的に發動せられて目的のない活動が生ずる、此の活動をば吾々は遊戯と名づけるのである、遊戯は即ち鬱積せられたる勢力が、精神運動通路に横溢したる結果であると說くのである。

過剰勢力的

此の說は眞理の幾分を含んで居る、健康なる子供は病弱な兒童よりもよく遊び、休養せる兒童は疲勞せる子供よりも活潑に遊戯することは事實である、然し、兒童でも、他の動物でも其の勢力が、過剰であつても過剰でなくても遊ぶことは同樣に又事實である、子供は自然的に靜止無活動のものではない、殆ど疲れ切つて精力が無くなるまでも遊ぶことを止めない、病氣のときでも遊びたがるのである、又其の過剰勢力をば有意的に作業にも遊戯にも用ひ得るのである、子供は成人の後、實生活に入りてからも遊戯を全然廢するといふことはないのである、遊戯には人種の別、男女の別、年齢の別等に係らず或る特殊の形式を有するものが甚だ多く、嬰兒が手を握り、足を蹴り、又手肢を引いたり、押したりする運動や物を把へ抛つ等一見目的なき運動は勿論此の學說によりて說明することは出來るのであるが、狩獵、角力、木攀り、球戯其の他の模倣遊戯等に就ては此說だけでは解釋が出來ないのである。

準備說（グルース說）

2、**準備說**　グルース說ともいふ、一八九八年にグルースは「動物の遊戯といふ書を著はし、其後三年にして又「人類の遊戯」といふ本を出版してゐる、其の書に於て彼は「遊戯といふものは、未熟なる力を發達せしめ、それを生活上の使用に準備せしむるためになす働きである、即ち子供は種々なる遊戯によりて將來の實生活に必要なる活動を練習するものである』と結論して居る、人類の本能は數から云へば他の動物の本能

よりも多いが、生存競爭上に於て生活上の必要に間に合ふといふことが却つて少いのである、夫故に人類には最も完全なる本能よりは知力の方が一層重要で且つ有益になつて居るのである、子供の知的能力が發達しつゝある間に、且つ本能が完成されざる間に、子供自身を發達せしむるために起る自然の活動は即ち遊戯である、遊戯を必要ならしむるのは本能が不完全で未發達の狀態にあるからである、本能を完成せしめ、又はこれを實際生活上の役に立つやうな習慣に變形せしむるための豫備的練習が遊戯の本質である、此の說によれば成熟後關係せねばならぬ如き活動を遊戯となす所の動物は生存競爭に於いて優勝すべき最も好き機會を有することゝなる、かく此の說は遊戯の生物學的意義、否な寧ろ其の教育的意義を强調して居る。

遊戯は無論本能に基礎を有し、凡ての運動は一般的意味に於ては實際生活の準備活動であり、身體的並に心的能力は練習すればする程其の發達は延び行くのである、人間の社會生活に於て最も必要なる德性例へば自制、忍耐、勇氣、協同、進取等の諸德は遊戯によりて涵養され發達するのである、然しグルースの所謂遊戯の準備的機能は此等の一般的の意味よりは寧ろ一層限定されたる特殊のものと考へられてある、猫が轉ろがる毬に戯るゝのは其の餌食を捕へる準備練習であり、狗兒が咥み、咬み、走るのは自己防衛及敵又は獲物に打勝つべき準備であり、少女が人形遊びをするのは將來母としての仕事を準備するのであり、男の子が狩獵し、物を蒐集するのは將來家族を扶養すべき實際生活の準備行動であるといふやうに或る特殊の意味に於ける準備である、若しも凡ての子供が最もよく遊戯的に模倣するが如き職業を選ぶならば遊戯の準備的價値は最も明確となるのであるが、此の如き選び方は現在に於ては普通一般とは云ひ難いのである子供の特質ある運動興味と現在の大人の職業との間には何等確定的關係ある譯ではない、子供の遊戯の多くは大人の生活々動とは唯だ僅かに類似して居るのみで、寧ろ原始的、歷史以前の人類祖先の職業に類して居るのである、子供の遊戯の大部分が其の將來の勤勉なる仕事に似て居るよりは寧ろ類似してゐないところに意義があるのである、遊戯は子供に取つては大人の仕事と同樣眞劍なものである、大人に仕事が無くてならぬ如く子供には遊戯が缺くべからざるものである。

反復說

隔世遺傳說

3、**反復說**　又は隔世遺傳說ともいふ、スタンレーホール及其の一派の學者によりて唱へられたもので隔世遺傳說の特殊の應用である、即ち子供は原始的歷史前の人類の生活を遊戯中に反復するものである、遊戯の運動的及心理的の動機は遠き過去に存在するのである、遊戯に於ける種々なる氣分や動作は凡て遺傳的の本能であるからして、其の興味は常に遺傳系統の近さと强さとに比例する、眞の遊戯は往古の種族的活動を繰返すものであると說く、此の說は他の說に比して優つて居る主なる點は遊戯の形式に就て他よりも一層十分なる說明を與へ居ることである、即ち遊戯の基本的な形式は、社會的產業的の諸條件が全く變化して居るにもかゝはらず時代より時代を通じ同一である、夫故に遊戯の準備的價値は第二次的の機能であると見るのは妥當であるが、大人の遊戯と競技に就ては滿足すべき說明を與へて居らぬ所は此の說の缺點である。

休養說

4、**休養說**　これはパトリツタの說で、彼れは遊戯の本質について三つの重要なる點を擧げて居る、一、遊戯は自由で、自發的な而かも自己發達及自己滿足を促がすもので、兒童の活動の凡て及び成熟者の活動の多くを包括する、二、兒童の遊戯及成熟者のスポーツは密接なる相關々係を有し同一原理を以て說明せらるべきものである、三、兒童及成熟者の遊戯活動は古代人の活動の形式を取る傾向を有する、此の點に就

て彼は野球、蹴球、ゴルフ等の如き遊戯の實例を擧げて說明して居る、彼は又次の如く主張して居る、作業の本質には緊張したる意志の集中、自制、衝動の禁止等が見出さる、此等が人間の文化を生み出せる能力であるが、兒童に於ては此等の能力は未發達である、而して如何なる場合に於ても此等の能力を使用するときは甚だ急速なる疲勞を來たす、然るに遊戯に於て費さるゝ精力は最も少なき抵抗を以て利用せらるゝ、兒童の遊戯及び成熟者のスポーツは何れも最も古い最も單純なる原始的な種族的活動の形式を有し人類發達の歷史に於て原始的であればある程現代生活の緊張から解放せられ、弛緩せられて慰安と興味とを與へらるゝのである、兒童の遊びが單純なる原始的形式を取るのは、作業の中に含まれたる高等なる能力が未だ兒童には發現してゐないからである、成熟者が運動競技をなし又は球技、競馬、劇場等の興味ある觀覽者として樂みを分つのは、作業の努力と緊張とから弛緩され慰安と休養とを與へるからである、單純なる原始的の遊戯は自然的な、自發的な滿足と喜びとを與へるのである、此の理論の適切なる說明として彼は野球の例を擧げて人類種族の活動中最も古い而かも最も屢〻行はれたる活動要素は、投げること、打つこと及び走ることの三つで、此等は人類種族が野獸や敵を防禦し、又は食物を求め、獲物を打つために學んだ活動であるが、それ等は皆野球遊戯の活動中に含まれてあるのである、此の如き活動が包含せらるゝ競技殊に競爭とか鬪爭とか原始的情緒を刺戟するが如き要素を有するものが好まるゝのは、かゝる活動の根跡が遺傳的に腦髓中に殘存して居るからであると見なければならぬと、此の說に於ける遊戯の本質は休養的再生的、及衞生的の特質を有する點にある。

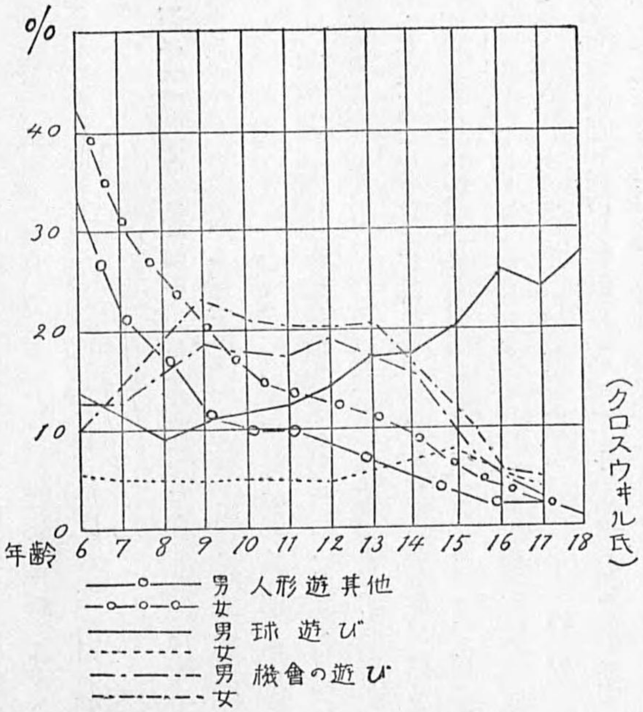
生物學的說明

5、生物學的理論　最後に生物學的の說明を擧げる、此の說はミス・アブレトンの著書遊戯の比較研究中に述べられてある、卽ち遊戯は身體の構造と關係するもので、遊戯活動は身體成長の要求を滿足せしむべき特質を有するものである、嬰兒は頭部及腕の筋肉は最も强く從つてこれを動かすことも最も多いが、これは身體構造の發育上然らしむるものである、神經系統、感覺器官及腦髓の發達と共に肉體的遊戯の統制が起る、又手肢の發育の盛なる時期に於ては、競走、狩獵、爭鬪的遊戯が最も多く好まるゝのであると說く。

子供の遊戯の一般的傾向

三、子供の遊戯の一般的傾向　といふことについては多くの統計的、觀察的或は問答的研究によりて主なる遊戯興味、其の特質、種類及年齡、性別、人種、環境、氣候、其の他の要素による變化相違等は明かにせられてある、遊戯や競技の種類を一々列擧すると非常に多數なものとなる、ジョンソンは五七五種を上げて居り、クロスウエルは男女殆ど同數の二千の兒童について彼等の間に行はるゝ遊び及競技の種類七〇〇を擧けて居る、其の表の中には嬰兒の遊戯の多くが省略されてあるのである、又此等の研究が爲されたる季節に行はれてゐないものも幾らか漏れてゐるに相違ないから其の表は完全なものとは云はれないのである、兒童の遊戯生活は嬰兒から兒童後期に至るに從ひ益々變化して且つそれが一層明確になつて行く、クロスウエルは此の變化を十二段に別けて居る、遊戯及競技の種類は誠に多種多樣であるが、精密に吟味して見ると人種と環境とに係らず同一年齡の子供には其の一般的特質に於て非常に相似寄つてゐる、遊戯の主要なる特質は主觀的には決定さるゝが、外觀的形式は外部の影響により非常に變つて居るのである、實に此の年齡ほど遊戯の特質に影響するものはない、子供の夫々の時期によりて各〻其の特有なる遊戯がある、のみならず遊戯競技其の他の性質も亦明かに異つて居る、又各時期を通して持續する遊戯に於て

は其の興味は或る一定の時期に於て頂點に達する、エリス及スタンレーホール等の研究せる所によれば女兒が人形遊びをするのは始めは比較的目立たぬ程であるが、或る一定の時期に達すると急に著しき興味の増加を見、それより漸次下降するのである、玩具の興味は幼兒期に著しくして、それが兵兒童期を通じて漸次下降する、球戯になると男子に於ては漸次著しく増昇して成年に至るまでそれが繼續する、これに反して女子の球戯は決して顯著なる興味を起すことはないが、六七歳頃から十六七歳頃まで殆ど變化なく續繼する。



（クロスウキル氏）

四、遊戯に於ける自由と、其の年齢による變化　子供の最初の遊戯は全部自由である、即ち規則といふものに拘束されないのである、生

後一・二年に於ては子供の活動を指導しやうとする試みは却つて子供の機嫌を損し憤怒の情緒を誘發することが屢〻ある、次の三、四年間は遊戯の規則たる役目をなすべき習慣が模倣によりて決定さるゝ、然し子供の遊戯を命令すべきことは反對の結果を來たすのであるから、暗示の如きも餘程注意して與へねばならぬのである、學校に入る頃になると單純な規則による競技が準備せらるゝ、然し餘り規則的の競技になるとそれを遊ぶために多くの有意的努力が要せらるゝので速かに興味を失ふに至る、例へばハンカチ落しの如き單純な規則の遊びであると子供は大層喜ぶものであるが、それが稍〻複雜なる仕方の遊びになると其の遊戯を熟知してゐる年長の子供には面白いが幼少の子供には甚だ煩はしいものになる、最初五年の間は、兒童の活動は全く自由で想像的である五歳から十歳頃までの時期に於て競技（ゲーム）が漸次多くなり、十二三歳頃から後は劇的遊戯の外は殆とゲームとスポーツに代る。

遊戯は個人が自己自身のためにたす動作で、競走等に於ては打勝たんとする本能的欲求を滿足せしむべき直接の結果を得べく遂行するものであるから、此の意味に於ては自由であるが、若し遊ぶことを強いられて努力が拂はるゝならば其の動作は作業である、庭球が練習といふ利益のために行はるゝならば遊びでなくて作業である、遊戯も、ゲームの規則によつて其の活動が一定の方向に差向けらるゝのであるから、此の意味に於て遊戯に於ける自由も年齢と共に減少する、併し此の規則に從ふといふことは眞の意味に於て自由を増すことになるので、一層複雜なる團體競技等を演ずる場合には各個人の動作を制限することによりて却つて自由を増すことになるのである、子供は年長者が共に規則を指導しながら一緒に遊ぶのを好むのであるが若し仲間の誰れかゞ規則に反することを爲すと、ゲームの進行を妨げることになるので、そ

遊戯に於ける力と年齢による其の變化

の妨害者を嫌ふやうになる、これが自由の手段としての規則を敎ふる最大の敎訓である。

五、遊戯に於ける力と其の年齢による變化　子供は生後半年頃になると遊戯を始める、誕生近くなる頃までには可なり多くの種類の遊びをなすやうになる、而して殆ど凡ての感覺及運動の統制が自由になると愉快なる經驗は再三反復せられ、目と耳とは其の喜びを感得する主要なる器官となる、而して獨り外物のみならず子供自身の身體の一部分も遊び道具の一つとして使用せらるゝ、殊に一、二ケ年の間は口と發音機關とは無限の樂みの源泉である。

幼兒の遊びに最も多く用ひらるゝ力は感覺器官と筋肉とである、然しこれを正確に且つ一定の方法に於て用ひやうとするのではなく唯だ單に自由に繰り返し繰り返し行ふのである、而して幼兒に取つては目に映ずるものは凡て視覺的遊戯であり、耳に聽ゆるものは凡て聽覺的遊戯であり、言語の練習は發音遊戯であり、手肢の運動は筋肉遊戯である、二・三歳の間、子供の遊戯は全く感覺運動及知覺的である、而して此の時期には運動に大なる進歩がある、動作は複雜となり、身體の各部が殆ど同時的に使用せらる、又感覺運動遊戯の發達と共に事物の類似、相違が明確に認識せられ、空間知覺等の心的能力が加はつて來る。

三歳頃になると再生力が廣く遊戯の上に働き、子供は曾て觀察したる動作や出來事を再生することに喜びを見出すのである、其の遊戯の殆ど凡てが想像界に移り行く、而して其の自由は完全に行はるゝ、子供が成長するに從ひ、單なる身體的力の練習は餘り重要なる要素ではなくなるのであるが、併し青年期近くなると身體的力の試驗的練習がゲームに於て最も重要なるものとなる、殊に男子に於ては此の時期の終り頃になると或る標準卽ち記錄を作ることを欲するに至る。

遊戯の本能的要素と其の年齢による變化

各發達時期に於ける遊戯

六、遊戯の本能要素と其の年齢による變化　遊戯に於て最も早く見はるゝ本能は變化を喜ぶ好奇心である、此の本能からして「居ないく〳〵バー」の如き、其他突然の變化が繰返して起る循環的感覺運動が喜ばれるのである、これは、子供の遊びには律動的傾向が重要なる要素をなして居ることを示すものである、三歳頃になると態度、音聲の情緒的表出運動が起る、表出運動は始めから本能として大切なる役目をなして居るのであるが、一種の遊戯として表出せらるゝに至るのである、模倣的動作は、それが何等の目的もなく反復して行はるゝときはこれを遊戯として見ることが出來ないが、此の模倣本能に基いて三、四歳頃から六、七歳頃に劇的遊戯が現はれて來ると自分で桃太郎になつたり、牛若丸になつたりして喜ぶのである。

鬪爭的競爭的本能は如何なる時期に始めて發現するか正確に云ふことは困難であるが、競爭は七歳から十一、二歳の兒童の遊戯に最も優勢なる要素をなして居る、然し青年期に於て團體的又は社會的本能が發達すると野球、蹴球の如き協同的の競技が最も好まるゝのである。

斯くの如く年齢によりて遊戯興味が變化するといふことには種々なる理由がある、既に本能の章に於て述べたる如く吾々の本能には種々の特性があり或る本能的傾向は遲く發現し、或るものは一時的の性質を有し、皆夫々發生的階段があり、內部の身體的及び生理的條件と相俟ちて發現するのである、夫故に子供の年齢に應じ最も適當なる遊戯を選むには各時期に於ける子供の本能的能力と遊戯との密接なる關係を十分に理解することは子供の實際の一般的性質を觀察すべき最も價値ある仕方である、左に更に各時期に於ける遊戯發達及其の特質の一般を略述する。

七、各發達時期に於ける遊戯　1、嬰兒　此の時期の特有なる遊戯は感覺及運動の練習である、生後一

嬰兒期

ケ年の間卽ち歩行前の運動は凡て皆練習である、視覺、聽覺、味覺、嗅覺、皮膚覺等を刺戟するものは、外界のものは勿論、子供自身の身體の一部ですら皆此の目的のために供せらるゝのである、フレーベルが「嬰兒の横臥してゐる上に毬を吊せ」といひ、ヘルバルトが「搖籃の周圍に色々な形の物を置け」と云つたのは何れも視覺の練習を助けんがためである、嬰兒は又物を握つたり、引張つたり、嘗めたりするのは運動の練習であるから、これを助くるためには種々の玩具が必要となるのである、玩具は小兒の生活から離すことの出來ない大切な物である、嬰兒期に於ける遊戯に必要なる玩具としては視覺練習には風車、風船、小旗等、聽覺練習にはがら〳〵、でん〳〵太鼓、其の他自ら鳴らし得るもの、皮膚覺及運動感覺の練習には、おしやぶり、其の他嬰兒の把持し得るゴム製、木製の玩具である。

幼兒前期

2、**幼兒前期**（歩行後から三、四歳頃）此の時期には模倣本能が盛であり從つて模倣的の動作から劇的遊戯が漸く現はれて來る、又觀念再生の作用も漸次發達するので想像作用が殆ど自由遊戯の主要々素となり、筋肉や感覺器官に適宜愉快なる練習を與へるのである、此の時期には競技といふものはなく、遊戯には殆ど形式が備はつて居らぬ、興味は甚だ迅速に變化するが、玩具を與へて自由に任せて置けば子供の精力と時間との殆ど全部は餘念なく費さるゝのである、又相手を喜ぶのは友情の要素と見るべきものであるが後ちの時期に於て現はるゝ程のものではなく寧ろ自ら與へるよりも他より得る方の相手を欲するのである。

幼兒後期

此の時期に現はるゝ活動傾向は社會的愛他的の衝動ではなくて殆ど純粹なる個人的自己中心的のもので、其の結果は主に感覺器官の能力及基本的筋肉運動の發達である。

3、**幼兒後期**（四歳から六歳頃）此の時期の遊戯は前時期の活動を繼續し、これを仕上げて完成するのである、從つてここには時期より時期に至る進歩的變化があるのみである、幼兒期に於ける遊戯は此の後の時期に於ける遊戯の如くに作業的要素を含んで居らぬ、純粹な遊戯其物が目的で、活動其物に最も重要なる興味があり、活動以外の間接目的には興味がないのである、此の時期には遊戯要素としての想像力は其の絶頂に達し、模倣力も亦重要なる働きをなして人形遊び、まゝごと、電車ごつこ、汽車遊び等の模倣遊戯及單純な劇的遊戯が最も多くなり、自ら母となり子となり、或は兵隊となり大將となりて創作的空想の中に最大の興味を見出すのである、相手を喜ぶことは前時期より增して來るが、まだ個人的欲望が優勢となつて居り、協同心よりは敵對心の方が强いのである、併し友達と遊ぶことによりて漸次利己心も幾らかづつ抑へられ協同的の精神も發達して來るのであるから、遊び相手を有つといふことは社交的教育に最も大切なことである、此の時期に於ける子供の時間と興味との大半は又玩具によりて助けられ、其の玩具の使用によりて廣範圍の筋肉運動を統制し、物を組立又は建設し、かくして遊戯によりて或る一定の目的を遂行し得べき能力が養はるゝのである、勿論子供の興味といふものは長續きはしないものであるから、困難なる目的をなし遂げるといふ固執心がないのは已むを得ないことである、幼稚園時代になると環境が適當であり周圍の事情が許すならば、單純なる遊戯を一週間位續けて、それで尙ほ興味が盡きないやうに繰返して遊ぶことが出來る。

兒童期

此の時期に於ける主要なる衝動は好奇心及質問となりて現はれる、而して種々なる遊戯活動を刺戟して身體的、精神的能力の迅速なる發達を促がすのである。

4、**兒童期**（六歳から十二、三歳まで）此の時期は身體的にも精神的にも再調整の時期であり又過渡期で

ある、成長は前時期及び次の時期の何れよりも遲いが、此の期の後半よりは身體の發達は比較的壯健を增し、疾病及疲勞に對する抵抗力は增進する、腦髓は大さに於て殆ど成年のそれに近づき、記憶、想像、思考等の機能的能力の發達も迅速なる進歩をなすのである、子供の生活中最も活潑なる時期で他の何れの時期よりも最も多くの競技を遊ぶ、好奇心及事物に關する發動的質問は前期の通りに繼續する、想像力も盛であるが、前よりは奔放的ならずして抑制的であり、其の構成上より云へば獨創的となる、模倣は新らしき形式を取りて一層有目的となり、遊戯の動的方面は知的方面よりは尙ほ優勢であるが、知的要素の遊戯も次第に增加して來る、努力は一層有意義に且つ組織的の方法に費され、又漸次熟練を要する所の活動に費さる、熟練が增すに從つて、個人的競爭が著しく遊戯の中に入り來る、此の時期に於ける遊戯は兒童の實際の性質能力及特徵を最も能く現はすべき最も價値あるもので、女子には人形遊び家庭遊び追掛遊び、男子には單純なる球技狩獵蒐集、考物等は最も多く行はる、競技的遊戯の增すに從つて規則に對する服從といふことゝ、共同といふことゝを一層必要に感ぜしめ、法則に對する尊重心、規則の强制に對する服從心は著しく發達する、此の時期の終り及び次期の始め頃に於ける兒童特に男子の身體的及精神的特徵は、著しく原始人類に似類を有する時期であると云はれて居る、其の身體的活動は益々敏捷となり、走ること、攀ること、泳ぐことにも熟練し、身體上の統制は益ゝ器用となる、一般に此の時期に於ける遊戯は十一、二歲頃より組とか、チームとかいふ團體的遊戯や競技が增加して來るが、まだ全體として共同的、團體的のものよりは個人的競爭を含むものが多いのである。

5、青年期の前半（十三、四歲から十六、七歲頃まで）青年期に入ると身體的にも著しき變化があるが、特に感情上の急激なる變化と共に成熟したる興味が起つて來る、遊戯生活に於ては、組、チーム等が其の主要なる位置を占む、個人的競爭心も尙ほ銳く、相撲、柔道、擊劍等の力業や各種の野外運動等も尙ほ盛に行はるゝ、社會的本能が漸次有力となるに從つて兒童生活の社會化といふことが迅速に其の效果を現はし、眞の意味に於ける協力共同といふことも始めて其の特質が現はれて來る、主將なるの才能や主將に從順なるべき意志等は目立つて增加して來る、チームの興味のために自我を抑制すべき能力を有するのは即ち社會的關係に於ける種々なる義務の感が發達したる證據である、性關係の事柄も多くの競技や娛樂の中に其の姿を現はし、女子は男子の特質ある競技に對して興味ある觀覽者となる、青年期の興味に甚しく成年の興味に接近し、特に知的要素を有する競技が割合に多くなる、勇敢にして活潑なる競技が尙ほ興味の中心となつて居るが、前期に於けるが如く、靜かなる室內競技を全く除外する程度ではない、活潑なる競技の減ずるのは女子の場合に特に著しいのである、遊戯や競技に於ける性の區別は此の時期の始めに於て最も顯著であるが、後半より減少するの傾向がある、男子には殊に漁獵狩獵、游泳、野營、冒險、探險等の種族的活動が盛となる。

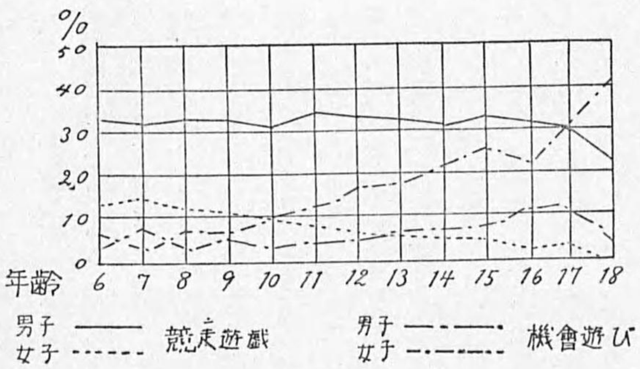
以上述べたる如く年齡要素による影響を概括して見ると年齡の增加するに從つて遊戯とは反對に競技や娛樂の數が增加するの傾向がある、成年に近づくに從つて個人的競技に社會的傾向が現はれる、遊戯及競技中に含まれてゐる身體的及精神的活動の複雜たる要素は年齡と共に增加し、運動其自身よりも或る一定の間接的目的が求めらるゝに至る、遊戯に於ける知的要素は漸次優勢となり、競技者は其の遊戯の價値を意識すること益ゝ大となり、自己の技倆を試むべき如き競技が一層盛になる、此の年齡による運動の變化は

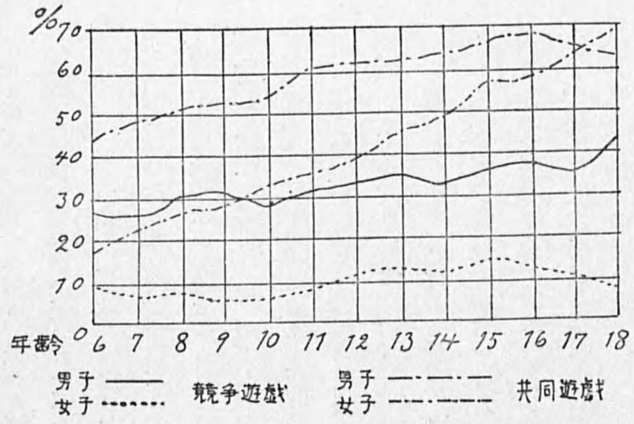
遊戯の性的要素

心的及社會的發達の進歩を知るべき最も價値ある標準である。

八、遊戯の性的要素　嬰兒期及幼兒期に於ては性の區別は殆ど問題にならぬのである、此の時期に於ける遊戯嬰味の相違的發達に對しては本能的の理由もなければ身體的又は社會的の理由もないのである、若し幼兒が自由に何等の拘束もなく又年長兒童や成人等よりの感化影響を強く感ずることなく遊ぶならば此の事實は一層明かになるであらう、男の子も女の子と同樣に家や人形を喜ぶものである、而して彼等は男女の區別なく睦ましく遊ぶものである、然るに學校生活の始め頃から、特に社會的因襲の影響によりて七歳以上になると興味の相違的發達が起り、年齢と共に身體的及心的差異も增加して來る、クロスウイルの研究によると女子は七歳後になると通常規則正しく使用する遊び物の種類が多くなる、男子は慣習によりて影響せらるゝことは少く、女子よりも競爭的の競技に傾注し勝負に興味を有する、二千人の兒童によりて答へられたる七百種の遊戯中七十二種は男女共通のもので、百八十二種は男子のみに屬し、百九十七種は女子のみによりて答へられてある、マックヒーの調査によれば男子は各年齢に於て女子よりも走驅要素を含める競技を好み九歳後になると女子は男子よりも機會遊び(或は偶然遊びともいふ、トランプ等は其の一つである)を好み十二、三歳頃までは模倣的競技を選擇する、これに反して男子は競爭的競技を多く選むのであるが、此等の相違的傾向は成年に向ふに從ひ減少する、共同的競技も亦各年齢に於て男子は女子に優つてゐるが、年齢の進むに從ひ男女共に共同的競爭的のものが增加し、模倣的のものが減少する。

此の如く男女の性によりて差異を生ずるのは種々なる理由によることであらうが、男女兩性の將來の生活が必然的に異りて居り、又兩者の本能に於ても身體的及心的特質並に能力等の强さ及變化等が異る限りは其の相違を來たすのは自然であると見なければならぬが、併し女子には社會の習慣、制限、因襲等のために其の自然的にして自發的なる活動性を抑げ、最善の身體的發達の上に幾分の損失を蒙りて居るといふこ





とは多數の意見の一致して居る所である、此等の影響がなかつたならば、以上述べたる如き相違は十二、三歳頃までは實際普通に存するよりも遙かに少いであらうといふことは豫想せらるゝ、此れと連關して女子は青年期の始め頃に於ては同年齢の男子よりも心身の發達は早い、從つて興味の差異も一部分はかゝる不均等發達に歸因するといふことを忘れてはならぬ、一般に成熟期に近づくに從ひ社會的性質が發達するにつれて知的興味は增し、性の相違は再び幾分か低減する性に歸因する所の相違は十分注意に値するものであるから、遊戯及競技等の行程並に自發的遊戯の方向を考察するに大切なるものである。

遊戯の種族的差異

九、遊戯の種族的差異　遊戯の主要なる本質に於ては世界中著しく類似して居るが、クロスウイルによれば周圍の事情が比較的同樣なる一市内に住する種々違つた人種の兒童の遊戯中には尙ほ人種的の相違が見らるゝのである、併しこれは兒童自身の遺傳的相違といふよりは寧ろ家庭及び人種的因襲の相違に歸因するのである、アングロサクソン系のものは他の人種よりも遊戯に對する豐富なる能力を有し、殊に協同的團體的にして克己、忠實、犧牲等の精神的要素を含む所の競技を好む、此等の特質は本能的といふよりは傳統的力が重要らる要素をなして居るのである、されば兒童の遊戯を指導し、童謠童話等を創作して兒童の遊戯精神を鼓舞するものは將來の國家の運命を形作る甚だ重要らる地位にあると云ふべきである、英國の有名なる人物等の多くはエトン、ハロウ、ウィンチエスター等の學生時代に於ける運動生活が其の偉大らる性格を養成したのであると云はれて居る、人種的要素は無論地理的位置及氣候等によりて影響せられ南北兩極に近く住する人種の典型的遊戯は各異なるのであるが、それが時代と共に傳統によりて他地方に移入するのである。

遊戯の價値

一〇、遊戯の價値　遊戯の教育的價値は生活の價値に比例する、身體的、精神的、社會的、道德的、宗教的の性質等凡て遊戯から其の恩惠を蒙りて居る、而も其の恩惠は無限である、遊戯は嬰兒及幼兒の學校である、ブライエルは子供は生れて三、四ヶ年の間に學び得る所のものは大學の全科程に於て知得する處よりも多いと云つて居る、遊戯を以て時間の徒費であると考へる時代は最早や過去の昔となつた今日は寧ろ遊戯　ざる子供こそ時間を無駄に費して居るのである、遊戯の娯樂的、休養的、慰安的價値に就ては說明するまでもない、青年に於ても老人に於ても遊戯は人生々活の大なる役割を占めて居る、作業の勞働努力に緊張すればする程、遊戯によりて補償する慰安、休養が必要となる、悲哀、憂苦、其他不幸の境遇にあつて之れを慰むると共に之れを忘るゝものは運動遊戯である、激甚なる現代の職業勞務に於て其の疲勞より來る多くの悲むべき出來事に對しては遊戯は實に其の解毒劑である、活潑なる運動競技は血管運動の反應を增進し、健康快活なる情緒の發動を刺戟し、自發的活動を喚起し、勞働疲勞によりて生じたる體内の毒素を一掃し心身を回復せしむる、遊戯は又惡德の豫防藥である、狹い窮屈な不趣味な仕事の勞働者は、酒其他の痲醉劑に親しむことから救はれ、其の他有害なる刺戟誘惑も適當なる身體的運動競技から生ずる娯樂と休養とによつて防ぐことが出來るのである。

古來多く教育者は遊戯を以て感情を陶冶し心身の有害なる衝動を去り、これを正常ならしめ、健全に導くものであるといつて居る、例へば、鬪爭好きの傾向ある男子にはフートボール、相撲等によりて無益なる鬪爭に陷ることを避けしめ、又適當なる機會の許す限り探見、遊獵、釣漁、游泳若くは家畜の飼養に馴致せしむることが出來たならば、男子の亂暴なる破壞性、盜癖、動物虐待、其の他反社會的行爲を矯正せしむることが

出來るであらう、遊戯に對する十分なる機會が公園等の設備によりて提供せらるゝならば反社會的傾向が減退すべきことは豫測するに難くないのである、カールの述べた如く、規則正しき適宜の作業も亦同樣なる效果を有するものである、されば吾々は感情及本能の陶冶に適當なる手段を取り、これと同時に兒童の努力を積極的組織的目的に向けしむることは最も賢い方法と云はねばならぬ、遊戯は又グロースの云へるが如く、多くの本能及習慣に豫備的練習と實行とを與へ、從つて又廣き意味に於て有用にして幸福なる正常生活を準備せしむるものであることは否むことの出來ぬ、遊戯は又教師や兩親が考ふるよりも遙かに教育的で、而かも一層有效なるものである、即ち感官や知覺力、觀察力、想像力等を發達啓發せしめ、判斷力を養ひ、發明心を練るのみならず探見、冒險、獨創力等を進め產業其の他事務的才能の發達に適當ならしむる。

遊戯と生理心理的反應

遊戯及競技は品性を最も有效に陶冶する、克己、自信、共同、忠實、指導及從順、正義、正直、權利尊重其の他複雜なる社會的及產業的生活に必要なる諸德は、正當に行はるゝ遊戯の副產物である、遊戯の生理上及衞生上の價値は既に述べたる如く、身體の成長及各部器官の發達は適當なる遊戯によりて增進せられ、正當なる發育を遂げる、消化、呼吸、循環等凡て生活機關の健全なる活動を促進する、身體の持久力、疲勞に對する抵抗力、性欲の正常なる發達等は凡て自由にして完全なる遊戯の直接結果である、最後に吾々の忘るべからざることは、身體の鍛錬は即ち心の鍛錬であるといふことである。

終りに運動遊戯について生理的心理的反應に關し學者の研究せる結果を見るに、一、遊戯反應は作業反應よりも容易である、これは運動中樞は最も早くから又最も屢〻用ゐられて居るからである。

二、遊戯は作業よりも大なる活動量を生ずる、蓋し爲すことが容易で愉快であり、且つ作業よりも疲勞が少いからである、三、反應の强度が强い、これは注意が分散せず、且つ自發的であり、從つて興味は鋭敏である、四、遊戯は作業よりも成長發達に對して、一層良好なる刺戟を與へる、これは遊戯は自然的な、且つ適時なる本來の要求に合して居るからである、五、遊戯は凡ての反應の中で最應變的であるから、凡ての重要なる身體的及び心的活動の絶えざる適當の練習を供給する、此等の理由からして兒童は遊ばねばならぬ、遊ばされば人となることが出來ぬのである、プラトーンの云へる如く教育は兒童遊戯の正しい指導から始めなければならぬ。

遊戯と發達

一一、遊戯と發達　「必要は發明の母である」と云はれて居るが、そればがりでなく必要は凡ての知識の母である、動物も民族も、個人も如何にして其の食物を獲、危險から免れ、其の種族を保存すべきか、それ等衣食住のことについては必らず其の環境から何物かを學ばねばならぬのである、これは成人に就ては事實であるが、弱小兒童には全く無關心のことである、彼等は兩親の世話を受け保護を蒙り、生活上の必要といふことには何等煩はさるゝことは無いのである、此の保護がなかつたならば、弱小無知なる小兒には「必要は知識の母」にあらずして寧ろ刑の執行者である、如何にして此の助けなき無能なる子供が强められ賢くなるのであるか、一面に於ては種族の成長を支配する處の內的法則によりて決定せられてある身體的發達により、一面に於ては兩親の保護によりて蔽はれてあるにも關らず偶〻此の「必要」に觸るゝことに依りてであるが、主として自然の養育者である所の遊戯によるのである、兒童をして其の發達に從ひ、有らゆる力を用ゐしめ、上は天空より下は地上に至るまで其の環境に就て出來得る限り有らゆる物を見出さしめんとする不思議な魅力を有するものは遊戯である。

動物や野蠻人の教育は、實際に於て母の養護と養育的遊戯とであるが、文明人には第三者としての教育者がある、文明人は價値としての或る眞理と活動とを選擇し、種々技巧的の方法に於て兒童を教育し、成人として生活すべき人生々活の準備を與へるのである、此の如き教育は甚だ價値あるものであるとは云へども、然しそれは技巧的である、屢〻自然の衝動に反することがある、これを有效に使用せぬことがあるのである、從つて教育者と兒童の精力が無駄に費さるゝことが甚だ多い、若し自然の教育者である「必要」と「遊戯」とが最も適當に利用せらるゝならば最も力ある教育的效果が顯はるゝのである。

一二、遊戯の種類　遊戯の種類は甚だ多く、これを種類分けをすることは甚だ困難であるが、其の內容又は發達の順序等から分けると、

1、感覺遊戯　子供の發達中最も早く現はれる遊戯で、感覺の發達につれて視覺、聽覺等の新らしき刺戟を喜び、又は把持本能に基いて物を握り、或は取らんとする手指の運動も「ゐない〳〵バア」等の好奇的の遊戯も皆感覺及運動の練習に役立つ遊戯である、

2、模倣遊戯　家庭生活其の他周圍の種々なる事物を模倣する遊戯である、人形遊び、家庭遊び、「まゝごと」其の他「何々ごつこ」と稱するものは皆此の模倣遊戯である、模倣遊戯には想像作用が其の主要なる要素を爲して居るので、或は想像遊戯ともいふ。

3、劇的遊戯　模倣遊戯が一層複雜となり、感情表情等が發達すると劇的動作となつて現はれる、母親となり、子供となり或は牛若となり辨慶となるのは模倣遊戯ではあるが、其の言語、動作表情等が劇的であり其の模倣が微細となる。

4、機會遊戯　双六、トヲンプ、ジャンケン、メンコ等の如き勝敗を目的とする遊戯である、其の勝敗は偶然の機會によりて決定せらるから、これを偶然遊戯ともいふ。

5、追掛遊び　鬼ごつこ、陣取り等の如き、身體全部を働かせる運動遊戯である。

6、構成遊戯　構成本能に基くもので、積木、組み合はせ、砂遊び其の他手工的遊戯は皆これである。

7、悟性遊戯　主として知的作用を働かせる遊戯である、謎、判じ物、繪探し、隱れんぼ等から進んでは碁、將棋等もこれに屬す。

8、用具遊戯　輪廻し、竹馬、追ひ羽根、繩飛び、お手玉、

9、器械遊戯　滑り臺、鞦韆等の如き器械設備による遊戯。

10、行進遊戯　遊戯に歌謠性が加はると行進遊戯の形式を爲すに至る。

11、球戯其他の運動遊戯　毬つき、毬投げ、水泳、スキー、スケート等の個人遊戯より、野球、庭球、排球、籠球等共同的で熟練を要する運動競技。

一三、玩具　子供の生活に缺くべからざる三つの重要なものがある、それは遊戯と、玩具と談話であるが、玩具は特に遊戯から取り放すことの出來ぬもので、子供の把持本能に基き、而かも遊戯本能を滿足せしむべき必要から生じたものである、玩具の種類は頗る多く、何れも皆子供の感覺運動を練習し、筋肉運動の作用を正確にし、知力を進め感情意志の陶冶德性の涵養等其の心身の發達を助くるものである、されば玩具は子供の發達に應じて、適當なる時期に適當なるものを選擇して與へねばならぬのである、左に各發達期に於ける適當なる玩具の一般を示す。

1、**嬰兒期の玩具**　嬰兒期は大體歩行前の時期であるから主として眺めるもの、聽くもの、握るもの等、感覺、運動練習の目的に役立つ種類のものでなければならぬ。

(一)視覺を喜ばせる玩具＝風車、各色彩の小旗、吊し風船、其の他枕元に置き又は吊して眺め得るに適當なるもの。

(二)聽覺を樂ましめるもの＝がら〳〵、でん〳〵太鼓、風鈴、笙の笛、鳩ぽつぽ等。

(三)弄ぶもの＝これは同時に目と耳とを喜ばせる種類のものが多い、護謨製、木製、セルロイド製の人形、動物、おしやぶり、毬類等。

2、**幼兒前期の玩具**　前時期同樣に感覺的の玩具も尙ほ必要であるが、此の時期から以後は主として子供の遊戯生活を助くる種類のものが必要となるのである。

(一)好奇的興味を與へ、視聽を樂ましむるもの＝首振人形類、首振動物、玉乘人形、兎の餅搗、飛んだり跳ねたり、體操人形、手足人形、米搗車等の如き運動に變化のあるのも、簡單な樂器類。

(二)運動用のもの＝護謨毬、車類、木馬、砂遊び道具類等。

3、**幼兒後期の玩具**　模倣、想像が最も盛である、好奇心が甚だ强く、知的作用の形成期であるから此の時期には玩具の種類も複雜なるものを要す。

(一)模倣玩具＝臺所道具、まゝごと遊び玩具、各種人形類、刀劍、鐵砲、ラツパ類、汽車、電車、自動車類、船、軍艦等。

(二)構成的玩具＝積木、組木、はめ繪、板並べ、折紙、切紙、はり紙、其の他手工用玩具。

(三)好奇的にして視聽を樂ましむるもの＝秘密箱、びつくり箱、魔術箱、變り屏風、重ね達磨、活動眼鏡、百色眼鏡等の類其の他簡單な樂器類。

4、**兒童期の玩具**　知覺作用が發達すると共に記憶力が最も盛な時期であり。注意作用は能動的となり思考作用も漸次進歩して來るのであるから、玩具も主として知的興味を與ふるものを必要とする。

(一)器械的の玩具＝ゼンマイ、護謨等の仕掛けによつて自動的に動く所の、自動車、汽車、電車、飛行機、ボート、軍艦、電話器、磁石玩具、水寫眞等。

(二)構成的のもの＝手工用具、豆細工、粘土細具、組立玩具等。

(三)運動用其他遊戯用のもの＝羽子、毬、空氣銃、お手玉、たこ、おはじき、單語合はせ、いろは遊び、繪合せ、數字遊び、家族合せ等の類。

兒童期の後半頃からは思考力が著しく發達し、記憶は機械的記憶より論理的記憶に移り、想像は空想的より現實的正確に近づき、意志作用は無意注意より有意注意に、衝動々作から有意的、選擇的行爲に進み、感情も利他的、社交的傾向を示すに至る、又身體的發達と共に運動力も甚だ盛になるのであるから、玩具の如きも前期よりも尙ほ一層複雜なる理科學應用のものを提供し、知的興味の發達を促ずと共に適當なる運動用玩具を與へ、運動を奬め心身の鍛錬を圖らなければならぬ。此の時期に適當なる玩具としては

(一)科學的のもの＝簡單な電力を用ふる玩具類、油、アルコール等による蒸氣動力の玩具、幻燈器械、活動寫眞器、寫眞器、磁石玩具類、飛行機、其の他ゼンマイ仕掛けの自動玩具類、蟲眼鏡、顯微鏡、雙眼鏡等。

玩具使用上の注意

(二)手工的組立玩具、其の他運動用玩具、

一四、玩具使用上の注意　玩具の使用は教育的及衛生的の二方面より見て適當なるものを選擇しなければならぬ。

(一)子供の發達に應じ其の嗜好に適したるものを擇ぶこと。
(二)衛生上無害にして、取扱上危險なきものを擇ぶこと。
(三)成るべく構造堅牢にして、而かも分解構成の自由なるものを擇ぶこと。
(四)子供の工夫、獨創の力を養ひ得るもの。
(五)形狀色彩、意匠等高雅にして嶄新なるもの。
(六)濫りに與へぬこと、同一物でも十分それを利用せしむること。
(七)丁寧に取扱はせ、使用後は整理せしむること。
(八)壞れ易きもの、形狀色彩等の醜惡なるものは避くること。
(九)子供を恐怖させるものは避くること。
(十)子供の投機心を起させる種類のものは避くること。

言語の起原性質及形式

第八章　發表本能

1、子供の言語發達

一、言語の起原、性質及形式　言語は發表本能に起原を有するものであるが、此の發表本能は他の種々なる本能と合成的に發現して言語の形式を有する發表手段となつたもので、本來、本能としての表示は敵を威嚇し、又は食物及危害等に關して仲間との合圖の手段であるが故に、個人的、種族的及び社會的の目的を有して發達したものである。されば廣い意味に於ける言語といふことは吾々が相互間に意志感情を通じ思想を交換するために表徵化されたる有らゆる手段をいひ、身振り、手眞似、表情、態度、其の他文字、繪畫等凡て思想や意志感情等を他に傳へて反應を促すべき手段のものは皆包含せられて居るのである、最下等の動物は觸鬚又は觸角によりて相互の意味を通じ、高等動物は發聲によりて其の主なる表示の手段として居る、而して鳥類及高等動物の多くは三乃至十二、三種の發聲による表示種類を有すると云はれて居る、ガーネルの研究によると、猿猴及或る高等動物の中には二十五乃至三十種の發音言語を有するものがあると云ふことである。言語の要素的形式は凡ての高等動物が有つて居るが、人類に於ては此の表示本能は其の社會的性質と、發聲器官の完全と及び心的狀態の複雜とからして最も高等なる發達をなして居るのである、本能的な情緒の表出又は表出的の身振りに於てさへも他の動物の何れよりも最も微妙に最も正確にそれを通ずる事が出來るのである、動物は唯だ僅かに模倣的方法によりて自然的な數種の言語を有するのみであるが、人類に於ては狹い範圍の自然的な表徵に限らず隨意なる表徵によりて人爲的な言語を形成し、思想、觀念等

の無限なる湧出を表徴化して抽象的にも具體的にもこれを理解し、これを處理する事が出來るのである。

言語に關する能力は生理的及心理的要素より成り、この二者の何れかゞ缺如すれば言語作用は不可能となる、第一に子供が言語を發するためには肺臓、氣管、喉頭、舌、齒、口蓋、口腔、鼻腔等の呼吸、發聲、及發音の運動を相互的關係を以て生ぜしむべき三つの筋肉群と、以上の各機關の活動を整理統一する中樞及末梢神經要素等の言語機關を具備してゐなければならぬ、此等の複雜なる神經生理的機械作用が存在するのみならず、亦これが凡ての部分に於て正常なる狀態にあり、且つ統一的に作用するためには或る程度の、實際言語を始むるまでには、此等を統制する力を有たねばならぬ、これを心理的の側より云へば、有意的に言語の使用せらるゝ迄には之れを發表せんとする情緒や觀念と及び言語機關の自發的、遊戯的なる十分の練習が出來てゐなければならぬ、トラシイは「初生兒は何故に言語を話すことが出來ぬか」といふ面白き質問を發して居るが、これは云ふまでもなく、初生兒には未だ話すべき觀念がなく、發表を喚起すべき情緒がないからである、若し其等の觀念情緒があるとしても言語機關の不完全と之れが統制を缺いて居るならば、無論話すことは出來ないのである、換言すれば初生兒は話すべき何物をも有たないのである、又假りに有てゐるとしてもこれを發表すべき機關の使用が出來ないのである、齒は殊に齒音を發するに必要であるが、初生兒には之れが缺けてゐる、呼吸は單に自動的であり、發聲は最初には反射的、無意識的である、喉頭、咽頭及口腔、鼻腔等の大さ、形狀及び其の各部の關係等は大人のそれとは甚しく異つて居る、言語機關を支配する三つの筋肉群の活動は始めには全く無意識的である。

二、言語發達と心的要素　**1. 言語の準備的發達**　子供の言語は、其の言葉の意味を意識して交通の目的に發音するときに始まるのではなくて、其の生活の最初の日に溯りて長い準備的練習の期間を有するのである、而して其等の準備は表出と印象との兩方面に亙りて爲されてあるのである、嬰兒の表出は運動によりても爲さるゝが、泣叫及喃語の發音的形式は最も重要なる言語の準備練習である、これは獨り種々なる音聲の明瞭なる發音練習となるのみならず、發音形式と或る感情狀態との間の聯合を造り上げるのである、發聲器官の練習衝動は嬰兒には甚だ強いもので聽覺的の反應を要せずに行はるゝのである、これは聾啞の兒童などが矢張り普通兒と同樣喃語を練習するのを見ても明かである。

言語發達を準備する所の運動反應には二種類ある、其の一つは模倣反應である、子供の模倣衝動は第二年の半ば頃に至ると最も强盛に發達し絶えず其の周圍の人々から聽く所の語句、言語を反應する、勿論それは始めには全く無意味のものではあるが、かくして發音、音の結合、律動等將來の言語發達の原料を豐富ならしむるものである、他の一つは言語印象に對する反應で、模倣によるのではなく知的作用によるものである、例へば物の名前を聞いて其の物の方へ振り向くなどはそれである、されば子供は三つの徑路を經て言語に達するのである、卽ち第一は無意味なる喃語の能動的表出、第二は無意識的模倣、第三は言はれたることを理解することである、

此等の三つの作用は本來各獨立的のものであるが、それ等が協同して働くときに實際の言語が始まるのである、子供はママ……ワンワン等の喃語を喋るが、勿論それが何を意味するか、又は如何なる感情狀態に於て發せらるゝのであるかは外部からこれを知ることは出來ないのであるが、それが偶然に又は便宜上或る意味を有するものと主觀的に結合するときに言語となるのである、又子供は家族の人々の名前等を機

械的に模倣して反復してゐる間にそれが、其の名前の人と一致する機會を生じ或は子供自身が物の名稱等を叫ばざるも、周圍の人々が始終其の名稱を發音するのを聞く度毎に其の物に注意を向けることによりてそれを理解するに至るものである、かくして始めて眞の意味の言語に達するのである。

かゝる言語發達の初期は一般に一ケ年の終り頃であるが、併し個人によりては其の發達の差異は甚だ著しい、早い子供になると九ケ月位にして數種の言語を意識的に使用し得るものがある、觀察の結果によれば男兒よりも言語の發達は稍〻早い、又家族に於ては長男長女などよりは弟妹の方は早く言語を覺える、無論これは年長の兄弟姉妹を有する子供の方は言語習得の機會が多いからである、子供の言語能力は一度それが始まりてから日一日と同じ速度で進歩するものではない。恐らくは言語の進歩に於ける程、律動的な發育の一般法則が明瞭に現はるものがないであらう、時としては親が心配する程其の進歩が遲滯したかと思へば、突然に急速なる進歩が起つて來ることもあるのである。此の遲滯の時期は言語を始めた直後に現はるゝことが屢〻ある。

2、言語發達の初期に於ける心的活動　子供の最初の言語は外見上名詞と間投詞とから成り立つてゐるが、實際は品詞と稱すべき性質のものではない、又事物についての表出は或は狹く或は廣い意味に用ひらるゝが、子供にはかゝる概念の變化はないのである、子供の最初の言語は決して文法や論理の形式を有するものではない、吾々の目から見た言語の要素として必要なる所の種々なる品詞や觀念は原始的な未成の形式から極めて徐々として分化せらるゝのである、子供の最初の言語は眞の意味に於ける詞ではなくて、全文章である、從つて一つの同じ詞は幾重にも違つた意味に用ひらるゝのである、子供の「乳」といふ詞はこれを直ちに大人が意味する乳といふ詞に翻譯することは誤りである、それは「乳が飲みたい」とか「乳がある」とかが一つの文章としての意味に用ひられてあるが、子供にはかゝる意味に相當する詞の變化によりて自分の心的感情の變化を表出することが出來ないのであるから、一つの單なる發言形式にそれ等を包含せしむるのである、而して身振、音調等の助によりて多くの意味の變化を表はすのである。

3、言語と模倣　上述の如く子供の言語發達は絶えず子供を刺戟する所の周圍の人々の言語の影響と子供自身の內部の要求及傾向との輻合の結果である、即ち模倣と自發的努力の結合によるのである、而して此の模倣は聽覺と發音器官の運動との結合によるもので、言語發達の最も重要なる要素を爲すものである、聾兒が啞となるのは此の重要なる聽覺刺戟を缺如せるが故に自然的な言語模倣が不可能であるからである。

子供の言語模倣の過程は機械的に一語一句文法的の形式を以てするのではない、時としては全く無意識に、或時は大なる意志の努力を以て一語を幾回となく反復するものである、早き幼兒期に於ける模倣は直接模倣であり、言語を聞くや否やそれを反復するのであるが年齡が進むに從ひ間接模倣が主なる働きを爲し、絶えざる言語の音刺戟に對しても直接言語反應を現すことなく、それが十分大なる言語印象の蓄積を爲したときに模倣反應ではあるが獨立の表出をなすのである、これが即ち言語發達の進歩の比率に周期的動搖を來たす所以である。

子供は、どんな六ケしい發音の言語とも模倣するものであるが、子供の言語發音は隨分不完全で誤りが多い、言語を模倣するには先づ第一に聞くこと、第二注意すること、第三發音すること、第四には記憶することが必要である、從つて子供の言語の不完全なる過誤も此の四つから起るのである。

イ、感覺的過誤＝子供の知覺作用は未だ十分に分化されてゐないから、發音の微細なる差異などは注意されない。

ロ、統覺的過誤＝子供の記憶作用の薄弱なることからして、聞くにしても發音するにしても詞の違つた部分に對して違つた態度を起す。

ハ、言語運動の過誤＝子供の言語器官の發聲力及言語形成力は未だ十分に發達して居らぬから、或る音の正しき發音及び音の結合が困難である。

二、再生作用の過誤＝子供の記憶能力は言語印象の豐富と一致せず、曾て聞いた詞を實際使用する場合に正しい記憶の再生が誤らるゝ。

概して子供は母音を早く覺え且つ容易く發音する、子音の中でも唇音は容易であり喉音及び齒音が最も困難である。

4、**言語に於ける自發性**　子供の自發性は言語發達に於ては模倣性と相反するものではない、模倣によりて將來言語の獨立形式に對する材料を集め自發性によりてこれを適用して行くのである、言語刺戟に對する子供の最初の態度は選擇的である、絶えず子供の耳を襲ふ所の言語の潮流の中にありて子供の模倣は始め極めて僅少のものに限られ、それが漸次範圍を擴大して行くのであるが、此の選擇も決して意志意向の指揮によるものではなくして內部の能力と要求との結果として自發的に行はるゝのである、子供の言語の語彙を見ると或る時期には名詞が多く或時期には動詞、助詞其の他の品詞が多くなつてゐるのは、外部の事情によるのではなくして子供の知力の發達に伴ふ所の自發的選擇によるのである。言語の發達には著しき個人的差異があるにも拘らず言語能力の順序には或る整然たる秩序が見出さるゝといふことは心的發達の一般法則として認むべきことである。

子供は何か自分の思想形式を發表せんとするときに、既に得たる語彙の中に適當なる詞を見出すことが出來ないときには、其の自發性に基いて自分自身の獨特な言葉遣ひや新語を作り出すことがあり、興奮して性急に言ふときなどは奇妙に簡潔な詞を使用することがあるが、時としてはマツチのことを「火をしまつてある箱」などと獨創的な意味の詞を使用することもある、かくして種々違つた形式に於て、子供の自發性は言語發達の上に現はれて大人の言語の普通の形式とは離れた徑路を取つて子供らしい言語形成に導くのである、一般に女兒は男兒よりも模倣が強く發達し、男兒は女兒よりも自發性が顯著である。

三、言語發達の階級　1、**喃語期**　此の時期は準備期、反射期又は本能期とも稱せられ、生後一ヶ年の間をいふ、言語機關の無意識的準備運動が練習され、發音形式の模倣によりて意識的ならざる片語が發せらる、此の時期の終り頃になると、子供に對して要求せらたることが始めて理解せらるゝに至る、人類が他の動物と共通に有する所の本能的言語は情緒的發聲表出である、此の自然的表徵言語は個人によりて習得せられものではないが、本能的に了解せられ、凡ての種族に使用せらるものである、子供の最初の發聲は不快に對する泣叫びであるが、此の泣叫びには違つた種類のものを表出すべき變化は殆どないのである、然し間もなく此の身體的不快の泣叫びから忿怒の號泣、失望の哀泣等に分化する、次いで愉快、滿足を示す所の他の違つた發聲的表出が爲され、同時に又情緒の違つた形式の分化に伴ふて發聲的表出の分化も起つて來るのである、かくして、此の準備期は次の三階級を經て進んで行くのである。

イ、反射期、これは最も短き期間にして、全く無意味な、區別のない叫びや身振りが、何等發表的の手段としてではなく、自發的になさるゝのである、嬰兒の發聲中で最初に區別し得べき「ア」といふ叫びは生後三週間から五週間の間に起る。

ロ、叫び、身振りの時期、生後三ケ月頃になると始めて嬰兒の眞正の微笑が現はるゝ、これと同時に嬰兒は其の周圍を知覺し人々の顏を知るに至る、此の時期から情緒觀念等の發表の原始的手段としての叫び、身振り、顏面の表出等が始まるのである。

ハ、片言交りの時期、嬰兒が其の周圍の世界に對して一定の目的ある反應が始まり、其の反應が發聲によりて行はるゝときには片言交りの言葉が起りて來るのである、而して嬰兒の發聲的反應が母の聲の音刺戟に對して行はるゝときに始めて眞正の意味に於ける言語の第一階級が起るのである、夫故に本當の言語の豫備として最初に重要なるものは言語機關の練習期である、通常此の時期をば言語的遊戯若くは擬聲語の時期といふのである。

ミス・シンは自分の姪が最初の三つの言語を實際の言葉として表示するまでには其の間二・三ケ月の發達過程があつたことを示して居る、其の嬰兒の第一の言語は物を指示する自然の叫びで「ダーダーダー…」であり、第二のものは自然的の否定を意味するもので「ナーナーナー…」である、第三は嬰兒が其の要求と倚賴とを自然に云ひ表はす詞で「マーマーマー」とか「マンマ」といふ簡單なる發音である、而して嬰兒の要求を滿足せしむるものは常に母であるから、此の母と「マンマ」といふ詞は遂に聯合して英語では母といふことを幼兒がママといふに至つたのであると、かく言語前の時期に於ける片言交りの喃語は遂に特殊なる使用に轉じて子供の言語の第一階級を爲すのである、此等の第一階級に於ても最初の言語は意思の疎通の手段としてより寧ろ子供の心の救助を求むべき叫びである、第四は過誤、不在又は見えなくなつたこと等を意味するもの、第五は嫌厭を云ひ表はすのである、此の五種の言葉は先づ嬰兒の最初一ケ年間の全語彙をなすものである、これが凡ての子供に共通なる言語發達の第一階段の型式である。

2、單語練習期　滿一年から一年半までの間で、子供は一つの詞で特殊の意味を有する數種の發音が自由になり、單語其の儘が一つの文語を爲すのである、併し言語要素は無論文法を除外し、概念を使用しない、又情意に觸るゝ所のものと客觀との間の分化はない、發音は尙ほ喃語に近い、此の時期は又發音語の理解期であり、又自發的種類の言語模倣の時期である。此の時期は全く機械的に模倣的單語の發音を始める、而して迅速に言葉を意識的に覺えて行く經路を取るので、言語構成の基礎たる時期である、然るに暫くして匍匐歩行の時期に至ると嬰兒の注意及び努力が此の方面に取らるゝがため、言語の進歩が一時遲れることがある、併し此の遲滯の時期に既は知得したる言語を完全にするのである。

3、單單習得期　一年半から二年までの間である、言語の對象となる事物は皆名稱を有することを意識し、言語を支配すべき意志を自覺する語彙は急激に增加し、事物の名稱についての質問が起る、單語文の時期を越えて二つ又は二つ以上の語が連結せらるゝ、語彙の內容は始め名詞が最も多く、次いで動詞が增加し、終りに形容詞及び關係的の詞が使用さるゝに至る、物質、動作、關係及差別等が漸く理解せらるゝ時期である。

4、文語期　二年から二年半までの間をいふ、文語構式の時期である、單簡ではあるが感歎的、說明的及質問的のまとまつた文語が云はるゝやうになる、質問は前期同樣物の名稱に關係するものが多い。

子供が言葉の意味や價値を意識し、一つのまとまつた言語で自分の觀念、感情等を通じ又は發表して有目的に使用することが出來た時に始めて本當の言葉が云へるやうになつたのである、此の時期を成文構成期又は發表期ともいふ。

單語から一つの纒つた意味の文語に移る前にも時としては單簡なる文語の意味を有する言葉は用ひらるのであるが、單語として用ひられた言葉を結合せしむることは中々困難である、併し子供には新らしい言葉を覺えるよりも既に熟知したる單語を結合せんとする傾向があるのである、又子供が使用する單語でも、既に述べたる如く其の中には成文的の意味が含まれて居ることが往々にある、「ママ」といふ單語は其の時の發音の調子によりて或は「ママが來た」「それはママである」「ママが居ない」といふやうな色々の意味になるのである、文語構成には三つの過程がある。

イ、 成文として足らない所は音の調子又は身振りによりて代用せらる。

ロ、 發表せらるべき詞を各要素に分解すること。

ハ、 詞の各要素間の關係、及其の關係に於て現はすべく單語を選擇し排列し得るだけの心的能力の發達すること。

5、**語彙擴張期**　二年半以後をいふ、此の時期には純粹の接續詞のない文語構成の時期を經過して、複文的に思想を種々なる順序に發表することが出來るやうになる、子供の質問は時間に關するもの、殊に因果關係に關するのが多い。

上述の如き過程と發達階段とを經て言語習得の時期が終り、次いで三四歳頃からは語彙擴張の時期となり談話を好むやうになるのである。

幼兒の單語習得數

年齢	一歳	二歳	三歳	四歳
名詞	七	二一一二	四〇六	七三〇
動詞	一	八八	一四七	二六五
形容詞		三七	六	一三五
副詞	二	二一	三一	八六
代名詞		八	一四	二三
前置詞		六	九	一九
接續詞		一	一	五
感動詞		六	八	一五
合計	一〇	三七九	六二二	一、二七八

以上の言語發達の時期は大體の區別で、子供の個人的差異等もあるから、何歳までは何時期に屬するといふことを劃然と別けることは出來難いものである、然し大體に於て第一期は誕生頃までで、其の中の反射期は生後直ちに始まるといつても宜しい、身振り叫び等の時期は生後一、二週間の後に起る、所謂喃語と稱する片言交りの發音練習は第六ケ月より八ケ月頃に起る、第二期の單語練習は第一期の終り頃から始まり、嬰兒歩行の時期によりて多少異るが多くは誕生前後から十八ケ月頃までゝある、第三期は普通に二歳頃までの間で此の時期から第四期を經て三歳の始め頃には可なり能く送達したる狀態に達するのである。

此の外尚ほ子供には秘密語又は隱語の時期といふものである、クリスマンは兒童の秘密語約五百種を研

究して居るが、子供は言語を知得し始めてから如何に多くの言葉を發明するかゞ解る、此の外又特殊の隱語を使用する時期がある、秘密語の發明又は使用は八歳より十五歳までの間で殆ど一般に行はるゝのである、殊に十歳より十三歳までの間に最も著しい、而して此等の言葉は子供の時代より時代へと傳はりて行くのである、かゝる時期は教育上最も大切なるもので、子供が自然的に自國の言語を知得したる時期に次いで秘密語等を使用する時期は外國語などの習得には最も適當なる時である、これは子供の生理的、心理的兩方面に於ける言語機能の彈力性が、何か變つた新らしいものに對して內部の强き興味を以て發動するのであるから、此の期を利用して外國語を學ばしむるのは語學發達の上に最も都合のよい機會を與ふるものである、通語又は符牒語（合言葉）を發明すべき傾向は甚だ好ましからざる現象である、其の隱語は幼兒又は兒童の無邪氣なる言葉にせよ、方言、訛言等であるにせよ、或は又特殊の職業に從事する人々の中に用ひらるものにせよ、其等の隱語を使用するの結果、正しき國語の使用上に甚しき惡影響を及ぼすことゝなる、而して所謂此の合言葉又は通語の使用は發情期の始め頃は最も盛であるといふことは一般に認められてあるが、此の時期には知的及び情的生活の急激なる變化發達があるので、それが表出力、想像力等に於ては新奇なものに對する自然的の要求となつて迸出し好んで變つた詞等を用ひるやうになるのである、若し此の時期に於て兒童の用語と範圍を擴張し其の語彙を豐富ならしめ且つそれを高尙文雅ならしめて、かゝる野卑なる通語の使用を避けしむる方法を講ずることも教育的見地から忽せにすべからざることである。

言語使用上の必要條件は單に語彙が多く得られたときに完全するものではない、其の最も重要なることは、語彙の豐富と言葉の意味內容の完全なる理解である、多くの用語を使用しても言葉に誤りがあり、不完全で、全體の意味や內容が缺けてゐるやうでは未だ言語支配の目的は達せられたのではない、夫故に單に兒童既知の言語に新語を增加するよりも其の用語の意味內容を完全にし豐富にするといふことは最も大切なることである、また言語發達より云へば兒童の環境は用語の知得殊に其の內容に直接影響することが甚だ多い、デルヴアーが子供の環境と語彙との關係について調査したる結果によれば、子供の環境による經驗範圍が擴がるに從ひ、其の語彙の內でも特に名詞の數が他の品詞に比して增加する傾向を示して居る、又、數、時間、空間及色彩等の用語は四歳頃までは發達しないが、此等は環境よりは寧ろ心意發達に關係して居る、されど經驗の多いといふことは此等の抽象的言語支配の發達を助くるものであることは云ふまでもない。

子供には言葉の語句的の形式を自由に使用することは一般に困難である、二、三歳の子供には詞の順序といふものはない、詞の順序は各國の國語に於て多少異るものであるが、理論的よりは寧ろ傳習的、習慣的のものである、夫故に子供は徐々に而かも大なる努力を以て傳習的使用法を知得するに至るのである。一般に子供の文句は短くして單純である、ムーアの調査によると二歳の初めに於ける男兒の使用する語句數百種中に於て一語句中に含まれてある詞の數は平均三、〇二であり、其の歳の終りに於ては四、〇五を示して居る、ブランデンブルグによれば三歳の子供の一四八七の語句中、一語句の詞の平均數は六、六〇であつた多くの語句は其の形式に於ては說明的であるが、實際の事柄は命令的のものであつたといふことである。

言語發達と知力發達との關係

四、言語發達と知力　言語發達の遲滯は心的發達の上に何等かの障礙あるものとして考へられてあつたが、近時の研究によりて其の事實なることが確めらるゝに至つた、ミードは平均六歳以下の男女各二十五

名の正常兒と五十六名の低能男兒と、三十六名の低能女兒とを比較して其の言語の始つた年齢時期に著しき差異のあることを發見して居る、卽ち正常兒に於ては低能兒よりも早く又低能兒中にても男兒は女兒よりも劣つて居ることを見出したのである。左に其の調査の結果を例示する。

最初の言語使用年齢

心的狀態	言語を始めた平均年齢（月）	年齢の範圍（月）
正常	15.8	9—25(90%10—21)
低能	34.44	12—156(90%14—84)
正常男	16.5	
正常女	15.5	
低能男	35.76	
低能女	30.	

言語による知力考査

ホイツプルは言語の數が、單に直接的に使用せらるゝものよりは意味明瞭に使用せらるゝ方は知力の發達が高いのであるといふことを指摘して居る、心的發達の一定階段の著しき點は或る部類の品詞を比較的偏重して居ることゝ、其等の部類の詞が容易く知得せらるゝといふことも見逃すことの出來ない事實である、多數研究者の說によれば幼兒に於ては、動詞は比較的偏重せられてある、名詞を急速に知得するのは大に幼兒の環境の如何に關係して居ることである、形容詞や副詞が急に增加するのは事物の性質をよく注意すべき能力と其の他事物に對する細かき觀察力の增加を證するものである、色彩の名稱や、指示形容詞の如き言葉は全く突然に知得せらるゝことは屢々あるのである、關係代名詞及從屬的接續詞の使用は複文章體の言葉を取扱ふべき能力あることを示し、從つて人代名詞を正しく使用するときよりも心的能力は進んで居るのである。

知能と發表能力との關係

言語によりて知力を判斷するにはルイズ・エリゾン其の他によりて行はれたる種々なる考査法がある、其の內最も主なるものは、(一)言語を話し始めたる年齢、(二)同年齢の他の子供に比較して其の用語の多少(三)言葉の用ひ方の種類、(四)連絡せる物語中落したる語を補足すべき能力、(五)雜然並べたる詞を以て單文に整列する能力、(六)詞の對照を話し得る能力(小に對して大等)其の他種々あれども、廣き意味に於ける言語發表の重要なる方式は尙ほ他にあることを知らねばならぬ、卽ち知力とは離れて特殊なる言語能力の個人的差異といふものゝあることに留意せねばならぬのである、知ることゝ發表することゝは必らずしも同一でないのである、又知ること、思考すること、發表することは各違つた心的過程である、實際貧弱なる知識を有しながら頗る上手に發表し得る能力を有するものもあれば深遠なる思考力を有する人にして却つて發表の下手なものもあるのである。

II　子供の繪畫

一、子供の繪畫の根柢　繪畫は構造的及美術的本能に基く一の技術であるので、純粋なる本能的の現はれとして見るべき時期は定まつて居らぬのである、然しその發達の初期に於ては寧ろ發表本能に基く一種の言語と見るべきものである、言語發達の初めは模倣である如く、繪畫も亦模倣によりて導かるゝのである、唯だ視覺的知覺と手の運動との相關々係は、聽覺的知覺と發音運動との關係の如く早くから完全に發達しないのであるから繪畫は言語よりも遲く發達するのである。

繪畫は兒童には言語及遊戯の如く殆ど一般的な活動であるが、其等二者の如く必要缺くべからざるものではないから固執の度や完全の度には甚しく相違があるのである、然し兒童の內部に潜む本能の性質は遊戯に於けるが如く繪畫に於ても最も明瞭に表現さるゝのである、兒童の創造的印象は繪畫或は他の美術的形式によりて言語よりも一層平易に且つ解り易く發表せらるゝので、其所に自發的創造性の純眞なる表現が見出さるゝのである。

繪畫は其の普遍性、其の形式及び其れによりて起る自發的の興味等から見るときは遊戯や言語などの如く強き本能的基礎を有するものであることは前に述べたる通りである、子供には單純ながら子供相應の構想があつて、自らこれを發表せんとするの內部傾向があり、これが或る目的ある創作的の努力に導き、記憶や能動的想像作用の發表及び觀察力の增加するにつれて、强き內部の模倣能力によりて補助せられて漸次徐々として最初の粗き繪畫的作物を表はすに至るのである、それが經驗を增すと共に追々美術的の感情をも生じ、子供相應の評價をなして樂むやうになるのである、此等の本能的內部傾向の複合及能力等は子供が長ずるに從つて繪畫彫刻其他の美術製作物に對する審美的感情の發達となるのであるから、或る時期に於て此の如き嗜好が甚だ强く其の發表の機會を求めようとする場合には、これを抑へることなく善導するやう注意しなくてはならぬのである、此の美術的衝動は子供には普遍的のもので、斯の如き能力を有するものは人類以外の動物にはないのである、人類は太古より此の能力を働かせた結果それが人類文化の發達の上に少なからず影響したことは云ふまでもないことである。

二、繪畫能力の發達階級　繪畫能力及び繪畫に對する興味の發達に於ても矢張り言語の發達に於けるが如く多少明瞭なる一定時期を劃することが出來る。

1、濫畫期　子供の繪畫の最初の形式は濫畫又は「なぐり書き」と稱するものである、言語の發達には本能的の時期があるが繪畫には純粋なる本能期と認むべきものはないが、併し遊戯的、模倣的に恰も言語に於て無意味の喃語を發音して喜ぶが如く、亂雜なる線を畫いて面白ろがるものであるが、視覺的知覺と手指運動との自然的關係は聽覺的知覺と發聲運動との關係よりも不完全で、且つ其の發達も遲いのであるから此の濫畫の時期も言語の喃語期よりは甚しく遲るゝのである、一般に此の濫畫の形式は早くて滿二歲頃から四、五歲頃まで續くものであるが、三歲の始め頃までは目立つ程の興味とはならぬのである、此の濫畫の時期も詳しく分解して見ると二、三の階段を經て進むのである、其の第一の階段は粗雜な衝動的の全く目的のない「なぐり書き」の時期である、これは鉛筆などで畫いた其の結果を喜ぶよりは筆を動かす運動に興味を有するのである、此の目的なき亂書も其の結果は遂には興味と注意との對象となるのである、例へば幾度となく濫書きをしてゐる間に、子供の熟知せる或る物體や動物の形、人の顏などを想像せしむるに足る似寄りのものが現はれ、それを認識するの機會を生じ、かくして遂に子供が多くの物の形を畫くべき第二

の階段に入るべく導くのである、かく「なぐり書き」も屢〻或る目的に役立つことからして次ぎには手本を見たり或は想像的に子供の知れる事物を書き表はすべき嗜好が出て來る、されど其等の繪は其の形より見れば繪と云はんよりは寧ろ表徵的のもので、自分の觀念表象を圖に現はすのである、然し自分でそれを書き表はすことが出來ないときには年上の兄姉等に兵隊を畫いてくれ、馬を畫いてくれと頻りに要求するに至るのである、此のやうな事實は、模倣的繪畫の基礎を供給するのである、此の時期に於ける最初の模倣は子供は繪を見たから畫くといふのではなく、年長者の繪を畫く手の運動を模倣するのである、此の模倣的描寫運動によりて物體、人物等の稍〻纒りたる輪廓が表はさるゝやうになると人の顏などを畫かんとする試みが盛になり、所謂部分濫畫の形式となり、濫畫と表徵の移り行きを爲すのである。

2、輪廓期　此の時期に於ける子供の繪畫は言語發達に於ける單語の練習に類似するものである、子供は繪を畫くことによりて手指運動や模倣を喜ぶのみならず種々の出來事や觀念等を表現することを悅ぶのである。而して其の畫く所の點、線等の結合が或る事物の狀態、容姿等を暗示するときに始めて繪となるので、畫かれて後ちに何の形であるとか誰れの顏であるとかと名づけることが屢〻あるのである、又其の繪の中には、それが實際見得べきものでも、見得べからざるものであつても、子供の觀念を表現するに必要なものであるならば如何なるものでも畫き出すのである、或る子供が畫いた人物に手足がないが、軀幹と胃の腑が表はされてあつたことなどは此の例である、一般に四、五歲の子供は繪によりて事物を表現せんとするのみならず、其の觀念をも暗示せんとするものである、從つて其の繪畫は一部は表徵的であり一部は表現的である、其の觀念は何等の制限もなく頗る自由に表現せらる、又子供は事物を容易く信じ、批判力を缺いてゐるが故に其の繪畫によりて現はされたものは如何なることでも其の儘事實と認めて疑はない、其の不適當なる缺點などについては殆ど感じないのである、而かも其の繪畫によりて何事でも語ることが出來ると考へて居る、家を畫けば其の外部も內部も表はされ、目に見ることの出來ざる風でも熱でも又、時間的に繼續する出來でも表現する、かゝる時期に於ける繪畫は子供が實際知覺する所のものを畫くのではなくて、其の心の中に描かれてある想像又は記憶によりて畫くのである、豐富なる子供の想像力は遊戲活動となるか或は繪畫となりて現はるゝのである。

上述の如く子供が其の心に浮んで來る或る形を其の實物との關係に頓着なく表現しやうとするものである、斯樣な時期に畫かれた繪は繪畫といふよりは寧ろ表徵的のものである、然しかゝる能力が出て來たのは子供の心的作用及び手指運動の發達が一段進歩した時期に入つたので、繪畫に對する新らしき動機を與ふるものである、バーンスは兒童の繪畫は原始人に於て見るが如く一種の言語であると云つて居るが、六歲から八歲頃までは特に其の傾向を有つてゐる、濫畫期に於ける繪畫は漠然たる方法に於ける自己發表であるが第二の時期に於ける繪畫は思想、觀念、光景、物語等を一層明瞭なる方法に於て表出さるゝ、而して物體の描寫は尙ほ甚だ粗略であるが、美とか對照とか比例平均とかいふことには稍〻少しく注意が拂はるゝやうになるが、背景、遠近等には殆ど無頓着である、併し裝飾的の細々しいことには注意を向ける、例へば人物等を畫くときには釦、帽子、髮の毛、リボン等の裝飾的要素には氣が付くのである、此の時期は想像的及無批判的の時期で、子供は物體等について自分の知つてゐる所を畫き、見たる儘を描寫するのではなくて自發的に其の想像を表現するのである、此の點に於て、此の時期に於ける子供は眞の美術的天才

に似てゐる。

表徴又は描寫能力が外見上或は實際上退歩することがあるが、此の現象は子供の注意力が進みて觀察が緻密になつて來るに從つて現はれて來る、而して子供自身の努力して畫いた繪に對して不滿足が加はつて來ると同時に數週間又は數ヶ月間も續いて繪畫興味の減退とも見るべき狀態が起る、かゝる場合には子供は自分で畫くよりも人に畫いて貰ひたがる、此の細かいことに注意する時期に於ては繪の描寫的性質は不明瞭になる傾きがある、子供は一つの物體を畫くにしても一部分から一部分へと畫いて行き、それを畫きながら一々説明するが、其の部分と部分との關係などには少しも注意しないから、繪が出來上ると全く釣合のとれぬ妙なものになつて了ふのである、此の一時的な外見上の退歩は子供の勇氣を挫くものであるが實際は次の時期に進み行く階段である。

自覺期

3、**自覺期**　子供の自己意識が增して來るに從つて自己の畫いた繪の缺點を感じ、繪畫に對する興味を減殺すべき要素が加はつて來る、即ち知力の增加、審美的評價力の增加、觀察力の發達、其の他周圍の影響等によりて如何にも自分の繪畫の拙劣な、自然の模倣に過ぎないといふことに氣が付いて、前時期に於ける天眞なる天才的、創造的美術の面影は全く無くなるのである、斯くして遲滯期と稱する時期に導かるゝのであるが、此の時期に於ては子供の最も大なる努力を以て畫いた作物も自己の理想よりは遙かに以下の結果を持來たすに過ぎないのである、而して幾分の進歩はあるにしても、それは甚だ遲くて且つ苦痛を伴ふものである、大概の子供は十二歲から十四歲頃までに此の時期に達するのである、此の場合には教育の任に當る者は最も熟練を要する所で、子供の興味を減退せしむることなく、其の獨創力を破壞することなく、

遲滯期

再生期

又餘りに大なる自己批判を起さしむることなくして、容易く發達の時期に移り行くことが出來得るやうに適當に奬勵し指導することが肝要である、此の時期に於ける子供の繪畫は自由なる表現手段ではなくして機械的の模寫である。

4、**再生期**　子供は十五、六歲になると屢〻美術的興味の再生を見る、而して急遽に美術的才能の增進を來たすのである、これは成熟期に伴ふ多くの身體的精神的變化と關連して居るので、凡ての知力も最早や成熟の域に達せんとし居り、觀察力は緻密となり、注意力、意志作用等も强くなり、判斷力も確實となり、從つて審美的評價の才能も著しく增加する、高等なる情操は其の最大なる勢力を振ひ始め、價値ある成功とか、又は社會的賞讃に對する慾望は最も强大となる、繪畫は今や單なる興味的の活動ではなく、又一時的に必要なる表出手段たるものではなく、始めて眞の美術となるのである、而して物體の立體的、平面的及其の深さに於ても正確なる美術的表現を爲し得るの才能を有ち得るに至るのである、普通に此の時期に於て可能なる高等精神作用の發達過程中にある子供は繪畫及其の他の美術的作物に對し、彼等が幼時に於て有せる如き熱心なる嗜好と興味とを再生するのである、されど大多數のものは盡く高等なる創作的才能に達するものではないが、唯だ他人の製作物について享樂して以て自ら滿足することが出來るやうになるのである。

子供は如何なるものを畫くか

三、子供の繪畫の特質　子供は種々樣々なるものを畫くが其の著しい事實の一つは幼兒期に於ける繪畫の特質は不可能なる事でもこれを表現しやうと試みることである、即ち神樣でも、人の心でも、又は風の如きもので、これを見得べき物として畫かうとすることである、幼兒の架空的な想像力が逆りて畫となるの

子供の繪畫

であるから、一般に大膽であるのは已むを得ない、幼小なる子供の繪となるものは主として人物、動物、次ぎに植物、花、家、其の他靜物を畫き、最後に意匠や裝飾的のものを畫く、六、七歳頃の子供の繪の四分の三は人物か又は人物を中心としたものである。第二に著しき事實は、幼兒の繪畫は現在目に見るものを知覺して有りの儘に畫くのではなくして、自分の知つて居る通りに其の顯著な形狀を描き表はすのである、例へば人物などを寫生せしむると其の人が立つてゐるにしても坐つてゐるにしても其の人の特殊の狀態、容貌の特徴等を見て畫くのではなくして、一般的な人物としての表徴を畫くといふことが屢々あるのである。

一般に子供の繪畫は濫畫期に於ける種々亂雜なる線の「なぐり書き」に始まりて不規則なる圓形に進み、知覺觀察の力と手指運動の稍々正確に發達するに從ひ、顏の形、手足等を畫き、表徴的ではあるが人物の形狀が出來るのである、而して手肢を畫くに二つの線を用ふるに至るのは大抵六歳から七歳以後である、人物にしても景色等にしても各部分の釣合、統一、比例、其他背景、遠近等には全く無頓着で幾多の矛盾缺點を有することは或る時期に達するまでは凡ての子供の繪畫に共通なる著しき特色である、此等は子供の賴察力、思考能力に平行したる缺點であることは云ふまでもない。

男兒及女兒の繪畫に對する興味及美術的能力に關しては其の間多少性的相違のあることは認められてある、概して男兒は空間に於ける全體の表現に於て一般の外觀を捕捉する力に於て優り、女兒は色彩知覺に精密なることは男子に優つて居る、男兒は活動的な戰爭圖等を好み、女兒は靜的事物を好む、色彩の嗜好についてはジヤストローの調査によれば幼小の女兒は赤色を好み、男兒は青色を好む傾向が多いといふこ

繪畫と他の才能との關係

とである。

四、繪畫と他の才能との關係　繪畫と他の能力との間に何等かの相互的關係があるであらうかといふことに就ては種々研究もせられてあるがイバノフの述ぶる所によれば地理、歴史、手工及一般に記憶に屬する學科は繪畫と平行し、算術は甚しく反對の關係を有するといふのである、視覺的型式と反省的型式とは通常繪畫に對して根本的に違つた能力を有つて居るものと考へらるゝのである、多くの觀察者によりて認められたる事實によれば繪畫に巧みなる子供は一般に他の學科に於ても良好なる成績を示して居ることであるが、或る種の知能に缺陷のある子供の中にも特に繪畫に優秀なる技能を有するものゝあることは事實である。

第九章　調整本能

I　子供の德性

一、無道德的時期　子供の最初の動作は單純なる本能運動であることは既に述べたる所である、此の本能的動作の性質は祖先より遺傳されたる、神經系統の組織によつて先天的に豫定されてあるのであるから、從つて嬰兒が不快のときに泣き、飢ゑたるときに食を取り、其の本能的動作の發動が妨害されたるときに亂暴なる性質を現はす如きはこれを道德的に批判することは出來ないのである、それ等は單に自然的動作であつて、嬰兒は始め道德的でもなければ不道德的でもないのである。無道德的であるのである、孟子が人の性善なりと云つたのも、荀子が人の性惡なりと唱へたのも見樣によつては皆夫々正當なる理由があるのである、道德的觀念、及理想や、道德的義務責任等は子供の有つて生れた內部の萠芽的能力に種々なる經驗が積み重なつて生れて來るのである、子供が本能的に爲す動作の中には有益なものもあり、有害なものもあり或は社會的のものもあり、反社會的のものもある、卽ち道德的なもの、反道德的なもの等色々あるのであるが、子供には其の何れが善であるか何れが惡であるかといふことは解らないのである、然しながら經驗によつて或る種の動作は其の結果、稱讚、褒賞の快感を得、或る種の行動は叱責、懲罰の不快感を得る、斯くして或る行動は他の動作よりも「善い」ものであることを學ぶ、されど此の「善い」といふことは道德的に善であるといふよりも寧ろ最初に於ては一層「喜ばしい」といふことを意味するのである、幼小の子供は道德的意味に於ては親切でもなく、冷酷でもなく正直でもなければ不正直でもない、唯だ何れ

が自分に最も利益であり得るものを學ばんとするのである、如何なる動作の習慣を形成すべきか、又如何なるものを善とし惡と考ふるかは全く經驗と訓練とによるのである、幼少なる子供の本性は出來るだけ多くの喜びと出來るだけ苦痛を小ならしめんとして其の環境に順應するのである、殆ど十一、二歳頃までは此の個人主義的生活の法則が固執するのである、夫故に此の時期は自ら無道德の時期である。

道德的及不道德的基礎

二、道德的及不道德的基礎　此の無道德的時期はやがて來るべき道德的發達の準備的階段である、自分の行つた事柄の性質及びそれが自他の利害安寧幸福に及ぼす影響結果を自覺したるときでなければ善とも惡ともならぬのである、即ち動作の性質を自覺して善若くは惡の何れかを選擇したときに始めて善又は惡となるのである、而して其の動作の道德的性質を自覺するにはそれを爲し得るだけの內部の基礎がなければならぬ、子供の有する本能の種類は甚だ多いが、それ等は皆夫々獨自の機能を有して居るが又相互に密接なる關係を有して、恰も個人が社會に於けるが如き關係に立ちて居る、各本能は其自身の滿足のために或る動作を刺戟すること各個人が各々自己の利益を求むると同樣である。然しながら各本能は其自身の目的のみを恣にするときは個體の健全なる發達を進むることは出來なくなるので、こゝに全體を統制し調整する活動が必要になつて來る、此の調整的活動が本來の傾向として吾々に備はつてゐるからして吾々人間には道德生活といふ特有なる現象が起つて來るのである、社會生活に於て各個人は或る行動を爲し、其の結果として他人に不快を與へたときには、其の爲すべからざるを知るのであり、又斯る經驗からして社會を支配する法則が生ずるのであるが、これは個人の調整活動の發達が然らしむるのでむる、即ち道德性を得べき能力は先天的であるが、道德的法則、理想等が個人によつて實踐せらるのは經驗訓練、及習慣意志等の結果である、換言すれば子供は道德的性質を得べき內部傾向を有つて生れて來て世の因襲や、習慣や、道德的空氣の中に育つのである、實際の意味に於ける道德は其の起原と性質とに於て本來社會的である、個人の道德も、社會的道德も皆社會的本能の進化より來るもので、世俗的道德の大部分は社會的慣習より生れたものである、從つて道德的、理想、標準、習慣等は年齡時代、文化の狀態及び家族制度の如き特別なる人類制度の進化と共に發展するといふことは何人も認むる所である、幼少なる時期に於ける行動の性質は多くは純粹なる個人關係のもので、初めは其の他人に及ぼす影響、或は其の影響によりて行動を愼むべき責任等を自覺して居らぬのである、これは此の時期に於ては個人的本能のみが優勢で此れを統制するだけの力がまだ發達しないからである、此の本能が抑制されずに繼續して居る間は、道德の眞の本質は缺けて居るのである、行動は主として他人に對する影響から道德的性質を得るもので、最も高尙なる道德は自己及び自己の屬する團體のために自己の本能的利益を犧牲にする行動でなければならぬ、此の如き行動は個人的本能を凌いで社會的本能が優勢になるだけ發達して來なければなし得ないのである、個人的道德は社會的態度を離れて存するものではない、道德の可能性は愛情、同情等の如き愛他的、社會的性質を有する本能に基き、社會的稱讚を得るが如き或る行動に對する內部の傾向に存するのである、此の如き傾向が漸次理性と反省力との發達に伴ひ反社會的の性質と調整せられて、人類社會の依存共榮的生活が完うせらるゝのである、夫故に道德的發達及訓練の根本原理は自然的、本能的動作の上に基かねばならぬのである、吾々人類の現存の目的としては個人的、社會的、性的本能が最も重要なるものであるが、此等の關係に就いて詳細に茲に說明することは略して、吾々は單に個人的發達の上に於ける道德進化の徑路を辿ることを

品性の基礎

以て滿足せねばならぬ。

三、品性の內的要素と外的要素　子供の身體的、精神的及氣質的の準備が遺傳されてある限りは品性の基礎も既に子供が生るゝ前に豫定されてあるものと云ひ得る、此の遺傳的要素の性質及程度に就ては遺傳の章に於て述べてあるが、個人的及社會的要素は少くとも子供が生るゝや否や正しき動作又は正しからざる動作の習慣が作り始めらるときから基礎づけらるゝのである、子供自身の好まない本能的反應は不快の情によりて抑制され禁止され、望ましき反應は滿足の情によりて勵まされて反復され遂に習慣となるのである、かくして行動は子供の生活の極めて早き時期から外部の刺戟の影響と子供自身の內部の要素によつて善良なる習慣又は不良なる習慣が作らるゝのである、子供が其の行動について或る事は快と滿足とを與へ、或る事は不快と苦痛とを生ずるといふ概念を得るまでには既に習慣性の基礎が可なり進んだ程度に築かれてあるのである、されば子供が自己の怠惰、惡弊等の行動又は不健康等に就て實際の責任を有つ前に既に其の品性の基礎が破壞されてあるのである、幼兒期の習慣は品性を決定し、其の品性は又成熟期に於て得べき習慣を決定するのである、食事、睡眠、遊戯、其他兩親や他人に對して好感を與ふるが如き良習慣は幼時期に於て決定せられ、それが實際の道德的責任觀念等の發達すべき時期になると克己、節制等の自己指導となるべき道德的進化の大切なる條件となるのである。

近來ユング・フロイト一派の精神分析的研究は幼兒及少年の感情生活と道德との關係とについて最も力ある重要なる說を立てゝ居る、ユングは發達する子供の品性に鑄型的影響を與ふるものは、善良にして敬虔なる誨告でもなければ又教育的眞理を說く訓諭でもない、知らず識らずの間に幼少なる子供の心に刻みつける父母の人格的印象であり、其の接觸する環境よりの刺戟である、殊に最も多く影響するものは子供の感情生活に於て秘密にされて居る出來事である、例へば父母兄弟等に隱してゐる鬪爭等より起る、憤怒怨恨、悲哀、憎惡等の抑壓し、隱忍したる感情狀態は徐々に、然しながら確實に無意識の間に子供の心の中に作用して深く其の印象を彫み付けるのである、子供の感情的性質が强ければ强い程愈其の印象が深く刻まるゝのである、家庭に於ける兩親殊に母の一擧一動は盡く子供の心に反射して、それが後來現はれて來る子供の道德的性質の根本基礎を爲すものであると云つて居る、此の說は近時各種方面の調査によりて其の事實なることが確められてあるのである。

道德的發達の階段

嬰兒期

早き幼時期生活に於ける多くの本能的情緒的、習慣的動作は其の本質に於ては無道德であるが、それがやがて後年に於ける道德的及不道德的傾向の基礎となるものであるから、これを指導するには別に述べた る所の子供の本性たる本能、情緒等を十分に理解し、其の習慣との關係等を明確に知ることは必要である、又幼時に於ける正常なる身體、精神及情緒的發達を進むることは矢張り事實に於て道德的進化を進むることゝなるのであるが、常に子供の衞生健康に留意し、規則正しき生活を爲さしむることは必要である。

四、道德的發達の階段　道德的內省及それによりて起る道德的責任感等は年齡及び知力の發達と共に正常に增加するものであるから、各異つた時期に於ける種々なる程度の德性を豫想することが出來るのである、子供の知力と生理的成熟の時期とは曆年よりも重大なる關係を有つて居ることは他の章に於て述べてあるが其の各時期によりて又道德的性質及發達の特徵を知ることが出來るのである。

1、嬰兒期　此の時期に於ける行動は自發的のものにせよ又他動的のものにせよ全く本能的であり、行動

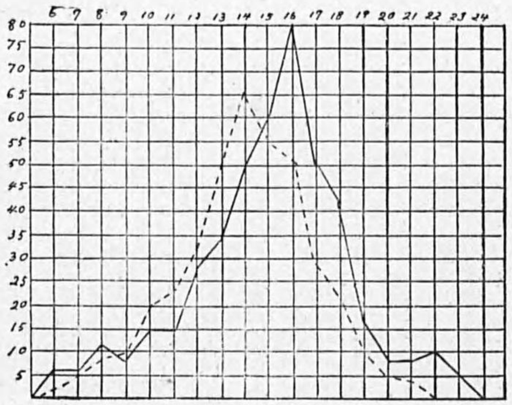
の善し悪しは殆ど自分に對する行動の結果によつて決定せられ、良心とか義務の感とかいふものは全然缺けてある、無道德の時期である。

幼兒期　2、**幼兒期**　道德的準備期とも云ふべき時である、此の時期中に習慣が形成せられ、模倣、暗示に支配せられ、經驗的必要から禁止力も發達する、眞の道德的基礎がこゝに置かるゝのである、此の時期に於ては行動の標準は子供自身の立場から殆ど全く外部的で、而かも我儘で獨斷的である、善惡の決定は道德原理によるにあらずして何が許され何が禁止せらるゝかによりて定まる。

兒童期　3、**兒童期**　道德的辨別力が漸次增大する、或る方面の行動に就ては多少責任の感を有し、自ら正しいと感ずることを爲し惡と認むることを避くるに至る、併しそれは唯だ左樣に感ずるが故に爲すだけであつて或方面のことに就ては未だ全く無道德的である、良心の作用は時には明確に働くが時には全く働かぬこともある、日常悉知する方面の事柄に於ての道德的概念は迅速に築き上げらるゝが、未成熟のため又は經驗的知識を有せざる範圍に就ては善惡の概念は殆ど缺けて居る、此の時期に於て最も注意すべきは兒童は父母年長者より過大なる言語上の抽象的道德を知得することである、道德の要は實踐窮行にあるのであるから、此の時期に於ける子供の品性をば實行によりて作り上げることが必要である。

青年期　4、**青年期**　此の時期に入りて眞の道德が生れて來るのである、青年期は人生の危期と云はれ、本能、衝動、欲望、野心等と青年の理想、成年社會の道德的倫理的要求との間に調整を缺くことは或る程度までは避け難いのである、身體的、生理的成熟に近づくに從ひ、新しき願望、新しき興味、本能及道德的責任の新しき感情等が現はれて來る、良心と本能との間の衝突は激烈にして可なり永續する、幼兒期に於て正しき習慣が養はれて居り、身體的精神的の發達が正常であり、且つ環境が適當であるならば此の兩者の鬪爭は固定せられたる道德的調整に終るのであるが、若し此等の條件が缺けてあるならば此の如き調整は一層困難となる青年期の終りになると此の相衝突する所の衝動の調和が出來、道德的責任の十分なる發達と、强固なる信念が生ずる、品性の基礎としての最後の重石は青年より成熟に移るべき危期に於て置かるゝのである、而してそれには尠からず善良なる訓練を要するのである。

遷善と年齢との關係　（ベル氏）



道德的發達の過渡期

五、道德的發達の過渡期　大凡十二歳頃までは道德的發達の條件は全く環境と訓練との結果である、其の適否によりて子供は天使ともなり不良兒にもなる、子供は本來惡でもなければ善でもない、其の行動は兩者の何れにか屬するにしても其の精神は善でも惡でもないのである、子供の行動の多くは、衝動習慣或は自己の快樂利益に對する選擇の結果である、若し子供が善く訓練されてあるならば、丁寧親切なる行動に自己の快樂を見出し、之に反して訓練のない子供は粗野殘酷なる行動を喜ぶ、併し何れにしても其の行動は根本に於て自分自身のためである、決して他人のために善又は惡をなすのではない。

然るに青春期に達すると共に新らしい本能即種族的本能が浮び出でゝ來る、此の本能の性質は自己よりは寧ろ他人に對する行動を強いるのである、「汝自身のために働け」といふ內部の法則は今や始めて「他人のために働け」といふ法則に對抗せらるゝのである、行動の選擇は最早や自己の利益と共れを得るの方法との間にあらずして、自己と他人とに對する行動の間にあるのである、親切と私利的行動とは今や始めて道德的となり自己と他人とに對する行動の選擇は自由意志によりて行はるゝに至る、斯くして青年は最早單なる個人にあらずして世界の力の一つである、而して單に生活するといふことばかりでなく、更に人として爲すべき義務を感じ、從來無かつた所の自己の責任を感ずる、自己自身のために自己の爲し得る凡てを得やうとする古い衝動は、自己及世界のために自分の爲し得る凡てを爲さんとする新らしい衝動を以て置き換へらるゝ、所謂理想的模倣の時期である、藝術的作品、英雄的生活、宗教的儀式等は新たなる意義を取るに至る、向上心及理想は最早や直接の環境を離れて最も美はしき最も尊き最も高き境遇が、歷史的、文學的及美術的の大なる世界から選擇せらるゝ、此の擴げられたる生活の最初の階段に於ては其の最も魅力ある理想は甚だ空漠なることがある、此の時期は個人の行動を支配すべき人格的の權威が抽象的の法則に遷り行く過渡期である、道德の原理は全く新らしき意味を取り、各種の法則は個人的利益の立場からばかりでなく、新らしく展開された世界の大なる生活の一部として見ゆるに至る。

過渡期に於ける道德的訓練

此の時期に於ける道德的訓練として最も大切なることは第一に自己指導である、所謂自己修養によりて品性の向上を圖りて行かねばならぬのである、これまでの時期に於ては殊に幼少時に於ては子供の行動を支配すべき人格的權威は最も價値あるものであつたが、今やそれは模範、忠告、暗示等の形式を取らねばならぬ、此の時期に於ける青年は最も熱心なる英雄崇拜者であり、自己の理想とする人物に私淑してそれを模倣するのである。青年の行動を規定する命令又は規則は一般的原理を基礎とし、項目を多くし又は餘り微細に亙りてはならぬ、青年をして自己の經驗によりて自然及人生の眞理を知らしめねばならぬ、此の時期に於ては人格的權威が其の力を失ひ、法則に對する態度に變化を來たし、生活行動の原理の選擇せらるゝ時であるから、法則に對する尊重心及それに從順なるべき義務の感を生ぜしむべき最も有效なるものは、それを實行せしむべき經驗に若くものはないのである。

第二は理想である、此の時期の始めに於ては理想は人格的である、其の理想の根源は多くは讀物で特に男子に於てそれが多い、併し又自己の環境中から理想とする人物を見出すことがある、通常それは自分より年長の男子であるが、時としては女子であることもある、如何なる點を理想とするかといふと一部は其の人物の力や、熟練や、美貌や、知識等であり、一部は道德的の理想である、女子も殆と同樣に此の如き理想を年長婦人に見出し、其の憧憬的の感情は後來愛人に對して起ると同樣なるものも屢々ある、道德的理

想の選擇に關する訓練は歴史及物語等によつて聖賢偉人の例を提供するにある、道德的一般原理を說明し論議することも青年をして行動に對する明確なる標準を與ふるに價値あることであるが、理想選擇の自由を妨げざるやう注意を要する、而して其の理想は之れを實行に導くべき機會と刺戟とを有たねばならぬ、或程度までは自己犧牲の行動を實行せしめて行爲に於ても思想に於ても愛他方面の發達を促さねばならぬ。

第三には交友であるが、殊にチームは青年男女各自によりて選擇せらるゝことが多いが、此等交友との交際は大人との交際よりも青年に取りてはより大なる道德的影響を與ふるものであるから其の選擇は甚だ大切である。

六、子供の自我　子供の自我について從來の心理學が取つて來た所の方法は幼時に於ける自己意識の發達を探求し「我れ」「私」などいふ自己に關する言葉の正しき使用を以て自己意識の最初の現はれとしたのである、然しこれには多くの點に於て誤謬がある、「我れ」「私」等の言葉の使用は言語發達と周圍の影響とに關係するものであり、又早き幼時に於ける自己意識は自我の知識ではなく、願望に滿たされたる情緒的の自己經驗である、最も直接なる自我の意識は自己確認である、子供は生きた全一體として、其有らゆる力の中心として自己を實現する、單に苦痛を避け、快樂を得ようとして振舞ふのではなく、苦痛を除くべき努力に於て又快を得ようとする願望に於て自己の經驗、自己の重要を確認せんとするものである、幼少なる子供は絕對的に利己的であり、自己自身の外何物をも認めない、從つて自己保存及自己發達に役立つ所の衝動のみが優勢に起つて來るのである、兎に角、始めには個人の自我に關する願望は自我以外の事物に關する願望よりも種類も多く强度も强いといふことは認めねばならぬ、固より自己を中心とする子供の生活圈內に於ては自己を外界に擴充することは極めて徐々であるといふことは自然でなければならぬ、先づ子供は其の環境との生活關係に入る前に確實なる榮養の途を得なければならぬのである、夫故に最初に於ては就中利己的性質の願望と衝動とが發達するのである、此の自己確認が妨げられずに實現せらるゝ限りはそれが自己享樂として意識に反省せらるゝのである、原始的な自己確認の自我が見出さる所の世界は始めは客觀的世界である、驚きと喜びと、凡て子供の發達を促し或はこれを抑止防遏するが如き有らゆる影響、事物、出來事等の混沌たる世界である、次ぎに個人的の認識を要求する意志中心としての自己の自我と他人の自我との接觸卽ち人と人との世界である、かくして子供は自己確認を自己固執の中に擴大し、或は他我の伴侶の中に自我を融和すべき二つの可能性に直面してくるのである、此處に外界世界に對する敵對的性質を有する消極的及最初の努力が起る、見知らぬ人と、奇異な事物の世界は直接子供に對して自己享樂の感情を亂し、個人的劣弱の感を與へる、外部の各方面からして子供は自己の願望の制限、障碍、命令、禁止、强制に出會する、同時に內部から身體的の微弱、理解力の缺乏を感ずる、此等の劣弱の感の最も直接なる結果は恐怖の感である、特に幼兒の特質たる神經質的の恐怖である、次に自己意識は兄弟姉妹の圈內に於ける、子供の地位から起る、此處に相互の競爭からして種々なる方法に於て自我の十分なる發達を脅かす、從來唯だ一人であつた子供は兄弟姉妹の中に再び絕えず自己の力と能力との微弱を感ずるのである、凡ての有機體と同樣に子供も矢張り防禦的動作を反應し、自己固執を實行する、敵對する力に對して全く受動的に服從することは、全一體としての個體を保存するためには發動的に努力する所の人格觀念に矛盾するの

である、斯くして子供は微弱ながらも其の意志抵抗の力を表はさんとするのである、然し意志の努力は常に必ずしも障碍要素に打勝ち得るが如き平坦なる行路のみを取るものではない、從つて自我は又毀損を感ずる、かくして强情、我儘等の反抗的自我感情が發達するのである。

七、子供の我儘　子供の自己固執の最初の形式は我儘である、此の固執性は子供の生活の一年内に現はるゝことがあるが、二年頃から急速に發達し、健康で意志の强い子供には著しく現はれる、ハツチングベルグは子供の我儘を其の根本動機に從つて三つの種類に分けて居る。

1、能動的我儘　これは普通に强情と稱するものである、子供は自分の心に決めた事物に對しては如何なる事情の下に於ても、又それを實行することは不可能であることが明かであるときまでも無理にそれを爲さうとするのである、例へば子供が林檎の樹から林檎を取らうとしたときに假令其の樹に攀ぢ登ることが出來ないにきまつて居つても、一旦それを取ることが出來るといつた以上は單に自己の過ちを告白することを避けんが爲めに何處までも自己の我儘を固執するのである。

2、反動的我儘　これは他人の意志に反對するのである、子供は禁止された事を爲さうとし、命令された事を怠るといふことは種々なる動機から來るのであるが、强情な子供はただ命ぜられたといふこと禁止されたといふことだけが動機となつて、自分に對する他の優越なる力の感が反抗心を起すのである、其の直接原因は極めて些細なことであるが、自分が相手の命令を拒否することによつて自分の力を相手に感ぜしめようとするのである。

3、受動的我儘　此の第三の形式は殆ど純粹なる消極的態度である、子供は何事も爲さうとせず全く沈默して少しも動かないのである、此の場合子供の意志は何も爲さぬといふことに向けられてある、ハツテングベルグの考によればこれは單なる執拗ではなくて病的意志である、精神分析によつてのみ說明せらるべき深き障礙を藏するものである。

子供の强情、片意地、不從順等は子供の自制心及社會的自己統制の進化的發達の上から解釋すべきもので多くはそれが禁止すべき事柄であるか否かを理解せざることから、或は又如何にそれを禁止すべきかを知らないことから、其の禁止すべき事をもこれを實行しようとする强き本能的の欲望に起原を有するものである、時としては榮養不良、眠の疲勞、其の他衰弱等の如き身體的條件から起ることもある、其の極端なるものは精神薄弱兒に見る所のもので、從順及自制の發達には知力が最も重要なる要素を爲して居ることが明かに解る、又時としては年長者などの勝手な不公正なる取扱に對して起ることもある、一般に强情は心身的に薄弱なることに基因するもので、普通に考へられてある如く、意志が强いからではないのである、遺傳的の要素も、直接間接環境的の要素と結合して其の原因をなすことは云ふまでもない、幼少兒は本來利己的で情緒が盛であり、衝動、本能的欲望が强いから時として他人を困らすやうな强情を起すことも健康なる子供には普通と見なければならぬ、眞の意味に於て强者及び規則に對して從順なるべき能力は意志の訓練の結果である、即ち自制力は意志の鍛錬によりて養はるゝものである、意志の弱いものは從順ではあるが、自制力を養ふことは困難である、臆病な弱いものは極端に從順であるが、眞の自己の意志から出て來る極端な從順は極端なる勇氣と强固な意志から出て來る、克己及自己統制の力を養ひ得た子供は社會の道德的理想に調和することは困難でないが、此等の德を缺けるものは危急の時には失敗するのであ

る。要するに自己統制も自己主張があつて始めて出て來ることであり、自己の力、自己の能力を認識することも他人の意志に對抗する自我がなければ實現されないのである、公正の感、法規の必要及其の理由等の意識は自己の不十分なることを體驗することから生ずる、法規の遵守は、社會生活に於ける相互依存及其の連帶責任を自覺する結果である、されど凡て此等は本能の調整に於て長き時と大なる訓練とを要するのである。

自或としての名譽心

八、自我としての名譽心　幼時に於て現はるゝ所の自己意識の上品な形式は名譽の感である、此の感は九ケ月の嬰兒に於ても其の形跡を表はすものである、一歳頃になると明かに屈辱の感が現はれて來る、叱られて泣き、輕く頰を叩いても泣くのは決して苦痛のためでないのである、二、三歳頃になると仲間から除け者にされたり、何か笑はれたりすると屈辱を感じて怒り出すことがある、此の屈辱の感は年と共に增加するが、これは子供が自分の弱さ、無能力等を明かに意識する所の力の發達と密接に關係する、而して此の劣弱の感はそれを補ふべき努力を促し、其の努力によりて或る事がなされたとき自ら誇りを感じ他人をして思つたよりも大なる力を有することを信せしめようとする願望が起る、これが認められたときに幼少なる心に少なからず喜悅を感ずるのである、かゝる子供の心を捉へてこれを奬勵し其の行動を指導するならば最も有效なる手段となるのである。

所有欲

九、所有欲　子供が其の適宜の方法で色々の物を獲、之れを集めて自分で滿足し喜んで居るのは誰から敎へられたものでもなく、一種の本能である、何んでも自分の物として所有せんとする欲望は甚だ早くから現はれ、且つ甚だ強いものであるが、併し他人の所有權に對する尊敬は可なり遲く發達する、此の他人の所有物といふことに就ては能く敎へて置かねばならぬのである、子供が自分の好む物を欲しがる欲情は非常に強いので、このためには躊躇なしに僞りを云ひ、騙取し、盜みをするのである、所有權などいふ觀念は少しもない、私慾が子供の全欲情を支配して居るのである、併しこれも子供には自然であるといはなければならぬのである、社會で定めてある如き所有の權利などいふ複雜なる概念が得らるゝのは、自他兩者の權利についての經驗が徐々に起つて來てからである、他人の所有の權利を尊重するのは、それが自分に取つて價値あるものであることを十分に評價し得るやうになつたからである、これが自分の物であるといふことを明確に云ひ得る力のない子供は他人の權利などを評價し得る力は勿論有り得ないのである、他人の物を取る惡癖を矯正するには此の所有といふことの意義を明確に理解せしむるやう發達せしめねばならぬ。

好奇的破壞

一〇、好奇的破壞　次に子供が誤つたことをするのは屢〻好奇心から起る、其の多くは破壞的のことである、これも一つの先天的傾向で避くべからざるものであるから、抑制するよりは寧ろ他の適當の方面へ、指導することが必要である、子供の放火といふことはよくある實例であるが、それは多くは燃える火炎を見蒸氣喞筒や人々の走せ騷ぐのが面白いといふ恐ろしい無知と好奇心から出て居るのである、又此の無知と好奇心とが結付いて犬猫や昆蟲其の他の動物を殘酷に取扱ふ樣なことがあるが、此等も適當に指導したならば科學的研究の興味を植付けることが出來るのである。

子供の嘘言

一一、子供の嘘言　子供の嘘言は一面から見れば僞りを言はぬこと卽ち正直といふことの進化的發達を現はすものである、早き幼兒期に於ける嘘言は道德的に責むべき性質のものでないことは議論を待たないのである、子供によくある想像的の嘘言の如きは子供自身が欺かれてゐるのである、私慾的の嘘言と雖も强

き自己保存の本能から起つて來るので、子供自身の行動の結果が自覺せらるまでは、嚴格な責任を負はしむることは無理である、幼少な子供には文字通りな眞實を話すべきか又は僞りを告ぐるべきかを分別すべき能力が缺けて居るのである、少くとも四歳前の子供には眞の意味の僞りを告げるといふことは出來得ないことである、眞實といふことの概念が先づ發達して然る後に眞實を告くべき義務の感情が起りて來るのである、始めから義務の感を以て眞の意味の誠實を告げ得る子供は何處にも見出すことは出來ないのである、幼少な子供の心の內部には嘘もなければ誠もないのである、眞實といふ概念のない嘘言は無意味の嘘言である。

嘘言は他人を欺くことによりて或る目的を達しようとする、意識的な僞りの陳述である、夫故に眞の意味の嘘言には三つの特色がある、一、虛僞なることを意識すること、二、故意に欺くこと、三、明瞭なる目的の存在すること、此の三つを有することは心的發達の比較的高い狀態にあることを示すもので、眞實と虛僞との間の區別を明確に判斷し、其の僞りをして表面上眞實らしく裝ふの知能及び其の目的のために これを實行せんとする意志の力がなければならぬ、此の理由からして甚だ幼少なる時期に於て嘘言の可能なることは認められぬのである、幼少時に於ける子供の言葉に嘘言と認むべきものがあるとすれば、それは表面上の虛僞であるか、或は嘘言の萠芽である。

子時の嘘言の種採別けをしてみると、

イ、想像から來るもの、想像と事實とを明確に區別し判斷する力が缺けて居るので兩者の混同から起るのである。

ロ、言語及思想の不確實なる發達から來るもの、吾々が肯定的否定的事實に對して用ひる言葉は子供には單に內部の感情的狀態を云ひ表はすことに用ひらるゝことが屢々ある、例へば子供が胃腸などを損して食物を制限されてゐるときには、食べたいといふ欲望からしてお腹が痛くても痛くないといふことがある。かゝる場合痛くないといふことは唯だ食べたいといふ感情狀態を表示したものである。

ハ、臆病又は恐怖より來る自己防衛的のもの、例へば子供が遊戯中過ちて家人の大事にして居る器物を毀したり、窓硝子を破壞したりなどしたるとき、叱嗔懲罰等を恐れて事實を隱すことがある、又かくの如き過失が行はれた際、一緒に遊んで居つた仲間の者までも一種の義俠心又は同情心から過失者を掩護して僞りをいふことがある。

4、**模倣的のもの**　家庭の人々が平常嘘言を言ふのを模倣して平氣で僞りをいひ、少しも惡いことと思はぬ子供がある、又家人が明かに嘘言を示して子供に强いることがある、自分の嫌厭する訪問客が來たならば留守だといへと子供に云ひ付けて置く親もある、又或る子供が來客に歳がいくつですかと問はれて、家では六つだが汽車に乘るときは五つですと、答へたといふこともある、それ等家人の嘘言が知らず識らず模倣されて習慣となるのである、凡て幼兒は何事も他人の爲すことを見て行動するのであるから、數年の間幼兒は其の周圍の模範によるにあらざれば善惡につての批判力を有たないのである、道德的の性質を知得するまでは善も惡も凡ての風俗習慣は皆模倣によりて得らるゝのである、不正なことでも不善なことでも、世間の人々が爲すのを見、家庭の人々の行ふのを見るならばそれが不正であり、不善であるといふことを知る筈がないのである、酒を飲み、煙草を嗜む習癖も此の模倣的衝動から起るのである、此の模倣に

よりて善にも還り惡にも染まるのである。

II　子供の不良行爲

一、不良行爲の原因　子供の不良行爲の原因等に就ては種々研究調査せられてあるが、要するに子供の精神能力が道德的に未成熟であることに歸するのである。近來心的缺陷等の研究からして、凡て低能者の犯罪は、正常者のやうに其の心的作用の平衡を保つことが出來ないことから起つて來るといふことが暗示されてある、斯樣な點から普通の子供の場合に於ける不良行爲も同樣に心的作用の不十分なることから生ずるといふことが考へ得らるゝのである。而して子供をして不良行爲に陷らしむる所の機會を與ふるものは多くの統計調査等の示す所によれば、家庭生活の缺陷、不良なる環境、及び現時の産業的生活に於ける社會の經濟的條件等が重なる原因となつて居るが、癲癇、低能、其の他精神缺陷、隔世遺傳等の內部の傾向も其の素因を爲すことは疑ひもないのである、勿論人の性質は夫々皆違つて居り、從つて其の原因もそれだけ複雜であるから、各種の不良行爲も個人的の問題であり、年齡、性別、知力等により又、氣候季節、地理的要素、環境の事情等により夫々其の原因が異るのである。

不良行爲の原因

1、家庭の缺陷と不良行爲　近代の産業發達につれて、社會的經濟的事情からして動もすれば家庭生活の破壞せらるゝ傾向のあることは著しき事實である、殊に社會生活に於て其の多きを見る、今日の不良少年、不良少女の經歷を見ると、不健全なる家庭生活から出て居るものが甚だ多い、人生々活に於て家庭の教養を最も必要とする時期に於て、暖き眞の親しみのある家庭生活の恩愛に浴することが出來なかつたのであ

宗教の缺陷と不良行爲

る、次に掲くる表は其の一例である。

第一表

大正四年より七年までに、川越分監に入監せる少年犯罪者の家庭調べを見ると次の如くである。

父母共存、	五二四	母生別私生兒にして父不明	七
兩親死別、	一〇〇	未詳	六
兩親生別、	三九	私生兒にして父不明	六
父生別母死別、	一六	父生別	三二
父死別母生別、	五一	母生別	六九
母死別父不明、	二	合計	一二八四
父死別、	二二二		
母死別、	二一一		

第二表

父母に別れし年齡（大正十年入監者の調査による）

	父に別れたもの	母に別れたもの
一歲	一一人	五人
二歲	二人	三人
三歲	二人	三人

四歳	一人	一人	一人	一人	一人
五歳	二人	一人	一人	一人	一人
六歳	一人	一人		三人	一人
七歳	一人	一人		一人	一人
八歳	二人	二人		二人	二人
九歳	一人	一人	四人	一人	一人
十歳	三人	二人	二人	二人	二人
十一歳		二人	二人		
十二歳	二人	二人	二人		
十三歳	二人	二人	二人		
十四歳	一人	一人	一人		
十五歳	三人	三人	一人		
十六歳			一人		
十七歳					
合計	三五人	三一人	二人	一人	一人

其等の家庭の狀況調

善良と認むべきもの	四	通常と認むべきもの	二九

不良と認むべきもの	二七	不詳	六
父前科	三	父に情婦あるもの	三
母前科	一	母に情夫あるもの	三
父母共に前科	一	父母家庭を顧みず	一
父兄盗癖有るもの	三	兄弟浮浪	一
父母共に怠惰	三	兄酒に耽る	一
叔母乞食	一	兄賭博	一
父賭博	二	兄前科	一
父酒色に耽る	二		

第一表に於て、一二八四名の少年犯罪者中兩親の共存するものは其の半數に滿たないのである、而して其の兩親の何れかに生別した者は多くは皆親の年齢が若過ぎて共棲することの出來なかつた者が、親の不倫の爲、情夫又は情婦を作つて兩親の共棲しなかつた者等であり、又兩親に死別或は生別の原因は多くは家庭の不良に基くものであるとのことである。

2、環境的原因　子供の不良行爲は上述の家庭の缺陷と密接に關係する周圍の感化、境遇上の原因は又最も多いのである、近時の如き經濟的狀態は貧困、失業等不幸なる家庭の事情を作り子供の將來に憂ふべき結果を招來するのである。實に社會の經濟的緊張は子供をして罪惡に陷り易き勞働に導き、不良なる素因

を與へるのである。これは米國の例であるが、大都市に於ける子供の犯罪中兒童勞働者の犯罪は其の六〇%に及び、其の勞働の中でも街路商賣を爲して居るものは最も不良に陷り易く、殊に新聞賣子の如きは夜も書も惡事に親むの機會が多いのである、其の他市街、工場等の誘惑は家庭の監督の不行屆から子供を拉し去りて恐るべき不良の空氣に浸潤せしむるのである、それ等は獨り米國のみではない、現時に於ける文明國の大都市に於ては皆同樣の傾向を有つてゐるのである。

古い諺に「怠惰は凡ての罪惡の母である」といふことがあるが、現時の如き不況、恐るべき就職難の時期に於ては小學校を卒業したる貧家の子弟等は求むるに職なく働かんとして仕事なく徒らに爲すことゝもなくぶら〳〵して閉居することは又年少者に取つて危險なる誘惑の機會を與ふるものである。

不良行爲と本能要素

3、不良行爲と本能要素　自然的な本能と、子供の道德的未發達に歸因する無知といふことは子供の不良行爲に關する最も重要なる原因的要素である。遊ぶことが子供の本能であるとすれば正當なる子供の權利を尊重し、必要なる遊戯について適當なる設備と機會とが與へられねばならぬことを考慮しなければならぬ、此等の考慮が拂はれなかつたならば子供をして知らず識らず自然の間に不良行爲に導くことになるのである、殊に大都市に於ては子供は自由に遊ぶ場所がないために他人の庭園又は野菜畑で野球をなし、或は街上で球遊びなどをして交通を妨害する如き行爲を敢てするのである、其の他傷害、暴行等の如き不良行爲と雖も正常なる本能的傾向に導くべき適當なる機會が與へらるゝならば、此等の惡行を避くることが出來るのである。

兒童期に於て明確なる道德的觀念、習慣、理想及義務の感の缺けて居る點は甚しく原始人類に類似してゐる、蓋し種族的遺傳によりて潜在して居る本能が、其の結果に於て不良的行爲の形式となつて現はれるのであらう、夫故に現代の文化的社會の要求に應ぜしむるには、其等の本能を指導し變化せしめて道德的進化を增進して行かなければならぬのである。どんな人でも聖人君子と云はるゝやうな人でも、兒童期に於ては一度は必ず腕白な惡戯の時期を通過するのであるから、感化院に收容されてゐる子供でも公平に觀察するならば普通の子供と違つてゐる唯一の理由は其の環境、境遇が違つて居つたといふことだけである、子供の不良的本能は古代人の種族的行動の遺傳的殘存で、原始時代に於ては斯の如き本能が生存に最も適して居つたのであらうと考へらる、亦生物學的見地より見ても殺人、竊盜、掠奪、凌辱等の如きは原始時代の動物的生活に於ては普通一般のことで固より正常なる行動であつたに相違ないのである、然るにそれが不道德行爲となるに至つたのは、かゝる行爲が社會的批難を喚起したからである。多數の犯罪學者も亦、一般に罪人といふものは其の人の精神的、道德的進化が古代人類の型式を現はすべき狀態に停止されておるものゝ典型であるといふ見界を有つてゐる、夫故に子供の不道德性は身體及精神的發達の停止を避け、速かに現時の健全なる社會的遺傳に導き、以て種族的遺傳の傾向を抑制することによつて善導することを得るのである。

精神的隔世遺傳

精神薄弱と不良行爲

4、精神薄弱と不良行爲　現時の學者の多數は、子供の精神薄弱といふことが永續的の不良行爲に導く重要なる原因の一つであることを示して居る、而して心的缺陷者の約六十五から七十五パーセントまでは先天的であることが報告せられてあるのを見ると精神薄弱の大部分は遺傳的であると見なければならぬ、然らば心的缺陷の如何なる部分が不良行爲を爲すに至るかは尙ほ詳細なる研究を要する所である、此の方面

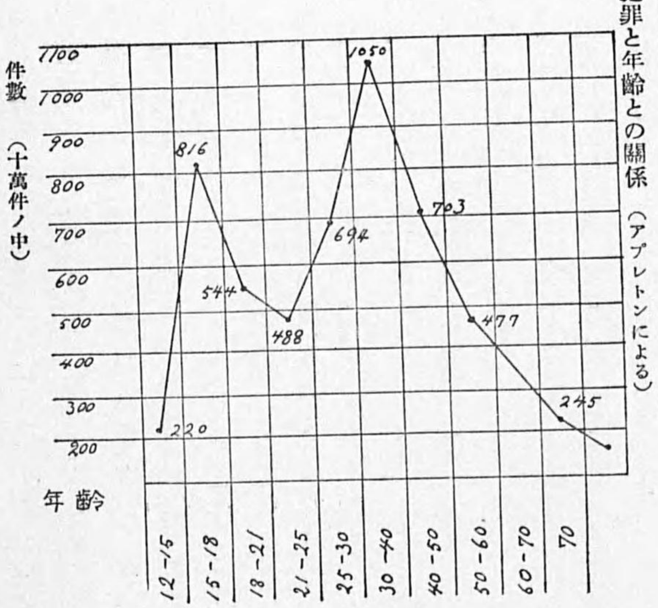
の研究はビネー、シモンによりて爲されてあるが、不良行爲の中、實際の低能者の百分比は普通兒童よりも大であるといふことは種々なる材料の示す所である、低能は何故不良行爲に陷り易き素因を有つて居るかといふことに就てはターマンが云へる如く、第一自己及他人に對して、其の行爲が及ぼすべき種々なる結果を前見し察知すべき能力及び、第二克己自制を斷行すべき勇氣と能力、此の二つの能力が薄弱であることが、不良行爲に陷るべき素因となるもので、低能兒は普通の兒童よりも此の能力が特に甚しく缺乏して居るのである。

道德的判斷、禁止及び教唆等に對する抵抗力等は曆年齢よりは寧ろ知力の作用によるものである、未だ正邪を辨別し得る精神能力のないものは只だ衝動により本能によつて動作するのである。然るに皮相なる觀察は往々にして此の事實を見遁すことがある、恰も馴れた鸚鵡の如く、口では譯が解つたやうなことをいふが詞の上の道德と正常なる知的經驗から來た所の眞の道德との間の明確なる區別を誤ることがあるのである、實際をいふと此の眞の道德は青年期に達するまでは湧いて來ないのである、低能兒は自らの行爲に就ては何を爲して居るかといふことは知つて居るが、其の行爲の性質を知らぬのである、而して多くは強い本能的感情的復合によつて事を爲するのであるが其の必要なる禁止能力を缺き、又或は其の行爲の性質を可なり能く知つて居ても、之れに抵抗する力を有たぬのである。

二、年齢と犯罪　犯罪と不良行爲は殆ど凡ての場合に於て兒童及青年期に於て始まるのみならず一は十四五歳に於て、他は通常實生活に移るべき時期、二十歳から三十歳までの間に於て其の頂點に達する、多くの統計的調査によると不良行爲の最も多い年齢は男子平均一四、〇九歳、女子平均一四、七一歳である、（カ

ーデーによる）又ホールの調査によれば十六歳で最も多くの惡行が行はれ、マローの統計によれば兒童の過失數の最大なるは十四歳であることを示してゐる、シエルデンは十歳から十五歳までの男子には掠奪的の不良行爲が最も多いことを見出して居る。

犯罪と年齢との關係（アプレトンによる）



惡行の性質

三、子供の惡行の性質　惡行の性質は年齢により、性の差異により、又多少季節、氣候、人種の別、文化の程度其の他の要素によりて違ひがあるが、其の主なる原因となる要素は年齢によりて子供の衝動と本能とが根本的に異るからである、性的の差異は一部は男女間の肉體的及心的相違に基き一部は又社會的要素に歸因する、個人的氣質特徴、能力等は殆ど其の行爲者の同一なることを證すべき目的に役立つ程特徴ある性質を示して居る、季節より云へば、浮浪の性質凌辱等は春に於て最も多く行はる。

男子の典型的惡行は竊盜である、子供の最初の犯罪を始むる階級は竊盜であると云はれて居るが、八歳より十四歳までの子供には盜をなすの傾向を有つてゐるものが多い、女子の惡行としては不行跡なる猥褻に屬するものが多いといふことである、米國の或る調査によれば、シカゴの少年裁判所に來りたる二四四〇人の内八十パーセントは其の仕事に就いてから最初の十年に不行跡に陷つて居る、浮浪は十三歳で頂點に達し、矯正すべからざる惡意の惡戯は十四歳、小窃盜、暴行、脅迫等は十五歳、無宿、夜盜は十六歳が頂點となつてゐる、對人犯罪は此等對物犯罪よりも數年後になつてから頂點に達する、特殊なる境遇や地方的の事情も亦或る程度まで不良行爲に影響する、カリホルニヤ洲の少年裁判所に來た十七歳の男子の大多數は交通妨害を以て問はれてあつたことが示されてあるが、此の種の犯罪は此の年齢に於て最も普通であるのみならず、犯罪の大多數は十七歳頃に多いのである。

惡行の豫防

四、惡行の豫防　不良行爲を未然に防がんには先づ第一に道德的發達に依賴せねばならぬ、道德的訓練と教育の力とに待たねばならぬのである、而して其の第一歩としては吾々は兒童性と其の品性構成の要素とに關する知識を迅速に普及せしむることである、第二は社會的及經濟的の條件を出來るだけ多く出來るだけ速かに改善せねばならぬ、又兩親か家庭に於て眞に教育的態度を以て子供に接することが大切である、都市町村は單に業務を行ふべき場合であるといふだけでなく、子供の住むべき場所であり、家庭の生活を適當ならしむべき目的を以て建設されねばならぬ、健康、運動、娯樂、其他少青年に適切なる修養を與ふべき設備と、其等の施設を單に娯樂的に供するばかりでなく、進んで道德的に導き得べき組織が必要である即ち公園、男女少青年の倶樂部、青少年團等は兒童の正常なる社會的本能の開發と、道德的訓練とに對して大なる力を有するものである、尙ほ家庭、學校、寺院等に於ても道德的訓練を最も有効に增進せしむべき手段と方法とを攻究し、一方には公設圖書館、博物館、劇場、活動寫眞、補習夜學校等社會的教育の機關を利用することが必要である。

第十章　家庭に於ける德性涵養

一、道德的訓練　**(一)規則正しき行動**　無意識的行動は意識的選擇活動に影響するものであるから、道德生活の準備は嬰兒期より始めねばならぬ、睡眠、食事、排泄等多少無意識的の有機的作用を規則正しく發達せしむることは德性の基礎を爲すものである。これは獨り子供の健康衛生上の見地からばかりでなく、靠固なる道德的性質の發達の基礎を築く上に於て大切なことである、勿論此の如き習慣を有する子供は必然的に一層道德的であるといふのでなく、唯だ一層道德的になり易いのである。

(二)正しきことを爲すべき意識　幼兒が自己の行動の結果に氣がつくやうにならば、其の意識を道德的習慣の發達に利用せねばならぬ、これには正しき行動は喜ぶべき結果、惡しき行動は不愉快なる結果を伴ふことを自覺せしめねばならぬ、盲目的の本能も明確なる理知も愉快なる結果の動作を反復し苦痛なる結果を避けんとするものである、斯くして子供は、高い程度のものではないが、道德的眞理の基礎を實現するのである。

(三)衝動を制止すべき傾向を養ふこと　子供に自制心を起さしむる第一階段は暫時の間有機的本能的の衝動を禁止することである、菓子が欲しくて泣いてゐる子供を制止するには、それを與へる準備又は何かそれを滿足せしむべき事が出來るまで靜かに待つてゐるやう納得せしむるに足るべき保證の言葉が大切である此の待つてゐる時間を漸次長くすることは自制力を養ふ第一歩である。

(四)困難に堪へしむること　衝動を抑制し、不愉快な仕事を強いて爲すことはかゝる行動によりて好ましき結果を得ることを意識せしめて奬勵しなければならぬ、子供は傷いたときに痛いのを耐へて泣くのを止め、重荷物を我慢して運搬したり其他何事でも一生懸命自制努力して或仕事を爲し遂げるといふやうな事は其の動機が、偉い良い子供だと云つて賞められたいからであるにしても、競爭的本能の滿足からであるにしても何れにしても子供の道德的發達に役立つことであり、苦しみの後ちに樂みが來ることをよく體驗せしむることは働いてから後ち遊ぶといふ良習を養ふことになる。

(五)高等なる本能の滿足を求むること　行動の動機を意識することは有意的動作の現はれた著しき形式である。行動が盲目的衝動を脱して有目的となれば其の目的が卽ち或る本能の滿足である、如何なる本能の滿足が最も多く求めらるゝか、其の本能の種類は主として個人の道德的特質を決定するのであるからして、高等なる本能を滿足せしめんとする習慣を出來得るだけ早く發達せしむることが最も重要である。例へば自己自身のためにのみ最善を爲さんとするやうな下等な個人主義的衝動の滿足よりは他人のために盡すことを喜びとする高等なる社會的本能の滿足を選ぶ子供は最も優れたる道德的習慣を形成するのである。

(六)正しき習慣を形成すること　道德的發達の準備的時期に於ては習慣の形成といふことは最も重要なることであるから、何事も高等なる動機から行動することの習慣を養ひ、正しき觀念に導くことに努めねばならぬ。

(七)從順なること　順從といふことは子供の主要なる德として考ふる人も多いが、從順其の事は其れ程重要なものではなくて從順なる行爲を行ふことによりて種々なる諸德が從屬的に生じて來る所に重要性があ

るのである、即ち從順なるためには凡ての種類の衝動を禁止し統制し、規則に從うて行動する習慣を生ずるのである。

習慣の形成

二、(二)習慣の形成　習慣は同一刺戟に對する反應が同一方法の運動で反復せらるゝことによりて形成せらるゝのである、一度習慣が形成せらるゝと、其の行動は殆ど機械的に容易に行はるゝやうになるのである、自轉車に乘り馴れると足の踏み方、身體の平衡、ハンドルの使用等が殆ど器械的に行はるゝ如きは習慣である、又歩行の如きも、最初は本能的に起る運動であるが、習慣によりて固定し無意的に、談笑の間にも行はるゝに至るのである、有意的に努力を以て行ふ動作は別として、如何なる動作の運動も始めから同一方法で反復せらるゝ運動といふものは甚だ少いのである、同一運動に對して始めは種々なる動作が爲さるゝのであるが、其の中最も適當なる動作が見出さるゝと、それが同じ方法で繰返されて習慣となるのである、テニスの如き運動に於ても、最初はラケットの持ち方、球の打ち樣等種々違つた方法で爲さるゝのであるが、其の内に自分に最も適當した打法、身體の構へ方、態度等が自然に選ばれて其の動作が反復され固定して習慣となるのである。習慣の生理的基礎としては吾々の腦髓には一度或る刺戟が感官を通して來ると、それによりて神經系統の上に容易に消滅しない通路を作る傾向があるのである、夫故に再び同一刺戟が受感せられたるときには最初の場合よりも神經通路の傳達が一層容易に且つ圓滑に運爲せらるのである、習慣は神經系統のかゝる傾向から形成せらるゝのであるが、子供には此の傾向は甚だ強い彈力性を有して居り、良習もつき易いが惡習もつき易いのである、一般に快を求め不快を避けようとするのは本來の傾向であるから、快の結果を得た動作は常に反復せられ易く早く習慣となり得るのである、子供が種々なる習慣を形成するのは最も爲し易き自然的動作より生ずるのであるが、道德的に見て善良なる習慣をつけようとするには自然的習慣にのみ任せて置く譯には行かぬ、幼兒期に固定せられたる良習慣は後ちに發達する善良なる意志行爲の基礎となり、善良なる品性を作るのであるから十分の注意と努力とを拂つて或る望ましき動作の反復を續けさせねばならぬ、然し幼小なる子供に對して努力を強いることは無理である、又消極的に或る不良なる動作を禁じ、或は叱責懲罰等によりて矯正せんとすることは尙ほ一層無理である、子供は喜びを欲し、快を好む情緒は甚だ強いのであるから、此の子供心を把へて積極的に善良なる動作に導くことを考へねばならぬ、吾々人間は習慣の束であると云はれて居る、吾々の日常生活に於ては朝夕の起居動作から道德的行爲に至るまで習慣的のものが甚だ多いのである、而して子供の行動は多くは自然的習慣であり、其の行動は多くは模倣から來るものであるから、子供をして自然的に善良なる習慣に導くには日常子供に其の模範を示すべき家庭の生活が醇良であり、道德的でなければならぬ。

三、家庭に於て養成すべき良習

1、滿三歲頃から育成すべき良習

(一)用便を規律的にすること
(二)每朝起きたときに朝の挨拶をすること
(三)每晩寢る前に挨拶をすること
(四)獨りで着物を脫ぐこと
(五)獨りで行儀よく食事をすること

(六)來客にお辭儀をすること
(七)障子、襖等の開閉を丁寧にすること
(八)獨りで穿物をはき又脱ぐこと

滿五歳頃から育成すべき良習

(一)獨りで顏を洗ふこと
(二)獨りで足袋や靴をはき又は脱ぐこと、履物を整理すること
(三)獨りで用便をすること
(四)穩かな音聲を用ふこと
(五)獨りで釦をはめること、紐を結ぶこと
(六)獨りで鼻をかむこと
(七)食事の前に手を洗ふこと
(八)帽子、着物等を一定の場所に置くこと
(九)獨りで着物を着ること
(一〇)遊びに出るとき告げて行くこと
(一一)遊んだ後に玩具等を整理すること
(一二)他家で挨拶をすること

2、兒童期に於て養ふべき道德的習慣

(一)子供の利己的傾向を善導し、自他の區別を明かにし責任及義務を重んずる習慣を養ふこと
(二)適當なる遊戯及作業により勤勞を喜び、困難に堪へる習慣を養ふこと
(三)劣等なる感情欲望を抑制し、高等なる動機によつて行動せんとする習慣を養ふこと
(四)規則を守り命令に從順なる習慣
(五)他人の權利を尊重し互に相犯さゞる習慣
(六)正直にして約束を重んずる習慣
(七)清潔、節制の習慣

四、家庭に於ける指導の方法　幼少なる子供の德性涵養は主として家庭に於ける自然的の感化によらねばならぬ、自然的感化は自由放任を意味するものではない、子供は道德的、正邪善惡を辨へず且つ感覺的欲望が強く、衝動的本能的活動が盛であるから、これを指導することは無論大切な事ではあるが、徒らに形式的な干涉壓迫が加はると子供の自發的意志を拘束して進取敢爲の氣象を挫き、其の特色ある發達を妨げ甚しきに至りては自己を隱蔽し、無邪氣なる子供らしい純眞の性を失ひ、虛僞に陷ることもあるのである、夫故に常に善良なる家風と家族各員の人格的感化とによりて自然の間に醇化し陶冶して行かねばならぬのである。我國の家庭に於ては昔から和親、協力、敬神崇祖、質實勤勉、秩序、清潔等の美風が家族精神の要素を爲して夫々の家庭に於ける祖先傳來の歷史習慣等と結付いて特殊の家風を作りて居るのである、而して其の善美なる家風は家族の中心たる父たり母たるもの〻人格によりて定まるのであるから一家に於ては常に其の生活を純ならしむることが大切である、今日子供の德性訓練上教育的の方法として最も適切な

示範

命令禁止

るものを擧ぐれば

1、感化の方法としての示範　父母長上が自ら實踐躬行して模範を示し、子供をしてそれに倣はしめねばならぬ、殊に幼少なる子供は暗示性に富み模倣の力が最も強いので、家族の一擧一動は盡くこれを模倣するのであるから、示範による感化は幼兒に對しては最も大なる效果を有するものである、示範は人格的發現による自然的薫化であるから平素不斷に行はるゝ所に眞價があるのである。

2、指導方法としての命令禁止　爲すべきこと、爲すべからざることを告げて、これに服從せしむることである、子供をして非行と遠ざからしむるためには、場合によりて必要なる一方法である、爲すべきことを實行せしむるのを指令、爲すべからざることを禁止すをのを禁令といひ、此の二者を命令といふのである、命令は必ずこれを遵奉履行せしめねばならぬ、强制的性質を有するものであるから、其の實行に當つては次の如き注意が必要である。

イ、命令は子供の能力を顧慮し、其の實行し得る程度のものでなければならぬ、

不必能なることを强制するときは子供をして無氣力ならしめ又は憎惡の念を起さしむる、

ロ、命令は多きに過ぎぬこと

屢〻命令するときは、命令がなければ實行せざるの惡習慣に陷り、自發的活動を失ふに至る。

ハ、命令は前後一貫して統一あること、

統一なき命令は子供をして去就に惑はしめ、これを實行せんとする氣力を阻喪せしむる、

ニ、命令は一旦發した以上は必ずこれを實行せしむること、

訓諭

懲罰

實行を缺くときは命令者の威信を失ひ訓練の效果を失ふ。

ホ、命令は子供の利益幸福を增進せんとする好意より出づること、

ヘ、子供の長ずるに從ひ勸告、助言、注意等の形を以てすること、

3、反省の手段としての訓諭　子供をして是非善惡を悟らしめ、善を行ひ惡を避くべき理由を示し、其の反省に訴へて常に思慮ある行動を爲さしめんとするものである、夫故に訓諭は未だ分別心の發達せざる幼少なる子供に對しては無理であるが、長ずるに從ひ平易なる事柄から漸次其の適用の範圍を廣げて行かねばならぬ、訓諭が命令と異る所は强制的でなく、子供をして感奮發意自ら實行せしむる點にある。

訓諭については注意すべきこと

イ、訓諭は子供の反省に訴へるものであるから合理正當にして感激せしむるに足るものでなければならぬ

ロ、訓諭は子供の特性により寛嚴宜しきを得ること、

ハ、訓諭は子供をして十分に領解し悅服せしめ、必ず實行的精神を起さしむること、

ニ、訓諭は叱責でないから、徒らに非行を指摘することなく、丁寧懇切に、子供の心情に觸るゝまで誨へて止まざることを要す、

ホ、幼少なる子供に對しては簡潔で要領を得たるものでなければならぬ。

4、矯正手段としての懲罰　懲罰は子供の非行に對して故らに苦痛を與へて不當なる行爲又は不良なる性質を矯正し、將來を戒めんとするものである、罰には應報、威嚇及改善の三つの意味が含まれて居る、應報とは其の犯したる惡行の輕重に應じて懲罰するのである、威嚇とは一般に苦痛を豫告し、罪を犯したる

ものを罰すると同時に他のものをして罰を恐れしめ、社會防禦の意味を含むものである、されど單に威嚇によりて將來に備へんとするのでは眞に道德的に衷心から悔悟せしむることは出來ぬ、懲罰の眞の目的は個人の改善にあるのである、即ち其の非行を悔悟せしめ、正善に導かんがためであるから改悛の徵候明かなるときは必ずしも罰を課するを要しないのである。

罰には自然的の罰と人爲的の罰とがある、自然的罰とは自然の法則又は道德法に反するとき自然の結果として起る苦痛である、例へば暴飲暴食するが如きは生理的の自然の法則に反する結果として胃腸を傷ひ、虛僞不誠實の行爲は世人の信用を失ひ社會的の制裁を受くるが如きである、人爲的の罰とは一般の規定又は約束により或は課罰者の意見に基いて故意に苦痛を與へるものである、ルツソー、スペンサー等は人爲的の罰は私情に驅られ、公平を保ち難く且つ對者の惡感情を起し、反抗心を招致し易いからこれを廢して自然の成行に任せ、自然に其の非行を悟らしめんことを主張した、然し此等の說は唯だ罰及干涉の弊を敎へたるもので、若し何等の警告も注意をも與ふることなしに自然の成行に任せたならば、其の非を悟れるときは既に悔いても及ばぬのである。

吾々が單に罰といふときは一般に人爲的の罰を指すのである、罰には、體罰自由罰、名譽の三種がある、體罰とは鞭韃、束縛等の如く、身體的苦痛を與へるもので、自由罰とは子供の自由を拘束することで例へば遊戲を禁止するが如きである、名譽罰とは子供の名譽心に訴へ自ら其の非行を恥ぢしめようとする手段である、一般の家庭に於て最も普通に行はるものは叱責である、諸學校に於て生徒の名譽の地位を奪ひ、又は停學、退學等を命ずるのは此の名譽罰である。

罰について注意すべき事項

イ、罰は成るたけ少くすること、

罰は、示範、命令、訓諭等其の他如何なる方法を以てするも效果なきときに於てのみ行ふべき最後の手段であるから、これを濫用するときは罰に慣れて無恥の人となり、又は反抗心を起し、自暴自棄に陷らしむることがある。

ロ、先づ、果して課罰の必要あるか、他に適當なる方法なきや、又課罰によりて果して其の目的を達し得るや等十分に考慮して然る後に課罰すること、

ハ、懲罰の程度並に方法は子供の精神の發達と非行の起つた動機、及境遇事情等をよく吟味し然る後に定むること。

ニ、罰は同一の非行に對して必ずしも同一なるを要しない、子供の個性、年齡、性別等を考慮し又其の感受の影響等を參酌して課すること。

ホ、公平なること、私情を挾み忿怒に驅られてはならぬ。

佛蘭西の哲學者モンテーヌは「罰は子供に附ける藥である、藥を與へるに怒つてするものがあらうか」と云つたのは誠に鍼言である。

ヘ、罰は眞に子供の向上を希ふ誠意と愛情を以てすること。

憎しとて叩くにあらず雪の竹、課罰の精神は實に此の一句にあるのである。

5、奬勵手段としての褒賞　子供の善行に對して故らに快感を與へ、これを爲すことを好み、これを爲す

ことを愉快に感ぜしめて、鼓舞奬勵する手段である、其の方法としては物品を與へ、或は名譽的表彰を爲し、賞讃滿足の意を表し奬勵の言を加へる等種々あるが一般に子供を指導する方法としては消極的に抑壓、禁止するよりは誘導、奬勵する方は效果が大たるものである、特に幼少なる子供に對しては罰に代るに賞を以てせなければならぬ。

褒賞について注意すべき事項

イ、賞は幾分其の多きを妨げざるも、濫賞に流れざること、

ロ、賞は天賦の才能よりも寧ろ其の努力の結果に重きを置くこと、

ハ、賞は時として他の子供の猜疑心を誘發し、又本人の自負心を增長さする嫌あるから其の審査は公平正確にして授賞の理由を十分明かにすること。

ニ、賞は幼少のものに多く、年齢の長ずるに從ひ、次第に其の數を減じ、感覺的欲望の滿足より名譽心の滿足に移り終には良心の滿足を以て最高最美の賞と感ぜしむることを要する。

以上述べたる如く訓練の方法には種々あるが、これを適當に取捨選擇して其の效果を大ならしむるのは訓育の任に當る人の人格熟練に待たねばならぬ、要するに訓練は子供の品性を陶冶することであるから、他人の品性を陶冶するには先づ自分の品性が能く修練されてゐなければならぬ、指導訓育の位置にある者の品性に缺けた點があつては、其の與へる訓諭も示範も十分なる效果を收むることは出來ないのは當然のことである、殊に訓諭や叱責の場合に於て親の眞劍な熱誠と愛情とが溢れ出て子供の胸底に透徹しなければ效果を得難いのである、子供が强情で反抗心の强い場合、親が怒つて叱責するやうなことであつては矯正どころか、却つて親の有する情緒的缺點を子供に植ゑ付けることゝなり、訓育上反對の惡結果を來たすことゝなるのである。

五、指導手段としての暗示　暗示とは內部模倣の手段によりて對者に自分と類似の心的狀態を喚起することである、斯く暗示には、暗示者と模倣者との對立を要する、暗示を與へる活動を暗示性といひ、暗示を受ける働きを暗示感受性といふ、例へば母の態度は甚しく暗示性に富んで居り、子供の態度は母に對して强い暗示感受性を有して居るのである、子供の周圍の人々は絕えず判斷、感情、決心等の形式に於て、言語及動作による示唆的態度を取る、此等の態度は子供の上に刺戟として働くが、刺戟が子供をして此等の心的過程を領解せしむるだけでは未だ暗示の問題とはならない、其の人の態度が子供に模倣の手段によつて同一の態度を生ぜしむるときにのみ暗示として働くのである、子供の判斷は其の人の判斷其まゝであり、子供の感情は其の人の感情の模倣であり子供の願望は其人の模寫である、暗示が受容せらるゝ模倣は純粹なる機械的模倣よりは高等なる心的發達を豫想するものである、子供が他の子供の叫ぶのを聞いて直ちに叫び出すのは機械的の模倣である、これに反して他人の涙を見て其の悲しみを領解して自ら悲しくなるときには暗示、(感情的暗示)である、他人の手をたゝくのを見て同樣に手を拍つのは單なる模倣である、然しながら競技などの觀衆の一人が競技者を激勵するため又は其の美技を賞讃するため拍手すると他の觀衆も同樣に拍手するのは暗示である(意志的暗示)、此等の例からして單純なる機械的模倣と心的模倣との間の移り行きは甚だ容易なる歩みであることが解る。

暗示は模倣に於けるが如く子供が其の影響を受ける人によつて暗示の效果が異る、殆ど例外なしに母の

影響は其の子に對して最も强い暗示となり、母の考へて居る美醜、正邪は其の儘子供の心に反映するのである、母の信仰は子供の教理となるのである、母の外に尙ほ子供に對して暗示的力を有するものは父、兄姉、僕婢其の他親戚朋友等であるが、學校に入れば教師は又大なる暗示者である。

反對暗示

反對暗示、所謂反對暗示と稱せらるゝ現象は普通の直接暗示とは異りて見へるが、實際は此等の二つの形式は最も密接に關係して居るのである。反對暗示に於ては觀察せらるゝ態度とは全く正反對の態度が選ばるゝのである、次の物語は反對暗示の例を最もよく示したものである、或る農夫は若き豚を屠殺せんとしたが、豚は强情に屠殺場の戸口で入ることを拒絶した、農夫は有りつたけの力を出して前方に引張ると豚は又同じやうな力を以て後ろの方に引き戻る、兩方で引つ張り合ふて居る間は何時までも此の爭ひは續くのである、そこで農夫は豚の右方に廻はつて逆に全力を以て前方に引張つた、すると豚はそれに反抗して又後方に引いたので自ら戸口の方へ入つて了つた、農夫の反對暗示に陷つたのである、我儘强情なる子供は屢〻爲すことを拒み又は云ひつけられた通りになることを好まぬものである、禁止されたことを却つて爲さうとする傾きがある、それは獨り强情な子供ばかりでなく子供一般にさういふ傾向がある、夫故に此の反對暗示は場合によりては却つて教育的の價値を有するものである、風呂嫌ひの子供などは、入りたさいといつては中々入らぬものであるが、かゝる場合には反對に入らないで何時までも垢をつけてゐなさいといふと却つて入りたがるのである、食物などでも食べるなといふと食へたがり、澤山食べなさいといふと食べないものである。

暗示感性の性質は多くは年齢に關係する、暗示を感受するに必要なる條件就就中他人の態度を領解する力が發達するまでは暗示は成立せぬのである、大凡二歳の半頃から暗示現象が見出さるゝが、其の後間もなく感受性が甚だ强くなる、子供は其の周圍の人々を大なる力と賴み、其等の人々に無限の信賴を有し、事に對して無批判なる態度を取り、周圍の人々の言動を無條件に信任すること等は子供の暗示感受性を大らしむるのである、然し年齢を增すと共に自發性の發達するに從ひ獨立批判の力が强くなり、他人の態度を採用し、それを以て滿足することが減少し、暗示に反對を感ずるに至る、斯く暗示感受性の減退は兒童發達の最も確實なる法則の一つである。

年齢から離れて又暗示感受性には個人的の差異がある、これは單に知能の低いものは暗示に感じ易いと考ふる必要はないのである、暗示感受性は一部は氣質に關するのである、若し子供が發動的な氣質を有し他人が爲し他人が信ずる所のものを同樣にこれを爲しこれを信ぜんとする傾向あるならば、知能に關係なしに暗示に感し易いのである。

暗示によつて、子供の苦痛恐怖嫌忌等を取り去ることは教育的に必要なることであるが、尙ほ一層重要なることは內氣で無氣力な子供を鼓舞し、子供の態度に價値ある永久的興味を植付け有害なる傾向を取り去ることである、殊に早き幼兒期に於ては子供の判斷意志の決定等を子供の自己創造に任すことは不可能であるから、暗示が必要である、されば子供が長ずるに從ひ教育の手段としては漸次これを減じて行かねばならぬ、發達する所の自發性は子供自身の內部の創造に於て自己自身の感情、希望、判斷等を見出すことを可能ならしむるからである。

第二篇　精神の發達

第十一章　發達に關する基礎概念

一、心の意義　最近の生理的心理學に於ては各心的狀態又は其の過程に對する神經、物理的機械作用に於ける相關的變化を研究して居るが、かゝる相關々係は一言にして覆へば、神經作用的ならざる精神作用はないといふことに歸著する、此の說明は心と身體との極めて緊密なる關係を述べたものである、ダーキンの大理想は此處にも應用されて、心は身體の如く矢張り生物學的所產であり、種族の身體と共に發達し、個人の身體と共に發達するといふことは發生心理學の原理となつて居るのである。それは心及び意識は、有機體が其の環境に對する反應に於て爲されたる運動、又はそれとの關係に其の起原を有するといふ概念を含んで居るのである、更にこれを他の言葉を以て云へば運動のないものには心はないといふことになり得るのである、心は全一的生活過程の一面である、其の最も單純なる形式は反應の變更又は反應の指揮である、それが高等に發達したる複雜なる精神作用と異る所は唯だ程度の差に過ぎないのである。

二、精神發達の基礎　正しい立場から子供の精神發達を理解するには、發達とは如何なる意味を有するものであるか又如何なる條件によつて決定せらるゝものであるかを知らねばならぬ、個人には發達があることは自明の理である、されど個人は雜多なる印象と影響との中に育つのである、此處に問題が起る、發達は其の本質に於て個人自身に實際の根原を有する處の過程であるか或はまた個人の上に無限の影響を與へる所の外界環境の結果であるか、此の問題は獨り理論的知識の要求からのみならず、子供の取扱及教育上の實際的必要から起るのである、發達の要素に關する此等の問題については正反對なる二つの答がある。一は生得說で、凡ての發達は其の實際の本質に於ては個人の生得的性質から進むものであることを支持する、他は極端なる經驗說で、個人の精神は最初白紙である、生後外部から其の上に描寫せられたる所の經驗が其の內容を爲すものであると主張する、然し吾々は遺傳の事實を考へ又教育の效果環境の影響を認むるときに、心的發達は單に生來の性質が漸次に發現して來るといふことばかりでなく、又單に外界影響の受容及反應ばかりではなく、內部の性質及外界の條件との輻合の結果であることを肯定せねばならぬのである。

凡て成長發達する所の若き個人は嬰兒と雖も一人格であり一事物ではない、一人格は常に分つべからざる全一體を形成するものである、單に心的要素の偶然的集合ではなく又心的過程の機械的連結の集合でもない、人格は物ではないのである、個人の身體的及心的要素並に其の過程は、分割すべからざる全一體の統制的生活力の下に全體を構成する一部分として存在するのである、後章說く所の感覺といひ知覺といひ、記憶、思考、感情、意志等夫々の機能は唯だ方法上の配列である、各々の單一なる機能の發達は皆夫々全體の發達に關係する、恰も肉體的の生活に於て消化、血行等の作用が各獨立の存在を爲すものでなく、相互に相關係して發達すると同樣である、されど人は肉體的個人、心的個人に分割せらるべきものてはない、人格としては外部的には身體的形式を表はし、內部的には心的形式を現はして居るが、それによりて其の統一を失ふものではない、而して人格には身體的又は心的の何れに屬すべきかを惑ふが如き幾多の條件がある、精神物理的と稱する中性のものは卽ちそれである、言語發達、意的動作の如きは統一されたる

精神物理的の發達である、個人には、意識又は無意識的に個人に影響する所の先天的傾向がある、即ち自己保存及自己發達の衝動である、自己保存の目的は生命を維持し、取得したるものを確保するにある、其の作用は自己榮養及自己防衛である、自己發達の目的は、自己存在の標準を高むるにある、各繼續的の瞬間に於て一事を成就すれば更に新らしき目的、新らしき價値、新らしき上達の可能に向つて前進する、それが身體的成長、心的發達、創造的の活動として現はれるのである、然し此等の目的の一つだけでは人類の生活を滿たすことは出來ぬ、成長の過程に於て此の兩者が結合し協合して始めて個人の發達が實現せらるゝのである、殊に幼少なる時期に於ては此の結合は最も緊密である。

三、發達に關する一般法則　吾々の精神の發達には恰も身體の發達に於けるが如く或る時期に於て各異りたる特徴がある、即ち幼兒、少年、青年と各時期を通して成年に達するまでには、秩序的な法則的の進步發達がある、一般に或る時期に於ける心的生活の特徴は其の時期の必要によりて決定せらるゝのである、嬰兒期に於ては心的內容が空虛であり、それに先天的の活動衝動が盛んであるため、感覺的及運動的の經驗が迅速に蓄積する、感覺器官は種々變つた刺戟を待ち受けて居り、筋肉は新しき複雜な活動に對して準備して居る、此等の手段によりて多くの心的內容物が供給せらるゝことがなければ到底進んだ高等な精神的過程といふものは不可能となる、されば此の時期は感覺及運動知得の時期と稱せられてあるのである、而して斯る時期からして徐々に運動的習慣が形成せられ、意識的記憶の基礎が置かれる、幼兒期に入りては又心的聯合も確定され、一步々々統制能力、意志及實際的判斷力等の兆候が顯はれて、高等なる推理過程の基礎が置かるゝのである、兒童心理學の實際的價値は心的發達の一般的原理を發見してそれを子供の發達、精神訓練上に利用すべき點にある。子供の發達、其の活動を理解するには先づ第一に子供の生活に共通なる一般法則を知らねばならぬ。

1、成長の原理　成長といふことは進化論の發達以來根本の原理となつて居る、人間の心も進步發展といふことがなければ發生心理學も兒童心理學も全く無意味なものとする、兒童精神の彈力性、成長發達の可能性は殊更議論を要せざる程自明の事實である。

2、約說(反復說)の法則　兒童研究によりて確定せられたる原理の中で最も早く且つ最も一般的なるものは所謂約說の原理である、此の說を主張する學者の說く所によれば人間の心の發達は下等なる動物的階段から高等なる形式に達するまでの進步的行程を經過するのみならず、個人及種族に於ける歷史的發達進步の過程中に現はされたる特質ある變化を反復するものである、即ち人間の心が動物的狀態より更に原始時代を經て今日の程度まで進步發達したる徑路を其の順序に反復するものであると。

3、繼續性の原理　心の發達には、順序とか、連續とか、或は原因結果の關係とかいふことがなければ、心的內容、心的活動或はそれ等によりて起る種々の行動を理解することが不可能である、一つの經驗は他の經驗を得る要件となり、思想から思想が生じ、初步の心的過程は一つの連續したる意識の流れとなりて相互に相聯合する、高等なる心的過程は、低度の且つ一層初步なるものゝ上に築かる、かくして自個意識は一日より一日、年から年へと固執して發展するのである。

4、自個活動の原理　これは成長の原理の推論である、身體に關しては活動がなければ成長發育は不可能であるが如く、心的發達も亦心的活動がなければ其の進步は不可能である、夫故に最も固執的な心的活動

性、此の活動性を促がす所の生來の衝動の盛なるは、正常なる子供の一般的な本性である、此の原理に於て說く所の意味は、如何なる環境の影響も、如何なる種類の刺戟も、如何なる教育的訓練も、其の對象たる子供個人の活動性に共鳴して反應せらるゝにあらざれば、何等心的發達の增進に影響する所はないのである。大人は子供に對して其の教育手段と材料とを供給することが出來るが、子供の動機的活動力を創造することは出來ぬのである、子供の眞の心を理解し之を十分に捉へるにあらざれば單獨に其の教育的活動を完成することは出來ぬのである、教育とは子供自身をして自己を發達せしめ訓練せしむべき手段を講ずることである。所謂兒童の自發性、自由性、獨創力といふことは此の自己活動の原理の中に見出さるゝのである。

第十二章　嬰兒の意識

一、新生兒の意識　新嬰兒の意識は如何なる種類のものであり、何時それが始まるか、又それが如何なる過程に於て發達し、如何に其の發達を指導し得るかといふことは、實際問題として甚だ重要なることである、多くの兒童心理學者は或る時期の胎生期中にある胎兒には、全く感覺的經驗といふものがないから、從つて凡て高等なる心的作用が行はれてゐないと述べてゐる、勿論吾人には何人も二三歲以前の記憶を有するものは殆どないのであるから、如何なる時期に於て意識作用が始まるかといふことは生物學的動作の研究を基礎とし、神經學者の觀察を補助として推理と類推法とによりて判斷せねばならぬのである、而も神經學者の唱ふる所によれば凡て感覺器官は出生前可なり早き時期に於て機能的には整備して居り、八、九月位の早產兒でも正常の產月に生れた嬰兒の如に容易く感覺的刺戟に反應するものである、これによりて見るに子宮內に於て胎兒の感覺器官に適當なる刺戟が作用し能ふならば出生前に既に感覺的經驗が可能であるといふことが出來ると、されば嬰兒は例令十分に發達したる感覺器官を整備して居るとしても恐らくは漠然として來た分化せられざる意識の嫩芽を以て生れて來るものであると解するよりは外ない、兎に角嬰兒の意識は外界又は內部の刺戟の感受及反應に關係したるもので、必ず或る動作の形式と離るべからざる關係を有する過程であると見なければならぬのである、從つて唯だ單純なる反應のみが惹起せらるゝ時期には其の意識過程は矢張り單純であり、複雜なる反應が動作の上に現はるゝときには其の意識過程も亦比較的複雜に進んで居るのであることは疑ひないのである、夫故に或る心的機能、例へば感覺知覺の如きは

意識的記憶の如き機能よりも實際早く發達し、身體各部の運動の發達と共に外界との接觸經驗が增加するに從ひ高等なる精神作用の分化が起つて來るのであると考へることが出來る。

上述の如く新生兒は意識を有するかと云ふ問題については種々の意見はあるが、出生時に於ては感覺器官と腦髓とを連絡する神經及び腦髓から運動器官に通ずる神經が未だ十分に發達せざるため、凡ての感覺運動的の活動は感覺中樞の下部にある皮質下神經によりて行はるゝのであるから、意識の形跡ではなく純粹なる反射運動が行はるゝのである、出生の瞬間に於ては神經系統の發達は一樣ではなく、生後約一週間にして完全に達するのである、此の事實は新生兒の反射的動作によりても解することは出來るのである、併しそれにしても最初の意識的形跡がなければ心的生活の發達は考へられぬものである、無論實際の知的又は有意的性質を有する意識的現象は認められない、又生來の觀念といふものは全くある筈がないのであるから、感覺、感情的狀態若くは感情―知覺的狀態とも稱すべき感覺的要素と情緒的要素が混合したる鈍い不明瞭なる意識の前兆とも見るべきものが存在して居ると推定するのである、快、不快の感情の存在することは出生時から明かに示されてある。

此等の感覺、感情的狀態は直ちに二つの型式に分るゝ、一方に於てそれ等は身體の內部的條件（饑えて泣き、食欲が滿たされときの快）によつて起る、これを吾々は感情―知覺的狀態として取扱ふのである。他方に於てそれ等は外部の刺戟に對する反應を伴ふ、これには感覺的知覺の合成的部分を含んで居るのである、第一型式の意識狀態は漸次發達して個人的人格の主觀的觀念の徵候となり、後者は外界世界を認識する知覺となるのである、然し最初は自己意識もなければ、客觀的意識もない、全く兩者に分化させる萠芽として存在するのである。

嬰兒の反應表出の典型的動作は「泣き叫び」であるが、これは明かに苦痛の標徵である、此の苦痛の叫びが、始めて現世に生れ來たる挨拶である、然るに快の標徵と見るべき笑ひは全く現はれてゐない、かゝる事情からしてショウペンハウエルは『人は人生の闘からして苦痛に滿たされて居る』と悲觀し、カントは嬰兒の啼泣を以て「人間の心靈が肉體の足械（アシカセ）に入るべく强制せられたること」に對する抗議の叫びである」と解釋した、兎に角、表出に對する感情との關係は新生兒に於ては後年に於けるものと同一意味を有するものではない、大人から見ると、此の啼泣の叫びは、殆ど抑制することの出來ざる程に烈しき苦痛感情の標徵として考へらるゝのであるが、併しこれは嬰兒のことである、苦痛には相違ないが、比較的漠然たる穩和な性質の不快によりて生ぜらるゝのである、苦痛を以て嬰兒の唯一の情緒と考へるのは誤りである、適度な溫度の入浴のとき、暖かき乳母車の上に靜かに橫はつてゐるときなどに見る表出は疑もなく快の標徵である、快の感情は苦痛の感情よりも聲高く表出せらるゝ必要のないことは、有目的の理由があるからである、卽ち苦痛は救助を要し、從つて又其の標徵を必要とするのであるが、安慰の狀態に於ては其の必要はないのである。

二、新生兒の感覺　新生兒の最初の生活に於ける各感覺器官の機能は運動反應の出發點として役立つものである、就中皮膚上に觸るゝ刺戟の反應は最も著しい、唇に觸れば吸入運動が起り、軟かな掌の上に指を置けば其の小さな手を握る、足の裏を擽ぐると脚を縮める、溫度も刺戟として作用することは、浴湯のときの心地よげなる狀態に知らるゝ、味覺についての試驗によれば苦いもの、又は酢、鹽などを舌の上に置く

と嘔氣を催し、又は顏を歪めて甚だ不快なる反應を示す、然るに砂糖の溶液は直ちに嚥下せらるゝ、時として新生兒は乳や牛乳などを厭やがることがあるのは、矢張り味覺的刺戟に對する或る作用を示すものである、又、甚しく臭ふものを乳頭に塗布して置くと新生兒はそれに唇を附けることを拒む、視覺は光線に對する反應を示すが、色、形、位置、距離等は未だ存在しない、從つて物體を見るといふことは發達して居らぬ、音覺は最も低い發達狀態にある、出生時に於ては全く聾である、數日の後聽覺器官が其の機能を滿たし得る狀態にありても、それは極めて低い程度のものである、其の刺戟は何等の運動をも引起さない、種々異つた音刺戟に對して反應の變化が現はれないのである、唯だ激動的に突然起る烈しい音響のみが反應を起す、其の反應は響きの程度によりて顏面のみに限らるゝときもあるが、甚しき場合には全身の痙攣を起し叫びを伴ふものである、要するに出生時に於ける感覺の力は、觸覺に於ては刺戟の點に從つて種々なる反應を生じ、味覺、嗅覺、視覺は誘引的反應を現はし時として嫌惡を示す、聽覺は激動的反應を起すのである、此の如き感覺の發達狀態は生理的條件と一致して居るのである、胎兒乃新生兒の中樞神經系統の發達を研究せる解剖學者の說によれば、感覺器官から腦髓に來てゐる神經は同時的になつて居らぬ、交互的である、出生時に於て、中樞と末梢器官との連絡が最もよく發達して居るのは皮膚で、最も發達の低いのは聽神經、其の他の感官は兩者の中位にあると云ふことである。

三、嬰兒意識の發達　感覺といふ詞は凡て感覺的經驗の最も單純なる要素を意味するものである、かゝる概念は心理學上缺くべからざるものであるが、此の意味は實際抽象的のもので、若し吾々は知覺的の表象をばそれを合成して居る部分にまで分解し、更にそれを最少限度にまで分析し得ると假定したるときに、

此れを單純たる感覺と稱するのである、從つてかゝる感覺は思想上に於てのみ取扱ふもので、實際の心的作用に於ては常に意識的心像と結合して複合部分をなして居るのである、嬰兒の感覺の如きも恐らくは漠然たる一般感覺のやうな性質を有つてゐるものとして考へらるのである、吾々が寢床に入り、目を閉ぢて將に夢境に入らんとするときには、眼瞼を通じて來る光線や、街頭より遠く響いて來る喧騷の音や、夜具の壓、室內の溫度等種々なる印象については注意しない、唯だそれ等の混合狀態のみが漠然と感ぜられるのである、嬰兒の感覺は此の如き感よりも尙一層漠然としたものであらうと考へらる、夫故に嬰兒の意識は孤立せる單純なる感覺が結合して發達すると見るよりは寧ろ、此の混沌として漠然たる一般狀態から單一なる現象を區別し分離せしむる働きによりて發達する、卽ち分離作用は聯合作用に先立つのであると考へる方が妥當である。

さて此の分離作用は輻合作用によりて說明せらるゝ、一方に於て外界の刺戟の影響があり、他方に於て嬰兒の感覺器官は、出生當時の微弱なる機能が日增に發達して其の漠然たる一般狀態から分化が起り、色、形、音等の區別が出來るやうになるのであるが、これには運動と集中作用（注意作用）とが其の手段となり、外界刺戟の混沌たる感覺から各種別々の要素を選擇して、それを一般的狀態から分離し、特殊の經驗として保存するのである、かくして漸次感覺的要素は單なる主觀的經驗と對立する外部的性質を取つて知覺作用が發達するのである、然し、嬰兒が母の顏を見、玩具を見、又は其の他の外部の出來事を經驗し、これを知覺したるときに其の感覺的刺戟によつて直ちに主觀的快、不快を生じ、好き嫌ひの反應を起すまでには可なり長い經驗を要するのである、其の間に嬰兒の感覺が練習され確實に眞の知覺的發達狀態

に達し正確なる外界事物の識別が出來るやうになるのである、此の過程は種々なる實驗觀察の結果によれば單純なる感覺要素の單なる總和ではないのである、嬰兒の意識の內容を爲す心像、例へば母の顏、玩具の「がら〳〵」の如きは始めから全一體として意識されるのである、其の全體を構成する所の色、音、線等の感覺的要素を別々に意識するのでない、而して此の全一體は所謂物の「形」であるが、それは外形の輪廓だけをいふのではなく、其の物を構成する諸性質を含んでゐるのである、而して始め嬰兒の感覺的運動及注意によりて得られる「形」は全く漠然として不明瞭であるが、經驗によりて一層精細明瞭に認識さるゝに至るのである、此の「形」の認識は、たゞに受動的な意識の現はれたるに止まらず色、形、音、觸等の感覺的要素と共に個人の身體的活動までも含まれてゐるのである、玩具の「がら〳〵」の知覺的心像は嬰兒には目に見、手に觸れたる形及び耳に感じた音等の複合のみならず、其等と共にそれを振り動かすときの律動的運動及びそれを聞かんとする注意的動作等までも含んで居るのである。

分離作用によつて、物の有する構成要素が其の物から離れて知覺せらるゝときに始めて其等が亦結合せらるゝ、卽ち分離があるから結合があるわけである、構成要素の一つが意識されて、他の一つ又は其れ以上の他の要素を引出すときに、かゝる結合の作用を聯合と稱する、此の聯合には內部的聯合と、相互的聯合と二つの全く異りたる形式がある、內部的聯合は單一なる物の知覺の中に見出さるゝ、卽ち知覺內容の構成要素間の結合にして、相互的聯合とは單獨なる個々の經驗相互間の聯合である。

感覺の意義

刺戟

第十三章　感覺

一、感覺の意義　感覺とは知覺神經の末梢器官卽ち感官が或る刺戟を受けたるときに生ずる最も單純なる意識作用をいふのである、感官とは吾人が外界又は內部の刺戟を受け入れる關門とも云ふべき器官を稱するので、例へば耳、目、鼻、口、皮膚等古來五官と稱せられたるものは卽ち之れである、此等の器官が或る刺戟を受けたるときは其の表面に分布されてある知覺神經が直ちに興奮を生じ、之れを神經中樞に傳達する、此の興奮が中樞に達したるときは玆に一つの簡單なる心的現象が起る、此の心的現象を感覺と稱するのである、故に感覺は精神現象の最も元素的なものとも云へる。

感覺の發生には必ず一、一定の刺戟、二、知覺神經の興奮、三、興奮の中樞傳達の三條件を必要とする、感覺器官は生物の進化と共に次第に發展し來たるもので、最下等の動物にありては特殊の感覺器官と稱すべきものはなく、身體の全面が感覺器官の用をなすものである、然るに高等の動物にありては感覺器官は著しく分化し、刺戟の種類によりて、それを感受する器官は各々專門的に分れて居る。

刺戟　感覺の發生には一定の刺戟を要する、心理學上刺戟と稱するものに末梢神經を興奮せしめて感覺を發生せしむる內部及外界の勢力である、此の刺戟の性質は感覺器官によりて各々異る、聽覺器官に對する刺戟は空氣の波動であり、視覺器官の刺戟はエーテルの振動である、刺戟の種類も種々あるが、之れを內部刺戟と外部刺戟とに分けることが出來る、內部刺戟とは生理作用に伴ひて生ずる刺戟を云ひ、外部刺戟とは外界物質の運動によりて生ずる物理的、化學的の刺戟をいふ。

刺戟閾　感覺を生ずる刺戟は、如何なる强度に於ても又如何なる量に於ても直ちに感覺を生ずるものではない、其の刺戟が一定の强度に達せざれば感覺として識得せられないのである、此の感覺の最低限、刺戟識得の最小可知量を刺戟閾と稱する、刺戟閾の値の小なる程感受性は鋭敏である、甲乙二つの刺戟の異ることを始めて識得する最小限を辨別閾といふ。

二、感覺の分類　視、聽、嗅、味、觸等の如く其の器官が感受すべき刺戟の性質が明かに區別せられてあるものを特殊感覺といひ、筋肉、關節、腱、內臟等に起る感覺は其の刺戟の區別明かでないから之を一般感覺といふ、又其の刺戟が外部にあるものを外部感覺といひ、內部の刺戟によりて生ずるものを、內部感覺ともいふ、

		種類	器官
感覺	特殊感覺	視覺	目
		聽覺	耳
		味覺	舌
		嗅覺	鼻
	外部感覺	皮膚覺	皮膚
		溫覺	
		冷覺	
		壓覺	
		痛覺	
	內部感覺	一般感覺	內臟器官
		運動感覺	關節、筋肉、腱

I　視覺の一般的說明

三、視覺　視覺には色彩感覺(色覺)と明暗感覺(光覺)との二種ある、光覺とは黑色から灰色を經て白色に至るまでの無數の光度の差の感じであり、色覺とは赤、青、等種々なる色調の感じである。

1、視覺の刺戟　視覺刺戟は、光波と稱するエーテルの振動にして、光波を自ら生ずるものを發光體と稱する、普通に色と稱するものは、發光體より生ずる光波或は反射せる光波又は或る物體を通過し來りたる光波を感知したる感覺である、反射せる光波又は或る物體を通過して來たる光波を感じたるときは其の反射物體又は通過せる物體に色が存する如くに感知する、光波には二種ありて、其の一は同一波長の光波の集合せるもの、其の二は異りたる波長の光波の集合せるものである、色彩は兩者から生ずるも明暗感覺は第二種からのみ生ずる。

2、視覺器官　視覺器官は眼である、光波は角膜を通し虹彩の中央にある瞳孔を經て其の內部にある水晶體を通過し、次に眼球內にある水樣液より更に網膜に達する、角膜より網膜に至る間は屈折の度を異にする、レンズの重複せると等しき作用を有し光波は之れによりて分析せられて網膜上に倒像を映ずる、網膜は寫眞の乾板の如く光波に應じて化學變化を生ずる、膜網の組織は十種の層より成り桿狀體及圓錐體と稱する二種の細胞は網膜の上皮部に密布せられ其の上方に色素細胞の層がある、網膜の中心を中央小窩といふ、眼球の運動は種々なる筋肉によりて司られ且つ光波の性質に應じて水晶體の厚さを變じ、瞳孔の大さも變化し得らるゝの裝置となつて居る、網膜上には大腦中樞と連絡せる視神經が分布され圓錐體及桿狀體

細胞に終る。

光波が網膜を刺戟するとき生ずる感覺を視覺と稱し、網膜の上皮部の圓錐體細胞は色彩を感じ、桿狀體細胞は明暗を感ずる部分である、中央小窩には圓錐體細胞のみ密生して桿狀體細胞は少しもない、且つ此の部分は光線が網膜の感光組織に達するまでの距離は最も短くして光線の吸收せらるゝことも少いので物體を最も鮮明に見ることが出來るのである、網膜の周圍部に至るに從ひ圓錐體細胞は減じて桿狀體細胞は增加し其の外周部に於ては殆ど桿狀體細胞のみとなる、夫故に網膜の周邊は色彩を感ずることなく光覺のみを感ずるのである。

色覺光覺

3、色覺の三屬性　色彩感覺には三つの屬性がある、一、色調、二、明暗、三、飽和である、色調とは光波の變化によりて生ずる赤、青、黃等の如き色彩の差異をいふ、故に色彩は物理的に云へば、光波の振動數の大小に基くもので、即ち波長の長短の差である、之れを心理的に考察すれば凡て性質上の差となる。光波の波長の差の少いものは性質上互に相似寄りて居り、其の差が或る程度に至れば其の性質全く相反するものとなり、それより波長の差大となるに從ひ再び其の性質が類似して來る、波長の最も長いのは赤で、最も短いのは牡丹であるから、之れを波長の長短の順に配列するときは赤と牡丹とを兩端に有する一直線となるが、色としての性質は相類似して居るので色調系統より見れば兩端は相接近し一つの色彩圈を作る、之を色輪と稱す、色の種類は甚だ多いが、普通其の最も著しいものは赤、橙黃、黃綠（ヒワ）、綠、青綠（アサギ）、搗色（カツイロ）、青、紫、牡丹の十種である、此等の色を其の性質の類似したるものから順次に配列して色輪を作るとき、其の相對する色は其の質全く異り、之を混するときは無色となる、此の如き關係にある色を互に補色と云ひ、又之れを反對色とも云ふ、補色にあらざる二色を混ずるときは其の中間色を生ずる、例へば赤と黃とを混ずれば樺色となる、故に多くの色彩は或る少數の色の混合から出來て居ると見ることが出來る、此の少數の色を原色といふのである、通常赤、黃、青の三種を原色といつて居る。

色調

補色

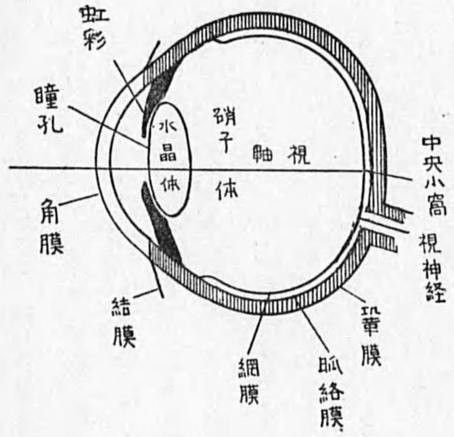
原色

色には何れも明るく感ずるものと暗さを感ずるものとある、即ち色には明暗の差があるのである、黃は最も明るい感じがし、綠、青等が稍〻暗さを感じ、紫は最も明度が弱い、同じ色でも光度によりて其の明暗の度が異る、飽和とは色彩濃淡の度をいひ光度適度にして色彩最も鮮明なるとき之れを飽和色といふのである、飽和の度を完全にするために要する明るさは色によりて異り、其の最も高き光度を要するのは赤色で之

明暗

飽和

眼球の横斷面



網膜の模型圖

イ、桿狀體細胞、ロ、圓錐體細胞、ハ、外網狀層
ニ、內顆粒狀層、ホ、內網狀層、ヘ、神經細胞層

れに反するものは青色である、薄暮に於て赤色は既に暗黒に見えたる後までも尙ほ青色を辨別し得るのはこのためである。

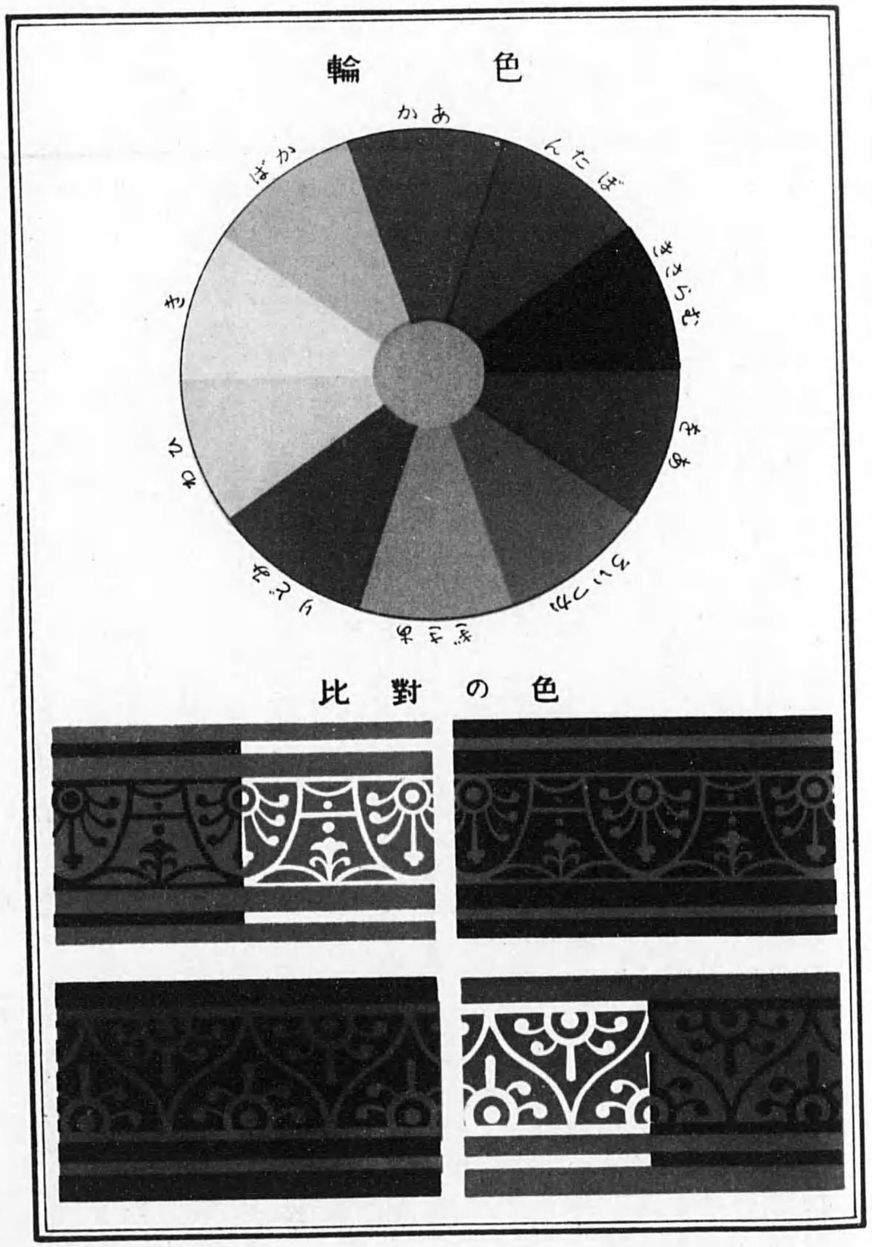
色の對比

4、**色の對比**　白紙の上に灰色の小さい紙片を置いて見るときは灰色は著しく黒味を帶びて見える、又赤と綠とを並べて見るときは、別々に見るときよりも一層鮮明に見える、かゝる現象を色の對比といふのである、對比は其の對照さるゝ種類に從ひ明暗の對比と色彩の對比とがある、色彩の對比は更に光度及飽和の對比と色調の對比とに分かれる、明暗の對比とは黒又は白紙の上に灰色紙を置くときに生ずるが如き現象をいひ、赤と綠を接近せしむるときには色調の對比が生ずる、又白地の上の綠と黒地の上の綠とを比較すると前者は暗く、後者は明るく見えるが如きは飽和及光度の對比である。

殘像

5、**殘像**　視覺は刺戟消失後も尙ほ其の興奮を殘留し原刺戟と同一又は反對の感覺を有することがある、之れを感覺の殘留といひ、視覺に於ては特に殘像と稱する、種々なる色彩を施せる獨樂を廻轉するときは其の色彩は混合して一の色になりて見える、これは一つの色彩感覺が猶ほ殘留してゐる間に他の色彩の刺戟が加はりて網膜上に於て興奮が融和するためであらうと考へらるゝ、線香に火をつけて廻轉すると環光を生ずるのも視覺の殘界が繼續するからである。

積極的殘像と消極的殘像、强き光りを一瞬間凝視して急に目を閉づると暗黒なる視野の中に同一光度の光りを見る、又日當りのよい景色を凝視して急に目を閉づると外界の景色を其の儘に見ることがある、かく原刺戟と同一の光り又は同一性質の色を殘留するを積極的殘像といふ、又赤硝子のランプか或は赤色の紙を凝視したる後急に目を閉づるか或は白い壁上に目を轉ずるときは綠色の殘像が現はる、かく原刺戟と



反對の補色が殘留するのを消極的殘像といふ。一般に強き刺戟を短時間凝視するときは積極的殘像が生じ、弱き刺戟を長く凝視するときは消極的の殘像が現はれる、又殘像は積極的と消極的との二つが交互に現はれることがある、これを殘像の動搖といふ。

6、色盲　視覺障礙の一種で、色彩の全部又は或る一二の色彩を感知し得ざるものを色盲といふのである、色彩の全部を缺けるものを全部色盲といひ、或種の色彩のみを區別し得ざるものを一部色盲といふ、色盲の大部分は一部色盲である、殊に赤色盲か綠色盲が最も多い、赤色盲は黃又は綠色を認むれども赤色は灰色に見え、綠色盲は黃及青を認むれども綠は灰色に見える、色盲の事實を始めて發見したのは千七百九十四年英國の化學者ジョン・ダルトンであるが、此のダルトン氏本人が紅色盲であつたのである、夫故に色盲のことを一名ダルトン氏病と云はれたのである、然し當時は一般人から餘り注意せられなかつたが、千八百七十五年に瑞典に於て汽車が衝突し九人の死者を出した慘事が突發した、それは機關手が色盲者であつて信號の旗色を見間違つたことに原因したのであつた、こんな事件は尙ほ他にも屢〻起つたので色盲の危險であることが一般に知られて今日では海員や鐵道從業員などには色盲者を採用せぬやうになつた、又陸海軍に於ても近年色盲の檢査は嚴重になつてゐる、殊に色彩に關係ある職業選擇には色盲檢査は最も嚴重でなければならぬ、我國に於ける色盲者の割合は男子三%、にして女子は比較的少く約〇・五%の割合である、色盲の原因には生後或る眼疾によりて起る所の後天性のものと、生來視覺器官の發育不全に基く先天性のものとある、此の先天性色盲は、網膜に於ける圓錐體が何かの障礙によりて完全なる發育を遂げることが出來なかつたために生ずるもので、全く圓錐體を缺如せるものは全部色盲となり、圓錐體が不完

色盲
全部色盲
一部色盲
我國色盲者の百分比

全に發育して青、黄を感知し得る程度に止まり、夫れ以上發育しなかつたものは紅、綠盲となつたものであらうと考へらる。

II　視覺的經驗の發達

嬰兒の視覺

1、嬰兒の視覺　嬰兒は生後數日にして明暗に對する反應を現はす、一般に初生兒には光線の直射は其の刺戟が强過ぎるものゝ如く、殊に目覺めた後などに光線を向けると明かに苦痛の樣子を示すものである、嬰兒の瞳孔は大人と同樣に光りが射して來ると收縮するのであるが、普通の言葉の意味に於ける物を視るといふことは餘程後ちに發達するもので、二ヶ月の半ば頃か終り頃になると物の形や人の顏などに目を注いで其の影を追ふやうになる、四ヶ月頃になると母の顏が認められ、五ヶ月頃になると他人の顏や物體等が認めるやうになる。

視覺發達の四階段

2、視覺發達の階段　ブライエルは嬰兒の視力發達を四つの階段に分けて居る。

イ、最初は物體を認むることなく、唯だ空間を凝視して單に感覺を經驗するのみである、初生兒は未だ頭部や目を動かすべき筋肉運動の統制力がないために物體の上に視力を集中することは出來ないのである。

ロ、生後五週間の終り頃から物を見ることが始まる、併しまだ一つの明るい物體から他のものへと凝視を轉ずる位のことである。

ハ　次ぎに前の定視と密接に聯關して明るい物や動く物體を見て、其の動く方向に視線を向ける力が發達する、嬰兒は六週間の始め頃より平面上の運動を追跡すべき眼筋の統制力が發達して來る、併し垂直運動はそれより稍〻後れる。

ニ、三四ヶ月頃になると物體に對して視力を向け、それを能動的に觀察する能力が發達する。

嬰兒の視覺と色

3、嬰兒の視覺と色　嬰兒の色に對する知覺がいつ頃から始まるかといふことを決定するために種々なる研究が企てられてあつたが、ウーレイは自分の子供につき、各二色づつ子供の前に置いて其の中の子供の好きな色を捕へしむる方法によりて試驗をしたが、六ヶ月に至りて赤色に對する愛好の樣子が現はれ、其の翌月には赤、青、黄等を區別するに至つた、種々なる色の中でも白、灰、黑には好みがない、比較的黑を好み、次ぎには灰色、白の順となつたことを述べて居る、ヴアレンテインは之れを生後三ヶ月の嬰兒に試みたが、此の攝取法は未だ適切ならざるを以て、更に二種の色毛絲を嬰兒の前に置いて其の何れを能く注視するかを觀察し、其の注視の時間を測定して嬰兒の色の愛好を決定せんとしたのである、此の試驗に用ひたる色の光度は殆ど同程度のもので、其の結果によれば三ヶ月の嬰兒にありては赤、黄、灰、綠、青等の色の感覺を經驗し得るといふことである、色の識別や知覺に關して種々なる試みがなされてあるが子供の色の知覺は一般に男子よりも女子の方が早く發達してゐるといふことに一致して居る、概して色の識別は滿二歲後である、色覺は上述の如く早くから發達して居るが色の名稱を知らぬために、綠も淺黄も凡て青といひ、其の他の色を赤といふやうに色別を混同してゐるのである。

四、聽　覺

聽覺刺戟

I　聽覺の一般的說明

1、聽覺刺戟　聽覺を刺戟するものは固體、液體、氣體等の振動によりて生ずる音波である、音波を生ず

聽覺器官

るものを發音體と稱する、音波の形式には規則正しきものと、不規則なるものとある、規則正しき振動によりて生ずる音は之を調音と稱し、オルガン、ピアノ、三味線、笛等其の他樂器の音はみな調音である、空氣の振動不規則なるときは噪音となる、汽車、電車の軌る音、工場の機械の音等は噪音である。

2、聽覺器官　聽覺器官は耳である、其の構造は外耳、中耳及內耳の三部より成る、外耳は耳殼（又は耳翼）外聽道の二部より成り、耳殼は外部に露出したる漏戸狀の部分にして、外部よりの音波を集めて內部に送る器官である、音波は耳孔を經て外聽道に入る、外聽道の周壁は之れに入り來りたる音波を反射し音の振動を便にし、而かも原音の調子及强度を變更することなく進行せしむる、外聽道の末端は鼓膜にして外耳は此所で終るのである。

鼓膜には固有の振動がないので如何なる音波にも共鳴し得る裝置である、其の內面は中耳に接し、中耳內にある槌骨の一端は鼓膜の中心に附着してゐる、鼓膜ば鼓膜緊張筋の收縮によりて緊張の度を調節し强大なる音によりて生ずる破損を避くるのである、中耳は鼓室と其の中に含まれてある槌骨、砧骨、馬鐙骨等の三つの聽小骨より成る、鼓室の一方は鼓膜にして他の周壁には膜を有する三個の小窓がある、下方にあるは歐氏管の入口にして、他の二窓は正圓窓及卵圓窓である、鼓室內は空氣を以て滿たされ、鼓膜と卵圓窓とは聽小骨により連絡さる、卽ち槌骨は鼓膜の振動を砧骨に傳へ馬鐙骨を經て卵圓窓に送る、若し外氣の氣壓に變化を生ずるときは、歐氏管の一端は咽頭腔に通じてゐるが故に、其の開閉により鼓室內の氣壓は常に外氣壓と平均を保ち正しく音波を傳達することが出來るやうになつてゐる。

中耳に隣れる內耳は又迷路と稱し卵圓窓によりて中耳と連絡する、其の構造は甚だ複雜にして蝸牛の殼の如き形をなせる骨の空所である、其の中には迷路液と稱する液體が滿たされてある、內耳は更に前庭、三半規管及び蝸牛殼の三部に分れ、中耳に接する部分は前庭で直ちに蝸牛殼及三半規管の兩方に連る、但し三半規管は身體の平衡を司る器官で平衡感覺に關係するが、聽覺とは何等の關係もないのである、蝸牛殼は二回半の廻轉をなせる殼狀體で聽神經の先端は其の廻轉の中心より內部に進入してゐる、蝸牛殼內の迷路は縱の障壁によりて上下の二部に分たれ、障壁の中央部は骨質にして外側は膜質である、此の膜質は全體として二回半の廻轉をなせる細長き膜である、而してそれは蝸牛殼の入口に近づくに從つて廣く軸心に進むに從つて狹い、此の膜を基礎膜と稱する、其の上面にコルチ氏器官を備ふ、聽神經は此の器官を經て基礎膜の各部に分布されてある。

平衡感覺の器官

三半規管

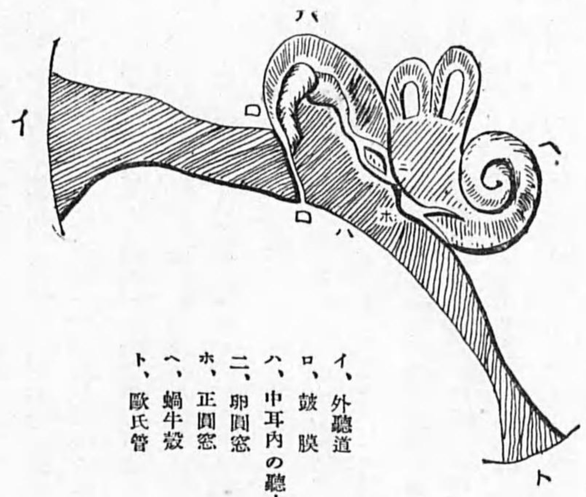
さて外界の音響が卵圓窓から前庭道內の迷路液に傳はり之れを振動せしむるときは、基礎膜は各部其の幅を異にし、無數の絃を並列したる如き形をなして居るから、高い音響は幅狹い部分に共鳴し低音は幅廣き部分に共鳴する、而して基礎膜が共鳴するときはコルチ氏器官に其の振動が傳はり複雜なる順序を經て聽神經に刺戟を與へるのである、かくして聽神經は更にこれを中樞に傳へて此處に始めて聽覺を生ずるのである、此の如き精密なる裝置によりて發音體の音は少しも變化を受くることなく其の儘中樞に傳達せらるゝのである、而して前庭道より迷路を經て入り來りたる音のエネルギーは更に又鼓室道を經て外部に出去るのである。

3、聽覺の範圍　音の高低は物理的には音波の長短、卽ち發音體の振動數の多少によりて差を生ずるのである、而して人の聽き得る音は普通一秒間の振動數二〇から四萬にして、最も耳の銳敏なる人は一二振

聽覺の範圍

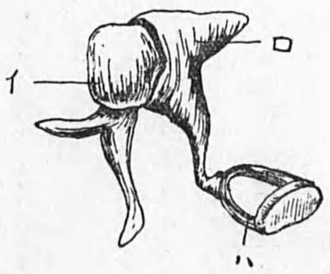
音の高低

聽覺器官の概型



イ、外聽道
ロ、鼓膜
ハ、中耳内の聽小骨
ニ、卵圓窓
ホ、正圓窓
ヘ、蝸牛殼
ト、歐氏管

聽小骨



イ、槌骨
ロ、砧骨
ハ、馬鐙骨

蝸牛殼廻轉の斷面

イ、基礎膜
ロ、コルチ氏器官

動より五萬振動までゝある、普通の樂器は一秒の振動二〇から五萬の間であるが音樂上に用ひらるゝ樂音は三十三より四千の間にある、人間の聲は最低約男子の三百から最高女子の一千位の範圍にある。

音には高低の差がある外に又强弱の別がある、音の强弱は振幅の大小によりて生ずるもので、同じ調子の音でも振幅の大なるものは强く響き、これに反するものは弱く聞える、又同じ調子で同じ强さの音でもピアノとオルガンとにては全く其の音を異にし、種々なる樂器には夫れ〴〵異つた音があり、何人も容易くこれを識別することが出來る、此の如き音の差を音色といふ。

4、**聲域**　人の聲には高低の限界がある、此の限界内を聲域と稱する、即ち聲域は人の發聲し得る最高音と最低音との間の範圍である、人の聲の最低及最高音は前述の如くであるが、此の聲域は年齡と共に漸次發達するもので、六歲頃までの子供の聲域は甚だ狹くニよりトに至る、聲域は人によりて異なるものが多い、それより十歲頃までに毎年一音程を增加し、高い方に擴張する、十歲以後に至れば低い方にも發達し、十三四歲頃には二オクダーヴ以上の聲域となる、聲域は同一年齡の人にも個人差の著しきものである。

II　聽覺的經驗の發達

音の强弱
音色
聲域
嬰兒の聽覺

1、嬰兒の聽覺　聽覺は出生時に於ては未だ其の感覺は現はれてない、恐らく凡ての感覺の中で最も後れ反て應するものであらうと思はれる、されどこれは胎兒中聽覺器官の發達が不十分であつたといふことではなく、初生兒の耳の中にはアムノード液が入つて居り、これが乾燥するには二三日を要するので、これがために聽覺を妨げらるゝのであらうと考へらるゝ、正常なる嬰兒にありては音響に對する反應を現はすのは四五日頃である、併しそれは實際的目的のために音を聞くといふよりは寧ろ響きを感ずるといふ方が適當である、中には聽覺發達の甚だ遲い子供もあるが、其の一つの原因としては歐氏管から中耳の中へ空氣を充實することの緩慢なるがためである。

音の局所限定

2、音の局所限定　嬰兒が音の發したる方向に頭を向けるやうになるのは子供によりて個人的差異が甚しいが、概して十週間から十七週間以內である、之を音の局所限定といふ、嬰兒が種々なる音に對して興味を現はすやうになるのはモイマンの說によれば五ケ月頃であるとしてゐる、生後半歲頃になれば普通の嬰兒はガラ〳〵の如き玩具を喜ぶに至るは事實である、子供は誕生頃になれば聽くことばかりでなく自ら音を出すことを喜び、話すことが出來なくとも歌ふことをする、單調な律動的音調を出して歌ふのである、聽覺の發達は又言語の發達と關係するものであるが、これは特に章を改めて述ぶることゝする。

五、味　覺

I　味覺の一般的覺說明

味覺の性質

1、味覺の性質　味覺は甘味、酸味、苦味、鹹味の四種である。

味覺器官

2、味覺器官　味覺器官の主要なるものは舌及軟口蓋である、殊に舌は味覺器官の代表とも云ふべきもので、通常味覺器官と云へば直ちに舌であると思ふものが多いが、味覺の器官は舌だけではない、又舌の中でも味覺を感じない部分もある、舌及び軟口蓋の外に味覺を感ずる器官としては口蓋弓、懸壅垂、咽頭內面の一部がある、又小兒は大人に比して味覺を感ずる部分は廣く、大人にありては舌の中央面、及び背面は味覺を有せざれども、小兒は舌の全面、頰の粘膜に於ても味覺を有する。

舌の表面には無數の小突起がある、これを乳頭突起といふ、中樞より來れる味覺神經はこゝに分布されてあるのである、其の神經の末端は球狀を爲して居るので味蕾と稱せられる、乳頭は粘膜の皺で、それには味盃と稱する凹みがある、味蕾は此の凹みの中にあるのである、液體中に溶解したる化合物が口中に入るとき、それが味蕾に觸れて、其の興奮を起し其の興奮が中樞に傳はりて玆に始めて味覺を生ずるのである、味蕾は液體でなければ興奮しないのである。

味覺の分業

3、味覺の分業　舌は一樣に各種の味を反應するものではない、殊に中央部は甚だ鈍感である、甘、酸、苦、鹹の四種の溶液を毛筆にて舌の各部に塗布するときは舌の根基は苦味に、尖端は甘味に、兩側は酸味に最も銳敏にして、鹹味には全部一樣に反應する一般に舌の周邊に近づくにつれて各味に對する反應は銳くなる。

食物の味

4、食物の味　味覺の性質は以上四種に過ぎざるも飲食物の味は無限に多い、之れは四種の味覺が複合して種々の味を生ずるのみならず味覺以外の感覺が味覺を助くるによるのである。

第一嗅覺が物の味を助くる、物には香味といふものがある、香りがあつて始めて眞の美味を生ずるのである、物の味ぢと香りは離すべからざるものである。

第二は溫度である、物の味は適度の溫度を要する、いくら美味のものでも凍りては味がなくなる、第三

には觸覺である、食物に粗滑の感じが加はると特殊の味を生ずるものである、同じ物でも舌さわりのよいものは美味しく感ずるのである。

味覺の中和

5、味覺の中和及對比　味覺の中和及對比、味覺には他の感覺になき中和現象がある、例へば酸ぱいものに砂糖をかけて食べると酸味が少くなる、又鹹いものを食べた後に甘いものを食べると一層甘味を感ずるのは味覺の對比である。

II　味覺的經驗の發達

味覺は出生時に於ては他の凡ての感覺中最も發達して居る、初生兒が、其の生命を維持するに何よりも大切なるは榮養であるから味覺が先きに發達するのも自然の要求である、小兒に於ては味覺の末梢器官たる味蕾は大人よりも口腔中に廣く散布されて舌の全表面、頰粘膜、軟口蓋及懸雍垂等にも及んで居る、嬰兒期に於ては其の榮養は多くは乳であるから味覺の種類について經驗は甚だ少いが、誕生頃から物を食べるやうになると、各種の味覺の嗜好が生じ、三四歳頃になると此の味覺嗜好は甚だ強くなり、子供の行動を支配し得るだけの力を有するに至るのである。

六、嗅　覺

I　嗅覺の一般的說明

嗅覺刺戟

1、嗅覺刺戟　嗅覺を刺戟するものは吸入さるゝ空氣と共に鼻腔内に進入する各種の瓦斯體である、これが嗅覺を生ぜしむるのは鼻腔内の嗅細胞に一種の化學變化を生起せしむるに起因する、而して瓦斯體の中でも空氣酸素及窒素は嗅覺刺戟として作用せず無臭である。

嗅覺器官

2、嗅覺器官　嗅覺器官は鼻であるが、臭を感ずる部分は鼻腔内の一部で、其の粘膜下に藏せられたる嗅細胞の散在せる所である。

嗅覺は一般に昆蟲の如き下等動物にありては著しく發達して驚くべき程鋭敏であるが、高等なる哺乳動物になると其の嗅覺は頗る鈍いのである、尤も哺乳動物の中でも犬の如きは特別に鋭敏なる嗅覺を有すれども、人間の嗅覺は他の動物に比して甚だしく鈍感である、人間の感覺器官中で最も鈍いものは嗅覺である。

嬰兒の嗅覺

II、嗅覺的經驗の發達　嬰兒の嗅覺は恐らくは出生の時から存在して居るものであらうと考へられる、嬰兒の發達中特に著しく嗅覺反應を現はすべき時期はないのであるが、嬰兒は強き臭氣に感じ易いもので、阿魏油の如きものゝ臭氣によりて容易に其の眠りから醒まさるゝのである、一般に人類は他の動物よりも其の嗅覺は劣つて居ることは、嗅覺が、人間の發達に餘り重要なる價値を有せざることを意味するものである。

七、皮　膚　感　覺

1　皮膚感覺の一般的說明

1、皮膚感覺の器官　吾人の皮膚は身體を保護し、汗腺、油腺等を維持する器官であるのみならず一般刺戟に順應して種々の感覺を生ずる、今日明かになつてゐるのは溫、冷、壓、痛の四つの感覺である、此の四種の感覺を外觸覺とも稱する、其の感覺器官は皮膚の全面に散布せる單一なる細胞、又は二個以上の細胞群で、其の中溫を感ずる點を溫點、冷を感ずる點を冷點、壓を感ずる點を壓點、痛みを感ずる點を痛點

皮膚覺の器官

といひ、此等の點は恰も寄木細工のやうに皮膚の各部に混在し、知覺神經によりて觸覺中樞に連絡せられてあるのである、觸覺は最も原始的な感覺器官で下等動物にも存在し、人類の感覺發達上最初に發生したるものは此の外觸覺で、他の特殊感覺器官は皮膚より分化したるものと考へらる。

皮膚感覺の器官は皮膚各部に於ける溫點、冷點、壓點、痛點である。

溫覺　冷覺

2、溫覺、冷覺　物理學上に於ける冷溫は熱度の高低にして一系統をなせるものであるが、感覺としては二種の類を異にせるもので、其の感覺器官も溫點冷點、と各獨立に存在せるものである、常識的には溫冷の感覺は皮膚全體に感ずるもの丶如くに思はるれども、實際は然らず冷點を刺戟すると冷を感じ溫點に觸る丶と溫を感ずるのである。

溫冷感覺の特性

イ、溫度感覺の特性、吾人の身體上の各部は一定の固有溫度を有し、外圍の關係に從ひ一定の範圍內にて變化するものである、故に身體各部に與へられたる刺戟と其部分に於ける固有溫度と同一溫度なる場合には溫度感覺を生ずることはない。

生理溫度零點

此の溫度を生理的溫度零點と稱して感覺に於ける溫冷の起點としてある。健康狀態に於ては腋下の平均溫度は三十六度である、而して生理的溫度零點より溫又は冷なる刺戟は溫或は冷覺を生ずるのである。

溫點冷點の分布及其の數

冷點は身體全部に點狀に分布されてあるが、分布の粗密は各部によりて差があり、且つ不規則である、又或る部分に於ては連鎖狀をなしてゐる所もある、其の數は一平方糎に約十三個、全身に廿五萬個である、溫點は冷點よりも其の數少く其の分布も不規則である、又連鎖狀分布は極めて稀れである其の數は一平方糎に約一個半、全身の總數約三萬個である。

溫度感覺の順應及對比

ロ溫度感覺の順應及對比、一定溫度の刺戟に長く接するときは生理的溫度零點は之に順應し、二度乃至四度の範圍內に於ては順應の結果溫度を感ぜざるに至る。かゝる現象を溫度の順應といふ。

溫湯又は冷水の中に腕を入れ暫くして前と反對に冷水又は溫湯の中に腕を入れるときは實際よりも、以上に溫又は冷を感ずる、此の事實を溫度の對比といふ、井水は夏期に於て冷く、各期に溫きは外氣の溫度との對比による。

壓覺

3、壓覺　壓覺の刺戟は壓力である紙片又は毛髮等にて輕く皮膚の表面を刺戟するときは物に觸れたる感じがする、これが壓覺で普通觸覺と稱するものである、壓覺を生ずるには皮膚の表面に分布されてある壓點と稱する部分に觸れたるときに限る、壓覺器官は此の壓點である、壓覺の辨別力は壓點の分布の密なる部分に銳敏にして粗なる面に於ては鈍い。

壓點の分布

壓點の分布は小兒及び大人に於て其の數略〻同一なるも小兒の壓覺は比較的銳敏であるのは其の身體の面積が狹いからである、壓點の最も稠密なるは額、唇、指尖、舌の尖端等で、背部の中央、腰部、足蹠等に於て甚だ粗である、壓覺は練習によりて非常に銳敏になるもので、盲人が驚くべき程銳敏なる指尖の壓覺を以て點字を讀むのは皆練習の結果である、壓點の數は甚だ多く一平方糎に少くも九個、多くて三百個を有する、全身中の毛根には必ず壓點を有する。

壓覺の順應及對比

壓覺の順應及對比　眼を閉ぢて水銀槽中に指を挿入するときは始めは其の指の全部に壓を感ずるが、後には其の感覺は消失して唯水銀表面の指に接觸する部分のみに強き壓を感じ水銀中に沒せる指の部分には壓を感ぜざるに至る、此の如き現象を壓覺の順應といふ、而して空氣及水銀接觸面に於てのみ強く壓を感ずる

痛覺

のは一方毛細管現象によりて生じたる壓と他方、順應して壓を感ぜざる部分との對比とによるのである。

4、痛覺　皮膚の表面にある痛點を刺戟するときに生ずる感覺で、太き馬尾毛を以て強く皮膚を壓するときは諸々に痛みを感ずる部分がある、これが卽ち痛點である、痛點の發見は比較的新らしいことで、昔は痛を以て壓の强いものと考へてあつたが今日では全く質の異つた別個の感覺であることが明白なる事實となつてゐる、勿論强く壓するとき又は溫度の如きも或程度以上に達するときは痛みを感ずることは實事であるが、これは同時に痛點を刺戟するに至るからである。痛覺と壓覺との別を試驗するためにコカインの溶液を塗布し又は皮下に注射するときは痛覺を失ふか壓覺は依然として存在する、又サポニンと稱する藥劑を用ふるときは壓覺は失はるゝが、痛覺に何等の影響を受けないのである、痛點の分布は全身殆ど一樣で其の數甚だ多く、一平方糎內に約二百以上であるといふことである。

痛點の分布

痛覺刺戟

痛覺の刺戟は器械的の刺戟、化學的刺戟或は熱などにても痛點を刺戟しさへすれば痛覺を生じ得るものにて、これは恐らく生物が其の身體を保護し、生命を持續するに極めて大切であるからであらう。

外觸覺の發達

II、皮膚感覺の發達　皮膚は末梢器官としては他の感官に比して甚だ大なる表面を有して居り、其の感ずる所の感覺も壓覺、痛覺、溫覺、冷覺等より其の他空間知覽等に至るまで種々なる役目を有して居る、覺兒の皮膚感覺中壓覺は出生前に發達して居ることは、早產兒などが、既に此の感覺を有して居るのに見ても明かである、而して身體各部の中でも此の感覺の最も鋭敏なのは口と指とである、蓋し初生兒の最初の興味は口にあるからである、手の掌、足の蹠等に觸れると其の指先にて握るやうな運動を起す、これは反射的の運動であるが、皮膚の組織は甚だ纖細で其の感覺は極めて鋭敏であるからである、痛覺に關してはブライエルの報告によれば嬰兒にありては大人よりも痛みを感ずること少く、稍〻年長の幼兒になると大人よりも鋭敏である、ギルバートは六歲より十九歲までの男女につき試驗したる結果によれば痛覺の閾域は一般に年少なる兒童に低く、其の感受性は女兒にありては十三歲頃男子にありては十五歲頃まで減少する。概して女子の閾域は各年齡に於ける男子よりも低いといふことがある、又ブライエルは口、舌、唇等の粘膜の溫覺冷覺に對する感受性は出生後間もなき嬰兒に於て驚くべき程大なることを述べて居る、初生兒が溫浴の際愉快なる樣子を現はすのは此の溫度感覺の發達を明かに示すものである。

有機感覺

八、有機感覺　これは生活機能に屬する感覺で、消化、呼吸、血行等の生理狀態を示す感覺である、特定の器官はないが、消化器、循環器、呼吸器等に分布してゐる感覺神經を刺戟することによりて生ずるものである、有機感覺の一特質と認むべきものは器官が平常の狀態にある時よりも異常狀態にあるときに殊によく感ぜらるゝことである、吾々が常に氣分と稱するのは卽ち此の感覺で、身體狀態に多少變化あるときに著しく特殊の感覺を起すものである。

氣分

有機感覺として感ぜらるゝものは

一、消化器官の感覺としては空腹、滿腹、渴等の感。

二、呼吸器官の感覺として通常の場合、呼吸筋肉の運動感覺あるのみなれども運動過激の際或は病氣等のため呼吸困難の感覺があり、此等の障礙が取去られたるときは安易の感がある。

三、血行の感覺としては、心臟鼓動に變化あるときに生ずる感じである。

四、其の他全身的に起るものとしては疲勞の感である。

九、運動感覺　筋肉、腱、關節等の運動器官より生ずる感覺の複合を總稱して運動感覺といふのである、其の刺戟は器官自身の運動によりて生ずるが故に之れを內觸覺ともいふ、凡て吾人の起居動作は此の感覺によらざるなく、位置を知り、努力を感じ抵抗及重量等を感知するは皆此の感覺に依賴せねばならぬのである、此の感覺の練習は實に兒童生活の發達の基を爲すもので、技能の熟達より知識の收得に至るまで最も重要なる役目を爲すものである。

一〇、感覺の發達と教育上の注意　以上述べたる感覺の中味覺、嗅覺、溫度感覺及痛、壓等の諸感覺は視聽二覺及運動感覺に比して知識收得上に貢獻する點は甚だ少いので劣等感覺と稱せらる、凡て吾人の知識の門戸は感覺であるから、此の感覺を練習し正確なる知覺を得ることは兒童の知的發達の根本をなすものである、夫故に子供の感覺器官が現在の刺戟に正しく感ずべき狀態にあるかを確むることは子供の教育上極めて大切なることである、目又は耳の感覺器官の缺陷によりて外見上劣等兒又は心的缺陷兒であるかの如くに考へらるゝことが屢々あるのである、兒童の視力缺陷の數は表に現はれたる所によると頗る多いのである、其の檢査方法の種類、及精密の程度如何によりて正確なる數は多少異つて居るが、英、米及我國等の統計を見ると兒童の一〇及至三〇%は眼鏡によりて調節を要すべき視力を有するものである、其の中最も普通にして而かも年齡と共に增加して居る缺陷は近視眼である、此の缺陷は容易く發見することが出來るもので、眼球の前後の直徑が長過ぎて、網膜の前方に光線の焦點が生ずるのである、これと反對に眼球が扁平で焦點が網膜の後方に生ずると遠視となる、此の場合には視力が失はるゝ譯ではないが、凸レンズ鏡を使用して調節しないと眼瞼筋肉の疲勞を來たす、次には亂視であるが、これは角膜若くは目の水晶體の屈折が均等を缺くために生ずるのである、其の他眼筋運動の平衡及調節を缺くもの及び斜視と稱するものがある、斜視は一方の目の視力が甚しく遠視であるがために生ずる、此の外視力缺陷として見るべきものは色盲である、色盲のことは既に前に述べてあるが其の有無を早く確むることは教育上必要なることである。

聽覺の障礙も亦所謂聾兒童の外に學校兒童の約二〇%が耳の缺陷を有することが報ぜられてある、此の如き兒童は屢々不完全なる言語發達を示すことがあり、又教室に於ても教師の云ふことを十分能く聽き取ることが出來ないため、其の結果往々劣等兒と目せらるゝことがある、全く聾となれば勿論特別の方法を以て教育せねばならぬが、目にしても耳にしても多少の缺陷ある兒童は正常なる兒童の遊び仲間から除けものにせられ易い、從つて長い間には其の性質も癖み反社會的の傾向に陷り易いのであるから、不具者に對しては身體的にも道德的にも十分なる注意と養護とを要する。

第十四章　知覺作用

1　知覺作用の一般的說明

一、知覺の意義　感覺的經驗が發達し複合すると知覺作用が起る、知覺とは感覺器官を通して來りたる現在の刺戟に意味を附ける作用である、例へば或る音を聞いて、それを單なる音刺戟として感ずるは感覺であるが、之を笛の音、太鼓の音、ピアノの音等と意味ある音として認識するのは知覺である、食卓の上にある林檎を見て、其の赤き色、圓き形のみが印象せらるゝならばそれは單なる感覺であるが、之を林檎であり果物であると意識するのは知覺である、物には種々なる屬性がある、林檎には色、形、大さ、味、匂、重量、粗滑等種々の屬性を具へてある、此等の屬性は皆視覺、觸覺、味覺、嗅覺等の種々なる感覺によりて經驗せられなければ林檎の眞の性質が解らぬのである、卽ち林檎は此等諸種の感覺の複合によりて知らるゝのである、夫故に知覺作用が成立するには第一經驗、第二經驗的感覺の複合、第三複合感覺の統一を必要條件とする。

二、直觀　物には種々なる性質があるが、其の物の性質を直接感覺器官に訴へて觀察することを直觀といふ、直觀によりて正しき知覺が得らるゝのである、一度直觀したることは經驗として永く心の中に保存せられ、それと關係ある何等かの機緣によりて再生せらるゝ傾向を有するものである、（再生とは經驗したることを心の中に喚起することである）曾て經驗したることがありて後、再び其の物に接したるときには或る感覺器官を通して其の物の有する性質の一二が感知せらるゝならば、それによりて過去の經驗が再生せられ、

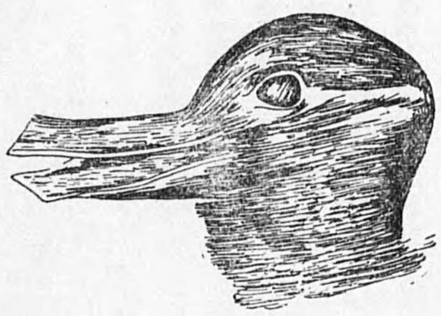
現在の感覺に入り來らざる他の屬性は再生せられたる觀念によりて補足せられ、之れを一つの統一體として意識せられ、意味あるものとして知覺せらるるのである、林檎を見て林檎であると知覺するのは、個々の屬性を感知したのではなくして一つの統一體として認めたのである、されば知覺には二つの作用がある、第一は其の物の有する感覺的要素を統一する作用であり、其の二は感覺を通して來たる印象をば之れに關係ある過去の經驗によりて補足し解釋する作用である、此の第二の作用を類化作用といふ、現在感覺の上に現はれて居る印象も若し之を類化するだけの過去の經驗がない場合には、それは意味ある統一體として知覺されずに唯だ漠然なる印象として感ぜらるゝに過ぎないのである、又同じ事物でも其人の經驗の如何によりて別々の類化作用が起り違つたものに解釋せらるゝ事がある、上の圖を見て、兎であり、鴨であると解釋するのは其の人の經驗によるのであることであるが兎も家鴨も經驗して居る人には其の最初に再生された觀念を以て解釋するのである。

三、知覺の種類　凡て外界に起る事實、現象は一定の時間及空間內に於て現はるゝが故に、これを認識する作用は空間の知覺と時間の知覺とである。

(一)空間知覺　物體の形狀、方向、位置、容積、距離等の知覺である、空間知覺に主要なる感覺は視覺及觸覺である、聽覺及び嗅覺は何れも視、觸二覺と聯合して空間知覺の作用を助くるものである。

1、視空間　視空間は物體の知覺及距離の知覺である、物體の知覺

二重の知覺



視空間知覺

は視界に於ける個々の物體の相互の關係を知り、距離の知覺は其物と之れを見る目との關係を知覺することである、此の兩方面は實際に於て區別することは出來ない、吾々は外界に於て一個の物體を見るときは必ず其の周圍の空間的關係を知覺すると共に其の物が自分より如何なる方向にあるか又幾許の距離にあるかを知覺する、吾々が常識にて云ふ空間は幾何學上の空間の如く全く空虛のものとして考へるのであるが、吾々の實際經驗する空間は物體を以て充實して居り、其處に上下左右、前後、形狀、大さ、距離等の相互の關係がある、從つて距離の知覺を離れて物體のみの知覺は視空間には出來難いのである、只便宜上之れを二つに分けたのである。

2、觸空間　觸空間も亦此の二つに分けることが出來る、空間知覺の器官たる眼は所謂遠官にして、直接物體に觸るゝことなく知覺するが、觸空間知覺は之れに反して其の物體が直接皮膚に觸れたるときに生ずる知覺である、而して通常吾々の空間知覺に於ては視覺、觸覺及運動感覺が協同して働くのである、全く視覺の伴はざる空間知覺は生來の盲人又は幼少のとき失明せる盲人のみに出來得るのである、觸覺による知覺を正確にするには手や指を動かし、物體を撫で握りなどして其の複雜なる觸覺印象を得ることが必要である、眼を閉ぢ掌を擴げて居るとき、若し其の上に小なる物體を載せたならば唯其の儘にては其の物の形狀、大さ等は極めて漠然たるものであるが、今それに指を觸れて見ると明瞭になる、又物體の形狀、大小、遠近等を眼によりて比較せんとするときは、網膜上の局所徵驗と眼筋の運動とによるのである、夫故に空間關係の知覺は、視覺觸覺及眼筋手肢等の運動感覺によりて行はるゝのである。

聽空間
嗅空間

3、聽空間、嗅空間　聽覺及嗅覺も亦空間知覺として第二次的の任務を有して居る、嗅覺による空間知覺は最も不正確にして且つ間接的である、吾々は嗅覺によりて方向を知覺することを得れども、それは身體運動によりて臭氣ある場所を求め又は風の方向等によりて判斷するに過ぎない、聽覺による空間知覺は嗅覺に比して稍ゝ正確である、聽空間は方向の知覺及距離の知覺である、方向の知覺は兩耳に響く所の音の强さの差による、左右の耳に響く音の差を聽差といふ、卽ち此の聽差が方向を決定するのである、若し其の音が左右同一に聞ゆるときは正面又は背後より來ることを知る、而して左右の方向の知覺は比較的正確なれども正面及背面の方向は往々誤ることがある、音による距離の知覺は過去の經驗により、强い音は近く、弱い音は遠いといふ聯想的關係によりて比較的に判斷せらるゝのである、夫故に聽空間に於ける距離の知覺は頗る不正確であると云はねばならぬ。

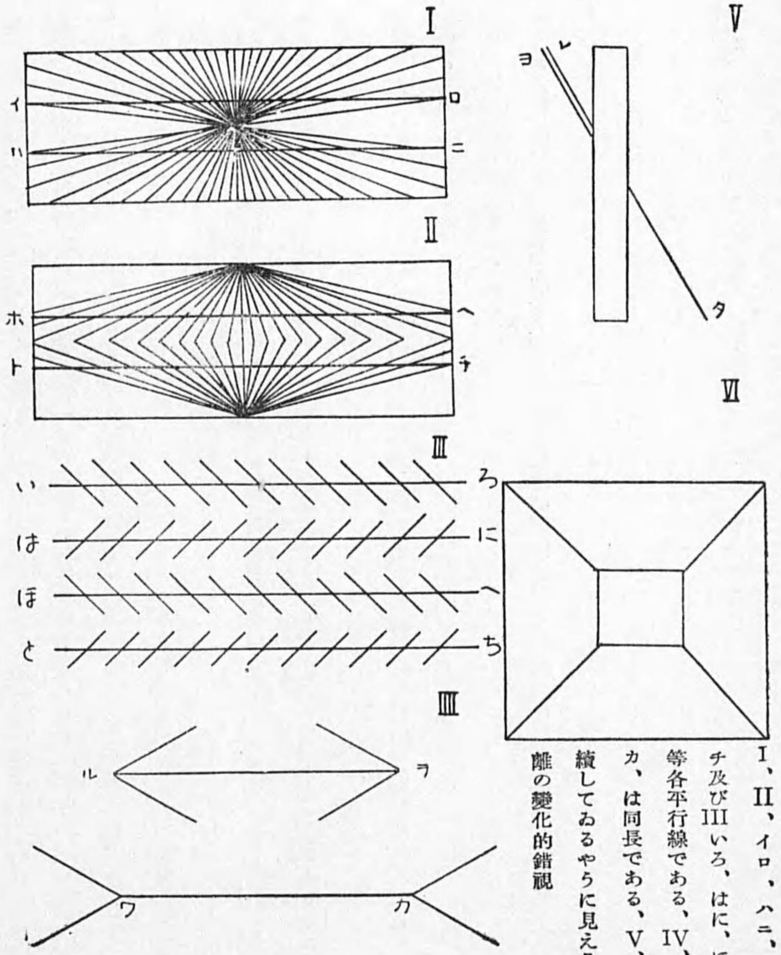
時間知覺

(二)時間知覺　或る出來事が時間の長短に就ては二樣の差別がある、一は主觀的時間で、吾人が其の出來事の知覺によりて意識せられたる時間の長さであり、他は物理的又は客觀的時間で、意識的時間と關係のない一定の標準卽ち時計によりて測定せられたる出來其の物の時間である、吾々は客觀的に同一の時間にても或時は甚だ長く、或時は甚だ短く感ずることのあるのは、其の時間內に於ける出來事の知覺によりて意識內容に相違を生ずるからである、かく意識の內容によりて時間に長短ある如く感ずるを時間の主觀性といふ。時間の長短は主として意識內容の變化及びそれに伴ふ緊張、弛緩の感と呼吸數の意識等に基いて知覺される。

錯覺

四、知覺の錯誤　**1、錯覺**　吾々は外界よりの刺戟を誤りて知覺することが往々ある、これを錯覺といふ平氏が富士川の戰に水禽の盛に飛び立つ音を聞いて敵の大軍が來襲したのだと誤り、又或る臆病者が垣根

錯視の例



I、II、イロ、ハニ、ホヘ、トチ及びIIIいろ、はに、ほへ、とち等各平行線である、IV、ルヲ、ワカ、は同長である、V、ヨタが連續してゐるやうに見える、IVは距離の變化的錯視

中樞的錯覺

末梢的錯覺

幻覺

に懸れる夕顔を見て、恐ろしい長い顔の怪物が自分をにらんでゐるとて、友人の家に驅け込んだといふが如きは有名な話である、此等の誤りは不明瞭なる感覺・豫期の觀念、習慣等から來ることであるから、之れを中樞的錯覺と稱する、又全く知覺を誤るのではないが、一定の標準から見て、其の確實度に於て可なりの錯誤があることがある、これは感覺器官の生理的構造に基くもので、何人も避け難い錯誤である、これを末梢的錯覺又は正常錯覺といふ、其の最も普通なるは視覺上の錯覺である、視覺の錯覺は特に錯視といはれてある、芝居の背景、パノラマ等は巧みに此の錯視を應用したものである。

錯視の起る原因として其の主なるのは、一、眼球運動の努力の如何によるもので、其の大なるものは過大視し努力の小なるものは過小視することから起ることがある、二、吾人は角度を見るときに、それを直角的に見る傾向がある、夫故に鈍角は小いさく見え、鋭角は過大に見えるのである、三、對比の關係によるもので、大小の差の著しきものを比較するとき同一のものよりも大きく又は小いさく見ゆるものである。

2、**幻覺**、外界より何等の刺戟なきに、物を見、又は音を聞きたるが如くに感ずることがある、これを幻覺といふ感覺中樞が甚しく過敏となれるために起る病的現象で、精神病者などに往々起ることがある、又普通人と雖も非常に疲勞したるときなには偶〻起ることもある。

II 知覺作用の發達

一、諸感の協合 知覺作用の發達は先づ第一に感覺器官の發達を條件とするもので、各感覺の聯合及び同時的作用によりて知覺が起つて來るのであるが、出生時に於ては凡ての感覺器官は完全なる發達狀態には

達して居らぬ、味覺及皮膚覺は稍〻其の機能を遂行し得るだけに發達して居るが、視覺、聽覺、嗅覺等は甚だ不完全なる狀態にある、此等の器官は二、三年の間に完全なる機能を有するに至るのであるから、從つて此の期間中に於ける心的生活の種類は此等各感覺の聯合協力によりて起るものである、感覺は最も單純なる精神要素ではあるが、凡て我々の意識する外界の事物は單に一つ〳〵の音とか色とかが雜然と分散して居るものではない、一つの物體として名づくべきものは皆色とか音とか、形狀、大小、其の他堅さ軟かさ、溫度等の內何れかの數種の性質を有つて居る、例へば視覺に於てランプを見るにしても、單に光りのみを見るのではなく、其の圓い電球の形をも同時に見るのである、嬰兒が玩具のがら〳〵を弄ぶときには手及腕の觸覺及筋肉感覺が刺戟せられ、それを振るときには聽覺を刺戟し、手の運動が視線に入るときには視覺を刺戟する、又それを以て身體の一部分を打つとき、或は口中に入れるときには夫〻違つた感覺を生ずるのである、誰れかゞ嬰兒の前で玩具を振つて見せるときにも同樣の感覺が反復せらるゝが嬰兒が他の異つた玩具を弄ぶときにも同時的の刺戟が經驗せらる、かくして玩具の色、形、軟かさ、堅さ等形狀性質の差違により及び同一器官によりて感ぜらるゝ種々なる性質によりて諸感覺の無限なる聯合が生ずる、若し嬰兒が如何なる玩具にせよ、同一方法で同一感覺器官のみを刺戟するならば、恐らくは孤立的な感覺のみが得らるゝに過ぎないであらう、然るに外部の物體からの刺戟が同時的に各感覺器官に作用し且つ違つた方法で刺戟せらるので其の結果嬰兒の意識に「物」の感じ、即ち感覺的知覺が發達するのである、此の如くして出生時に於ける漠然たる嬰兒の意識が明瞭となり恰も濛霧が次第に霽れて山が見え、人家が見えるやうになるが如く事物の正確なる知覺が起つて來るのである。

嬰兒の觸空間知覺

二、注意作用の發達と知覺　第二に知覺作用は注意作用の發達に從つて明瞭正確となる、幼少兒の注意は甚だ動搖し易く、數秒間も同一事物に注意を集中することは困難であるから、事物の印象は不完全で不正確である、從つて感覺的知覺も正確を缺く、夫故に事物間の類似及差違を辨別し、其の性質等に注意せしむるやう練習することは知覺作用の發達を促すに大切なることである、一般に子供は生後數年の間に驚くべき程の心的發達をなすのであるが、尙ほ日常生活の事物に對する觀察は精密を缺き、殊に想像力が盛になつて來ると自己の經驗を想像によりて解釋せんとする傾向があるために、雲を見て煙であるなどゝ誤つた知覺を爲すことがある。

三、空間知覺の發達　1、**嬰兒の觸空間知覺**　空間は數學的に云へば一點から縱、橫、厚の三次方向に擴がる線によりて表はさるゝが、心理學的にも矢張り中心から三方向に擴がつて居る、然し數學的空間に於ては點は如何なる所にも定めらるゝが心理學的空間に於ては知覺する各個人の位置によりてのみ定まるのである、而して各個人は其の空間の中心であるが故に各自自身から前後左右上下の三方向を理解するのである、幼少なる子供は此の如き空間を知覺するには先づ子供自身の四肢の位置運動、大きさ、形ち、等を知ることから始まる、子供が自分の身體の空間的條件を最初に經驗するのは主に運動感覺即ち筋肉及關節等に於て起る所の印象である、休止の狀態にありても尙ほ所謂位置の感と稱する一般的意識があるのである、頭部の運動殊に頭部を擡げる運動が始まり坐居及起立に於て身體を直立に保ち得るやうになると、內耳の中にある三半規管の平衡感覺が其の機能を始じめて全身の水平及垂直間の種々なる位置の意識が起りて來る、かくして坐居、起立、匍匐等の運動能力の發達につれて子供自身の空間知覺が發達する、自分の四肢の視